
異世界で能力者は踊れない

火田シャープ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界で能力者は踊れない

【Nコード】

N7575W

【作者名】

火田シャープ

【あらすじ】

能力者が跋扈する世界において、能力がないのに剣を志す青年、遠見テツ。彼は無能力の変人として有名だった。そんな彼はある日、道場の仲間たちと共に奇妙な空間の渦に巻き込まれる。飛ばされた先は、能力者の存在しない『普通の世界』という名の『異世界』。転移に伴って仲間たちの能力は失われてしまう。そんな中、元から無能力だった遠見テツは、何ひとつ変わらないまま相対的に彼らより有利に立つことになる。

第1話

あのとぎ、差し出された手を握るべきだったのだろう
か。

「なあ、あいつってなんで道場辞めないんだ？」

「さあ。無能は無能なりに頑張ってるのよ」

これみよがしに嫌味をいって、ふたりの道場生は青年の横を通り過ぎていく。その嫌味をいわれた当人は、まるで聞こえていないかのように振り下ろす腕を止めない。

正中線で構え、予め定められていた空気の間隙に沿って下ろされたかのような見事な軌跡。10年近く繰り返されてきた動作だ。そこには寸分の狂いも見出せない。

吐き出される息は常に一定で、機械のように正確な動作だった。

飽きることなく、注がれる粘着質な悪意にも惑わされることもなく、ただひたすらに素振りを続ける姿は鬼気迫っていた。汗が止めどなく流れ落ちる。目付きは虚空に固定されている。口元は緊張で引きつったように笑みの形を浮かべている。

最初は馬鹿にしたように見ていた周囲の者たちも、得体の知れない空気にやられたのか、気味悪そうに離れていく。

季節は夏で、空は嫌味なほどに晴れ渡っているというのに、青年の周りだけは空気が淀んでいるように感じられた。いや、それは錯覚なのだろうが、確実に周囲の空気は腐っていく。

永遠に続くかと思われた時間は唐突に霧散する。

振り下ろした腕を止めた青年は、溜まりきった疲労を吐き出すかのように長い深呼吸をした。

腕には痺れたような疲労感が襲ってくる。酷使された筋肉は新鮮な酸素を脳にねだる。空気から選り好みして酸素だけ取り出した好き嫌いの多い肺臓は、瞬く間に有能な運び屋のヘモグロビンに酸素の宅配を依頼している。

身体の中でそんな修羅場が発生しているとも知れない青年は、ただ与えられる恍惚感に身を委ねていた。それは肉体的快感と精神的快感とを同時に味合わせしてくれる甘美な苦痛だった。

武術はマゾっけがないとできるはずがないと彼は常々思う。相手を打ち倒すための技術であると同時に、攻撃に耐えるための技術でもある。そこには必ず耐えなくてはならない苦痛が存在するのだ。好き好んでこの世界に身を置いている以上、押しなべて武を修める者はマゾなのではないか。

他の道場生が聞いたら怒り狂いそうなことを湯だった頭で考える。

流れ落ちる汗は不快だったが、本来の目的である体温調整という役割は真面目にはたしているらしく、皮膚の表面から奪われていく熱をかすかに感じる。この一瞬のために、苦しい鍛錬をしているといってもいい。

青年が行っている日々の鍛錬の目的は、他の道場生と異なるところにあった。彼らが実戦で勝利するために鍛錬を行うとしたら、青

年は鍛錬のために鍛錬を行っていた。つまり、はなから「試合で勝つ」といった目標は眼中に存在しなかった。

なんて格好つけたことをいったものの、それは負け惜しみと周囲には捉えられていた。なぜなら彼は試合で負けることが常だったからだ。

10年も剣を振り続けていれば、それなりに古参の部類に入ってくる。それはたとえ成人に達していないような年齢であっても、身体が完成してくる時期を迎えれば、実力もそれに伴ったものとなる。少なくとも、剣を握り始めて間もない新米剣士には、そう簡単に負けることはない。

この世界に『氣』と呼ばれる代物が存在しなかったならば、の話であるが。

いつの間にか人類と共にあった氣と呼ばれる概念は、科学が発達した今日においても、重要な位置を世界で占めている。それは人々を癒す力であったり、傷つける力でもある。

氣を扱える人間は珍しくない。素人であっても、身体の調子を整えたり、美容のために血の巡りをよくしたりなど、様々な行為を行うことができる。むしろまったく氣を扱えない人間の方が稀であった。

剣を振ることが三度の飯より好きである青年も、その稀な人間に属していた。

自分が氣を扱えないことを嘆いた経験はない。氣を扱える人間は、スポーツや実社会で多くの利点を有するが、扱えなくとも生きてい

けないわけでもない。

けれども、古くから気という力と共に生きてきた人類は、それを当たり前のものでして受け入れているから、オリンピックや数々の試合では、気の扱いの熟練度が勝負を決めるといい。それらの恩恵を受けられない人間では、そもそも同じ土俵にすら上がれないのだ。

本来ならば、青年は剣の道に進むべきではなかった、ということになる。あくまで世間一般でいう価値観に従って判断されれば。

しかしながら、そんなことは関係ない、とばかりにこの歳まで剣を振るってきた本人からすれば、文字通り剣を振るうのは己のためだけだ。誰に勝ちたいとか、誰には負けたくないとか、そういった競争の精神はすっぱりと彼から抜け落ちてしまっていた。

それをいままで生きてきて不便に思ったことはなかったし、異常だとも思えなかった。ただ、普通の人とは少し違った考えをするのを自覚していただけだ。

夢中になって剣を振るつているときが一番幸せだった。この行為が誰かに迷惑をかけているのでもないのだから、文句をいわれる筋合いはないだろう。

心地良い疲労感に身を委ねていると、不機嫌なオーラを隠しもしないで佐々原スイはやって来た。

女性としては平均的な身長に健康的なプロポーションを保っている。ロングとまではいかないものの、水に濡れたように艶やかな髪は、見ていて気持ちのいいまでにさらりとしている。道場でも一目

置かれているこの少女は、青年——遠見テツの幼なじみだった。

もつとも、そんな肩書きはすでに用をなさなくなって久しいし、ふたりの仲が険悪なのも周知の事実だった。

「まだ残ってたの？ もうみんな帰り支度始めてるわよ」

腕を組みながら、「わたしは怒っています」と身体全体でアピールしながらスイはいう。

「そうやってるとまた掃除押し付けられることになるでしょうね、テツ」

「うん、そうかも」

テツはいつも最後まで練習をしていることが多い。掃除の当番は本来決まっているもののだが、彼が残っているために、体よく押し付けられていた。今日もまたそのパターンなのだろう。

掃除自体は嫌いではないので、テツは仕方ないな、とばかりに頭をかいた。みなが敬遠する掃除だが、彼は綺麗好きな性格もあってそれほど苦ではない。

彼がのほほんと返事をする、呆れたようにスイはため息をついた。

「あんたは何にも思わないわけ？ 陰口いわれたり、掃除押し付けられたり」

「掃除はぼくが遅くまで練習していたのが悪いんだよ。陰口は仕方ないよ、本当のことだし」

あっけらかんという彼をスイは心底軽蔑した眼差しで見た。ポールが上がったのに走り出そうとしない競走馬を睨みつけるように。

「呆れた。どうしようもないわね。そんななら、さっさと剣術なんて辞めちゃいなさいよ」

いうや否や、道着の裾をひるがえしてスイは去っていく。力強い足取りだ。その後姿を見るだけでも、彼女がかなりの使い手だとわかる。

テツは彼女にコテンパンにやられたときのことを思い出す。昔はなんとか優勢を保っていたのだが、最近ではまったく勝ち目がなくなっていた。気を巡らせた一撃は重く、身体能力も底上げされた彼女はテツの遙か先を走っていた。

現在、この草切道場でテツが勝てる相手は数えるほどもない。まともに気を操る剣士にとっては、身体能力のブーストができない彼をいなすことなど朝飯前だ。軽く見られている理由も、実力主義であるこの世界においては当然のことといえた。

佐々原スイは、数少ないテツの友人である。昔はもう少し良好な関係だったのにな、と彼は嘆息した。やはり、彼女のような優秀な能力者にとっては、自分のような無能力者は気に食わないと感ずるのだろうか。

「まあ、そんなことより掃除だ掃除」

夏とはいえもう少しで日が落ちるだろう。暗くなるまでには掃除を終わらせたいところである。空腹感も覚えているし、のどもカラカラだった。

竹刀を手に取ると、テツは掃除をするために人気のなくなった道場へ向かった。

第2話

掃除自体は手馴れていたこともあって時間はかからなかった。予定通り、完全に日が落ちるまでに終わらせると、帰り支度を始める。手を洗うついでに身体も軽く水で拭いたから、汗の不快感はそれほどでもなかった。

道着をまとめてナップザックに入れる。

あとは道場の使用が終わったことを報告すれば終わりだ。

さすがに空腹で目が回りそうだった。しかも母屋から流れてくるうまそうな料理の匂いがさらに追い打ちをかける。

断食をする修行僧のような心持ちでテツは母屋へと向かった。報告するべきは草切の家の人間である。10年も通っていることもあって、テツはすっかり顔なじみだった。

珍しいことに、能力者主義が多い旧家において、草切の人間はテツを差別したりはしなかった。それはひとえに、幼少から目を見張るほどに鍛錬に明け暮れる彼の姿を知っているからだだった。

才能はない、と自覚しつつも動じない姿は、気を扱うエキスパートとして名高い草切をしてうならせるほどであった。

純和風の建物は威風堂々としていて見応えがある。こんな家に住めたら毎日鍛錬三昧なのにな、とテツは羨ましく思う。彼の家はなんてことない平凡な家なので、満足に動き回れるような庭などなかった。剣を振りたくても、そのスペースがないのだからどうしよう

もない。一度、部屋の中で素振りを行っていたら、畳をすり減らすは危険だとはと、家族の怒りを買ってしまった。それ以来、テツの家では素振り禁止になっている。

中庭を望める廊下を進んでいくと、前から見覚えのある人物が歩いてきた。

肉食獣のようなすらっとした体つきに、栗色の髪を邪魔にならないうよう背中に流すように赤いヘアバンドでとめてある。テツに気づいたこの家の長女、草切ミコトは人好きのする笑顔で「よう」と手をあげた。

「テツはまだ練習してたんだね。お姉さんは感心だよ」

「こんばんは、ミコト姉さん。道場の掃除が終わったんで報告にきました」

そういうと、ミコトはのどに小骨が刺さったかのような表情を浮かべる。

「あれ、確か今日はテツの当番じゃないだろ？」

「最後まで残ってたのがぼくだったんで」

「……また押し付けられたのか。ったく、あいつら」

とつちめてやらなきゃな、と息巻く彼女に苦笑する。

「そんな気にすることでもないですよ。掃除だって鍛錬のうちです」

ミコトは目元を手で覆って、「かあーっ」と親父臭い声をあげた。どうしてこの人は女子力を自ら下げるような真似するんだろうな、とテツは引きつった笑みを浮かべた。それでいて道場生からは憧れの眼差しを向けられるのだから、世の中というのはわからない。

テツは目の前のたわわに実った膨らみに目を奪われる。思春期の男子諸兄には劇薬にもなりかねない代物である。シャワーを浴びたあとであるのか、タンクトップ一枚という格好なので余計にたちが悪い。

男所帯である道場の娘であるせいかな、そういった部分に疎いところがあるようだ。幼少のときから才能ある剣士として注目されていたこともあって、視線に慣れた彼女は周囲の目に鈍感な性格になったのだった。

「そうだ、テツ。よかつたら夕飯食べていかない？」

十年來の顔なじみというだけあって、テツはよく草切家の夕飯に招待される。昔はよくお邪魔したもののだが、最近はめっきりそういうこともなくなっていた。

空腹に苛まれる脳みそはすぐにでも了承したいと思ったようだが、根性でそれをねじり伏せる。

色よい返事を期待できないのを悟ったのか、答えを聞く前にミコトはテツの腕をとった。逃がさないといわんばかりにホールドしてくるので、空腹感を彼方に飛ばす柔らかさが彼を襲った。

「まさかこんな美人のお姉さんのお誘いを断るはずがないわよね

？」

「いや、ぼくは」

きつと擬音語ならば、むにゅ、とでも表現されているだろう密着攻撃の激しさはさらに増す。男としてはもつとサーブスしてほしいところなのだが、文明社会に生きる知的人たるテツの理性はなんとか劣情の腕を振り切った。

「わ、わかりましたよ。わかりましたから、早く離れてください」

「むふー、新鮮でよろしいなあ！ やっぱ男はチェリーちゃんがいじりがいがあるよ」

「あなた彼氏持ちでしょうに……」

付き合っている彼氏が聞いたら卒倒しそうなことをのたまうものだから、テツは生ごみにたかるハ工を見るような目付きを向ける。

「大丈夫だって。あの人の前ではちゃんと自重しているし」

にしし、と笑ってようやくテツを開放する。ミコトのスキンシップが激しいのも恒例のことだ。小学生のうちは、お姉ちゃんお姉ちゃんかと慕っていたものだが、さすがに中学以降は気恥ずかしいものがある。

しかも、現在では付き合っている男性がいるというのに変わらないのだから、まだ見ぬミコトの彼氏には同情を禁じ得ない。自信過剰かもしれないが、テツは自分が間男にでもなったかのような心境だった。

無駄に長い廊下を渡り切ると、人気の多い居間についた。障子を開けて中に入ると、見知った顔が勢揃いしている。数時間前に別れたスイも食卓を囲む一員となっていた。

テツに気がつくのと露骨に嫌な顔をしたが、それは一瞬だった。さすがに夕食の場で空気を悪くするような行為は自重するらしい。

彼女の隣には草切家の次期当主である草切キョウイチの姿があった。テツが小学校に通い始めて以来の顔見知りなので、幼なじみといっても過言ではない関係である。もっとも、最近は顔を合わせて遊びに行くということなくなってしまったが。

ちなみに、キョウイチとスイは親公認で付き合い合っている仲である。こうして家族の団欒に彼女が混ざっているのも様になっている。そこには、信頼する間柄に流れる空気があった。

「父さん父さん、テツが混ざっても大丈夫だよな？ いや、今夜はすき焼きだつていったら、どうしても食いたいって駄々こねるもんだからさ」

「いや、それは……なんでもないです、はい」

捏造話に抗議しようにも、ミコト相手ではどうにもならない。ミランダ権利をすっぱかされた被疑者のような心境で諦める。

居間の上座に腰を下ろしている男性は、微笑ましく「構わんよ」と着席を促した。ミコトとキョウイチの父であるこの男性は、現在の草切家当主である。そして当然に道場主でもある。

テツにとっては、幼少の頃から世話になっている頭の上がない人物だ。修練の最中には厳しく、甘えを許さない。それが身内であってもだ。しかし、ひとたび剣を離せば、気さくでダンディズムあふれる偉丈夫になる。

食卓を囲む面々は、草切の家の者にスイとテツを加えたものである。中には、道場のヒエラルキー最下層に位置するテツを嫌がる様子もある。とはいっても、当主が許したのだから文句をいえるはずもない。

一方のテツは物怖じしない態度で腰をおろす。勝手知ったる他人の家、とばかりに茶碗を受け取る。ひとりだけ浮いたような席順になってしまったが、致し方ないだろう。

当主の声と共に面々が「いただきます」というや否や、特号サイズの鍋に箸が突っ込まれる。身体を動かすのが仕事という連中ばかりなので、食事の量も並ではない。具材を投入するそばからひつ攫っていきこうとする。あれ、まだ煮えてないんじゃないの、というテツの視線を無視してミコトの箸は踊っている。

席の近い者同士で会話に華を咲かせている中、テツは黙々と料理を胃に収める作業に余念が無い。かなりの空腹であつたし、このメシで親しく話をするのはミコトくらいだ。

話がなくて気まずい、なんていうレベルはもう数年前に卒業したので、別に食べるだけ食べてもなんら問題なかった。

それにしても、とテツは感動する。自分の家でやるすき焼きとはかなり違う。そもそも、すき焼き自体滅多に現れない料理だし、これはなんだ、肉が素晴らしいじゃないか。映えるような紅色に適度

な霜降り。とてもじゃないが、テツの家の予算ではお目にかかれな
い代物だ。

「……なんだよ」

スイが今日何度目になるかわからない胡乱な目線を送ってきたの
で、動かす手をとめる。

「飛び入りで参加したっていうのに、よくもそんな遠慮なしに食
べられるわね」

特に内容がある会話でもなかったので、それを無視して食べるの
を再開すると、顔を赤くしたスイは声を荒らげて何かを喚いた。隣
のキョウイチが「まあまあ」となだめている。

あの口うるさいのと付き合っているんだから、キョウイチはやる
なあ、と感心する。テツであれば、何か特典付きであつても彼女と
は付き合いたくないと思った。

つつがなく夕食が終了すると、テツは家に電話して帰りが遅くな
ることを親に告げた。たまにあるようなパターンだったので、彼の
親も簡単に返事しただけだった。

さて、とくつろいでいる面々に近寄っていく。居間に残っている
のは、同世代のメンツだけである。

「もう少し休んだら手合わせして貰えないかな」

テツは軽い調子で頼み込む。

「あんたも懲りないわね。いつもボコボコにされるくせに。自分が弱いつて自覚してる？」

それはもう、と迷いなく同意する。自分がこの三人に勝てないのはわかりきったことである。慢心した馬鹿ならともかく、彼らは油断無くテツの相手をする。隙あれば躊躇なくそこをつくつもりだったが、なかなかそんな状況に巡り合ったことはなかった。

やる気のスイに対して、草切姉弟は気が進まない表情を浮かべている。勝負はわかりきっているから面倒だ、という弟に対して、姉はテツをぶちのめすことに抵抗を感じているようだった。

そこは口八丁で説得して、「本当に軽くいいから」と参加させる。仮にも道場主の後継者たちだ。手合わせを頼まれて、いつまでも拒否できる立場ではない。

適度に腹もこなれたところを見計らって、居間から望める中庭に顔を並べる。

使うのは竹刀だ。いくら竹刀だといっても、直に打ち込まれれば怪我することだってある。特に能力者である人間の一撃は非常に重い。打ちどころが悪ければ、簡単に骨は折れる。

居間には、残っていた少数の草切家の人間が夏風に身を委ねながら観覧していた。よく冷えたスイカの共にはうってつけの余興らしい。

防具は付けない。軽い打ち合いだ。それでも気を扱えないテツにとっては、一撃はそのままダメージとなって打ち据える。逆に能力者にとっては、ダメージの軽減もお手の物である。

キヨウイチとの立会いは3分とかからずに終わった。テツが打ち込み、キヨウイチは冷静に受け流す。動体視力も強化される能力者はまさに鉄壁を誇る。テツは竹槍を片手にB29を相手にした旧日本兵より相手が悪かった。

続いてミコトが相手を務める。凜とした中段の構えはまさにお手本のように隙がない。攻めあぐねている間に、電光のような一撃を見舞われる。テツは殆ど視認せずに長年の経験則で竹刀を立てる。

強い衝撃。そのまま持っていかれそうになるのをこらえ、返しの一撃も受けきる。それだけで腕は痺れて使い物になりそうにない。

居間の見物人から感嘆の声がもれた。気を扱えない人間が能力者相手に数合といえども打ち合う光景は、なかなかお目にかかれない。テツを見下した目で見ていた者も、少しはやるようだな、と口を歪める。あくまで無能にしては、というレベルの話だったが。

結局、最後には受けきれず、したたかに右肩を打たれてミコトに敗れる。テツは呻き声をあげてその場にうずくまった。

「だ、大丈夫か、テツ」

慌ててやって来るミコトを手で制しながら、テツは乱れた息を整えた。熱を帯びている肩が徐々に冷える。本気で試合をしていたらこっちはいけない。おそらく、骨まで粉碎されて使い物にならなくなっていただろう。

大丈夫、と事務的に返事すると、彼女は普段浮かべない悲痛な表情を一瞬だけ浮かべた。まばたきした次の瞬間には、踵を返してい

る。テツは首を傾げて、次の相手であるスイを呼んだ。

彼女は不機嫌そうに竹刀を揺らしている。もっとも、テツと顔を合わせていて機嫌のいいことなど皆無に等しい。

彼女は動きやすいように七部のワークパンツを履いている。上はプリントTシャツで涼し気な出で立ちである。手にした竹刀はいささか不恰好に見えた。

「スタミナだけはあるみたいね、あんた」

草切姉弟を相手にして、いまだ余力を見せるテツを皮肉げに褒める。

「基礎練習は嫌というほどやってるんだ」

腕立て、腹筋、背筋、スクワット、走りこみ。地味な基礎トレーニングをテツは好んで行った。すでに10年も前から徐々に回数を増やして現在に至っている。おかげで体つきはがっしりとした筋肉質である。それでも、俊敏性を失わないギリギリの体型を維持していた。

ふたりは竹刀を中段に構えると、どちらともなく静止した。辺りには張り詰めた空気が満ちる。

佐々原スイは、いつてみれば炎だった。外見とは裏腹に、その瞳には闘志が見て取れた。溢れんばかりの生气に満ちた面構えである。

ク、と口元を歪める。テツは幻の火炎にでも焼かれた気分になった。少しでも油断すれば、骨まで焼き尽くす火炎だ。じりじりと皮

膚を焦がされる錯覚。無様にひん曲がった口元からは、堪えきれない喜悦が漏れた。

それは流星の煌きのようだった。

鋭い踏み込みと同時に繰り出された唐竹割りには、テツの反応速度を超えて襲いかかる。まともに受けたら押し切られる。考えるよりも早く、身体は一步ぶん後退する。

鼻先をかすめる感覚。手加減のない一撃だった。

それを見ていたミコトは諷めるようにスイの名前を呼んだ。だがそれに答える暇も与えずに、テツは全力で反撃に移る。

——それでいい。

下手な情けなど不要だった。こいつらはぼくを一撃でのせる力を持っている。ミコトとキョウイチはとことん手加減していたのだ。気を扱えない相手を前にして、強者は慈悲の心を見せる。だがそれでは足りない。足りないのだ。

テツが求めているのは圧倒的な敗北だ。自身を完膚なきまでに打ち倒す力だ。理不尽なまでに届かぬ力だ。

これこそが己を動かす動力となる。憧れとも憎悪ともとれない複雑な感情。幼いときから感じていた、どうしようもない劣等感。

なのに感じるできない悔しさ。

無残に打ち倒され、力の無さに嘆くことができたなら、とつくにテ

ツは剣を捨てていただろう。どうやっても勝てない世界で、どうして剣を握り続けることができるだろうか。

だが不幸なことに、彼は何度地面に叩きつけられようが、悔しさを感じることができなかった。それは当然の事実として受け止めるしかない。自分が能力者に勝てないのは必然なのだ。だから何度敗北しようが、予定調和でしかない。そこに確率は絡まない。築きあげてきた修練の結果さえも意味を成さない。

テツの反撃は軽くないなされ、態勢を立て直す間もなく一撃される。布団を叩いたような軽快な音がした。右側面から叩きつけられ、勢いそのままに距離をとる。

「っ……」

もれる苦痛。相手は回復を待つてくれるほどお人好しではない。追撃でさらに打ち込まれる。竹刀は一撃目しか支えきれず、続けざまの連撃は綺麗にテツの身体に吸い込まれた。

木刀のように芯には響かないが、十分に激痛を感じさせる。それでもまだ続けられる。

「ク」

痛みを堪える呻き声なのか、何もできずに防戦一方の己を嘲る声なのかわからない。テツの口元は笑みの形で歪む。彼の治らない癖だ。このせいで、立ち会う相手からは気味悪がられる。治そうとしてもなかなか治らないので、すでに諦めた。いまでは逆に、これが自分らしいと気に入ってさえいる。

相手にしているスイは見慣れているのか、眉を顰めながらも手を緩めることはない。一方的な蹂躪だ。完全に彼女のペースに呑み込まれたテツは、防戦の他に取り道はない。

それでも後ろに下がるだけではなかった。打ち込みの一瞬の間をぬって半歩進む。力で押し切られながらも前へ前へと進もうとする。

「このっ、体力バカ！」

ついに堪忍袋の緒が切れたのか、スイは大きく竹刀を振り上げる。その好機を見逃すはずもないテツは、この立会いで初めて小手を決める。

空気を裂くような澄んだ音がした。

スイは一瞬呆けたあと、「な……」と驚愕の表情を浮かべる。ダメージ自体はまったくといっていいほどない。しかし自分が一本決められたのは驚愕すべきことだった。相手は無能力者である。道場でも上位の使い手である彼女が小手を取られたのは、完全な失態である。

大勢に見られていることを思い出したスイは、羞恥に顔を赤くした。奥歯を噛み砕く勢いで強く噛み締める。

目の前のテツは自身よりも圧倒的上位者から一本取ったというのに、相変わらず気味の悪い笑みを浮かべている。そこには喜びの感情は見出せない。ガラガラとした視線は小手の一本など興味はない、といったようだった。

叩く。それも力任せに。スイは手加減を忘れたように竹刀を叩き

込む。

慌ててミコトが止めに入った。強かに打たれたテツは地面に伸びてしまっている。いまさらながらに、気を失った相手に剣を振るおうとしていたことに気づく。

「う、ごめん、ミコトさん。頭に血が上っちゃって」

「……まだまだ未熟だつてことだよ。それよりも、早くテツの手当してやらなきゃ」

複雑そうな表情を浮かべたミコトは、テツを起こすのを手伝うよう手招きする。彼女たちは気を失ってさらに重さを増した青年の身体を担ぎ上げる。

居間には、救急箱を携えたミコトの父がどっかりと腰を下ろしていた。手早く痣を見て取ると、妻に氷を持ってこさせ、患部を冷やす処置をした。

スイは居心地悪い様子でそれを見ている。

「修行不足だな、スイ」

「そ、それは……はい。面目ありません」

大振りになって小手を打ち込まれたことといい、その後に冷静さを失ってしまったことといい、見逃せない大失態だ。

落ち込む彼女から目を離すと、当主は呆れた様子でテツを流し見た。能力者相手に見事に立ち回った青年を心中で賞賛する。

防戦一方だった中でも、根気強くスイが隙を見せる一瞬を待ち続けていたのだ。キョウイチやミコトが見せることがない隙だ。スイの性格を読んだ上で、わざと大振りになるようにけしかけたのだらう。

精神面では並ぶ者がいないほどの屈強さだ。それだけに惜しいと思う。この青年に気を扱う力を与えなかった運命を恨む。

だがそれと同時に、もしなんらかの形で気を扱う能力が得られる機会を与えられたとしても、この頑固者は絶対に受け取ったりしないだろうことが予想できた。または、何かの手違いで、能力者として誕生した世界があったとしても、テツは凡百の才で終わるに違いなかった。

難儀な男だな、と目を覚ましたら激痛にのたうつだろうテツを見て、当主は嘆息した。

第3話

草切の流派では真剣も扱う。無論、竹刀と真剣では勝手が違うから、竹刀では敵なしという者であっても、真剣を持たせれば話は違ってくる。もつとも、現代において表立った真剣試合は禁止されているので、おいそれと切った貼ったということは行われない。

それでも、一般人には知られない領域で、真剣試合は行われることがあった。

草切の道場では、真剣で斬り合うことはない。せいぜいが居合練習を行う程度である。普段とは異なった修練であるため、道場生にはなかなか人気があった。もちろん、刃物を扱う危険なものであるため、みなもふざける様子はない。

道場生には、古くから家が剣術家である者が多いため、自前の刀を所持しているのも少なくない。彼らは居合練習をする日、こうして自らの家に伝わる刀を持参してくるのである。

昔とは異なる状況とはいえ、武術に携わる人口が多い今日では、正式な申請さえしていれば刀剣類の所持も比較的容易に行える。とはいっても、一般人が気軽に手に入るような値段ではないので、当然テツは自分の刀を持っていない。

まるで自らの誇りを示すように腰の愛刀をなでている道場生たちを、テツは不思議そうに眺めていた。

「やあ、テツ。おまえの刀はうちで貸すから、そんなに物欲しそうに見なくてもいいんじゃないかい？」

「相変わらず、ばくの気持ちとはかすりもしない提案ありがとうございます」

草切の刀剣類が保存してある蔵の前に道場生は集まっている。その中でもミコトの存在感は生き生きとしている。騒がしいのが苦手なテツでも、彼女の明るさは嫌いではなかった。

純白の道着を身にまとっているミコトの腰には、重量感を感じさせる一振りがおさまっている。まるで身体の一部のように自然体だ。

気を扱う剣士にとって、剣とは身体の延長ともいわれる。自分の気がスムーズに流れるかどうか、それは古くからの命題とされてきた。その点、彼女の愛刀は一心同体ともいえる相性の良さを感じさせる。

「それにしても、相変わらず陰気な顔してるじゃないか。生理？」

「いつぺん脳神経外科にでもいつてみるのをおすすめしますよ、ミコト姉さん」

本気で脳神経がやられているのでは、とテツは心配する。この人は平気で下ネタに走るから始末に負えない。

「いきなり失礼なやつだな、君は。こんな健常な人間、そうそう見つからないわよ」

えへん、と胸を張るものだから、ただでさえ目のやりどころに困るテツは目線を逸らす。そのせいで嬉しそうに口元を緩めたミコトには気づかない。

取り繕うように、

「ミコト姉さんが昔から頑丈なのは知っていますよ。なんとかは風邪をひかないといえますし」

「まあ、あれだね。美少女は風邪ひかないんだよ」

「せめて美女にしてください。あなたとづくに成人してるでしょうに」

げんなりして指摘すると、怒って反論してくるかと思われた当人は喜色満面でテツの言葉を反復する。「美女か……」にへへ、と初めて告白された中学生のように頬を赤くする。

「お姉さん、美人だからね。テツみたいな男の子の視線独り占めにしちゃっても無理ないかなっ」

「もう少しお淑やかなら、いうことないんですけど」

「いやいや、駄目だよ！ わたしには彼氏ちゃんがいるんだ。そんな迫られても、テツとは一緒になれないよ……」

「そんな間男的な役割を期待されても困ります」

何いつてんだ、あんた、という視線を投げかける。ミコトはどういうわけか、多少残念そうに「あ、そう」と頬をポリポリかいた。

こんなふざけたノリであっても、草切ミコトはこの道場でも屈指の実力者である。気を扱う人間ならば、男女の身体能力の差はあつ

てないようなもので、むしろ能力のコントロールは女性の方が先天的に優れているといわれている。

チラチラと視線をよこす周囲を鬱陶しく思いながら、あまり構ってくれるな、とミコトにアイコンタクトを飛ばす。だが、受信した当人は、まるでわかっていないのを全身で表現するように小首を傾げた。

「それにしても、せっかくの真剣日和だっていうのに、なんでテツはそんなテンション低いのかなあ」

そういうミコトは確かに普段より五割増しでテンションが高い。

「男の子なら燃えるシチュエーションだろ？ ずっしりとした真剣の重量感。精神の奥底を映し出すような鈍色。鞘から放つときの透明な音色」

ああ、ああ、と身体をくねらかす姿はお世辞抜きで色っぽい。頬を上気させた彼女の目は、どこか違う世界を見ているようにとろけている。

おかげで、その空気に当てられた男性剣士は気まずそうに離れていく。テツもできることなら、こんな無機物に欲情するような特殊性癖を抱えた人間とは一緒にいたくない。

「今日は刀を思う存分に愛でられる、またとない日なのよ！ なのにテツったら」

顔をずい、と近づけてくる。どうしたらこんない香りがするんだろつか、とテツは考える。まつ毛の長さまで確かめられる距離だ。

それでも、ここで引いたら男が廃る、というひとりルールでもって、彼は逃げるわけにはいかなかった。

「待ちに待った彼女との初体験！ 初々しいふたりは彼氏の家でついに結ばれる。だというのに、肝心の男の剣がたたないっ。ああっ、おれのバカチン！ あそこがたたないだけに」

「全然うまくないです」

剣の素晴らしさを説いてるはずなのに、まったく違う方向に話がそれている気がしてならない。それを指摘するべきだろうが、したところで馬の耳に念仏だろう。

「その話はミコト姉さんの実体験ですか？」

「ばっか。んなわけないでしょ。わたしの初体験はつつがなく平穩無事に事無きを得たわよ。大した波乱もなく」

「かわいそうな彼氏さん……」

少なくとも男にとって、好きな人との初体験はそう軽く扱われて嬉しいわけがないだろう。まだ見ぬミコトの彼氏に憐憫を感じてならないテツである。

どうでもいいような話をしているうちに、辺りには人数が増えてきていた。スイとキョウイチの姿もある。ふたりともすでに帯刀しているようだ。

「刀か」

何気なしに呟く。

「ぼくは西洋刀の方が好みなんですけどね」

そもそも気の扱えないテツにとって、頑丈さよりも切れ味に重きを置いている刀は命を預けるに値しない。もしも彼が刀でもって、能力者の一撃を受けたとしたら、そのまま両断されるのがおちである。

刀身をへし折られないように流し受ける技法もあるのだが、そんな高等技術ができるのは相当な熟練者でなければならぬ。そもその問題として、一撃が視認できるかどうかの問題なのである、彼にとっては。

その点、頑丈さを念頭に置いた西洋剣は気質に合っているといえた。何より、ショートソードならば、盾も扱えるのがなんとも憎い。一撃の重さを求めても意味がないので、手数と防御の堅さを極めるべきだ、とテツは考えている。

そんな現実主義な趣向が気に入らなかったのか、ミコトは不満顔だ。彼女のように気を十分に扱えれば、刀は切れ味良し、耐久性良しの敵知らずの魔剣にもなる。しかも彼女の腕ならば、斬鉄すら可能になるのだ。

「美術的な美しさがあるのは同意できますよ。特にミコト姉さんの得物は業物ですし」

真剣を用いた演舞は絵になりますよ、と褒める。「えへへ、ありがとつ」と彼女は満足顔である。どうやら話題を逸らすことに成功したようだ。この御仁は刀のうんちくを語らせたらきりがないのだ。

不毛な口頭戦闘が始まるのを阻止できたのは僥倖だった。

「ん、どうやら人数も集まってきたようだね。当家の刀を借りた者はついてくるように」

歴史的な文化財としても価値がある蔵の扉を開ける。外見はすでに見慣れたものではあったが、内部を目にすることができる機会は少ない。そのため、蔵には用のない人間も好奇心で中を覗いていた。

テツは最後尾について行く。

蔵の中は薄暗く埃っぽい。しかしこのかび臭い雰囲気が好きだった。歴史を感じさせる古び方だ。ささくれた柱の一本一本に膨大な時間が眠っているのだと思うと、自然と頭がさがる思いがした。

順次に練習用の刀を受け取って、蔵から出て行く。初めは浮かれていた輩も、この辛気臭さに当てられて逃げるように後にする。なんと情緒がない連中だな、とテツは少しばかり呆れた。

「はい、テツのはこれね」

ずしりとした重量感を感じる。刀は好かない、と漏らした彼であっても、間違えば命を奪うこともある鉄の塊を手に入れば慎重にならざるを得ない。それと同時に興奮してもいる。

現金なものだよな、と苦笑すると、見透かされたのか、ニヤケ顔のミコトがいた。

なんとなく気に食わなかったので、ノーコメントで去っていく。後からは「テツも男の子だねえ、うんうん」という嫌らしい声が追

ってくる。

ここでいい返したところで口舌の争いに勝てるとは思っていない。そのまま無視をして出口を目指す。戦略的撤退である。

蔵の入り口付近は、外の空気と蔵の空気との汽水域だ。妙に生温かい気配を感じ、背中が粟立った。

「どうした？」

蔵の出入口付近でスイと談笑していたキョウイチが問う。

「え、いや。なんか急に寒気がしてさ」

「やめてよ、そういうの。ただでさえ薄気味悪いのに」

彼氏の家の蔵に対して散々な酷評だとは思うが、スイの感想には全く頷ける。

草切家の蔵は、荘厳な歴史観を感じさせると共に得体の知れない不気味さも併せ持っている。知覚できない力を操る能力者には特にそう感じさせるのだろうか、スイはいつもより元氣のない様子だ。

「戦乱を生き抜いたボロ蔵だ。嫌っていうほど人間の歴史を見てきたんだろうさ」

幼い頃から見慣れているせいもあって、キョウイチは蔵に大した興味を持っていないようだった。

生きているわけではない。だが、物も99年と使えば魑魅魍魎に

化けるといふ。長きに渡って人の営みを見てきた蔵も、何かしら宿つていても不思議ではない。

その中で、ひとり、テツは悪感が収まらず困惑していた。傍目にもわかるくらい顔を青くしている。すわ、ただことではないと気づいた面々が心配する。

「どうしたんだ、本当に。体調でも悪いのか？」

「ミコト姉さん……わからないけど、やばい気がする」

足早に蔵から離れていく。あまりの剣幕に周囲の道場生はハトが豆鉄砲をくらったような顔をして、それから馬鹿にし始めた。暗いのが苦手だか何だかと思われたのか、これ幸いにと毒を吐く。

本格的に気分が悪くなってきたテツは地面に膝をついた。冷や汗が止まらない。

「テツっ、休んだ方がいい」

慌てて介抱しようと近づいてくるミコトの背中の方こうで、空気が揺らいだ。

形容しがたい音がした。よく小学生のときに聞いたような音だ。下敷きをくの字に曲げたあと、反発して戻るときに発せられる、あの間の抜けた音。

あ、と口に出したときにはすでに遅い。空間を捻るようにして歪は広がっていく。蔵のそばにいたキヨウイチとスイたちは一瞬でのみ込まれてしまった。異変に気づいた道場生が悲鳴をあげて逃げ出

していく。

道場からは、騒ぎを聞きつけた年配たちが出てくるも、すでに手の出しようがない。人智を超えた現象が起こっている。みな呆けたように立ち尽くしてしまっている。

「あ……」

いままさに、ミコトまでもみ込まれようとしていた。彼女の身体半分は空間の渦に巻き込まれて跡形も無い。それでも生命活動に支障はないのか、恐怖に染まった目で己の身体を見つめている。

少しの間。

目が合った。テツがいたのは境界線といえる場所だった。これより先に行けば、あの渦に巻き込まれるのは確実だ。現に、すでに道場生が少なくない数姿を消した。

目が合っている。懇願するような目だ。普段のおちゃらけた姿からは想像しにくい。この人は傷つきやすいし、寂しがり屋な性格をしているのだ。ずっと一緒に剣を学んできたテツにはわかる。

助けられない。そう彼の脳が判断している。すでに半分以上のみ込まれている。いまから助けに行っても遅い。

助けられないのだ。

だというのに、自然と足は動き出していた。

「なんだよ、これ。意味わかんないよ」

見捨てるべきだ。普通そう考える。現に彼以外、誰も助けようとする人間はいない。当主はどうしたんだ。親が頑張らなくてどうする。いつも威張っている連中はどうした。能力を使えば、ぼくなんかよりもほど効率よく助け出せるはずだ。いつもぼくを馬鹿にする連中はどうした。いまこそ勇気を示すときじゃないのか。

差し出された手を握る。白い雪のような肌をしている。剣を握るには相応しくない。

潤んだ瞳を向けられる。そんなんじゃない。自分はそんなつもりで助けようと思ったわけじゃない。ただ、なんだ。ただ勝手に身体が動いてしまったのだ。頭では見捨てるべきだと考えて、身体は躊躇せずミコトを助けに走っていた。

くそ、救えない馬鹿だ、と自分を罵る。どちらか一方なら良かったのだ。助けるなら、全身全霊で助けて、見捨てるなら悪逆非道に見捨てるべきだったのだ。なのにこうして中途半端にも手を握ってしまった。

この馬鹿野郎、とあらん限りに自分を罵倒した直後、テツは巨大な力の渦にのみ込まれていった。

第4話

努力すればいつかは報われると、幼い頃は信じていた。物語の中の人物は、たとえ才能がなくても努力を続け、ついには天才を打ち倒す。敵が強大であっても、諦めなければいつかは越えていける。

自分に才能はないと最初からわかっていた。それでも、努力すればきつとどうにかなるはずだ、と彼は信じていた。

世の中は平等である、なんていう文言は憲法の条文の中にしか存在していないくて、現実には劣化した残りカスのようなものしかない。幼き日の彼の心中は穏やかではいらなかったが、それを黙って受け入れるほど人間ができてはいなかった。

才能がないならば、人より何倍も努力すればいい。天才が1とかからず成したものを、10かかっても成せればいい。そう考えていた。

だが、世界の仕組みは彼の想像以上にわかりやすいものだった。

努力だとか、才能だとかは、そもそも『気』という力を扱えない彼には問題にすらならなかった。スタート地点が違っていた。同じ土俵にすら立っていなかったのだ。

能力者には勝てない。それは絶対的真理だった。ルールから道具に至るほぼすべての事柄は、能力者による運営を前提に定められていた。差別などという代物ではない。それが当然のことなのだ。世界の大多数からすれば、それはただの事実なのであって、差別とい

うより区別だった。

だてに剣を毎日振っていただけあって、剣筋は目を見張るものがあった。背格好は少々剣術には向かないほど大柄であったが、俊敏さも持ち合わせていた。だが、能力をもたないゆえに、彼はただの変わり者でしかなかった。

同期にやられ、後輩にやられ、男にも女にも等しく敗北し続けた。そしてそのうちに、彼もようやく理解した。

—— ぼくは勝ち負けを考えてはならないのだ。

剣を振るうのは勝つためではない。前提から間違っているのだ。真剣でもって、刺身のツマを切るようなものだ。用途が間違っている。

剣を捨てることは考えもしなかった。無心で竹刀を打ち下ろしている時間は彼の宝物といえる時間だった。

悔しさも、能力を持てない無力感も、気づけば大人になっていたように、どこかに置き忘れていた。

立会いのたびに相手にもされないで打ち倒される。火照った打ち身と、冷たい地面の感触はもう数えきれなくらい経験したものだ。肌をくすぐる緑の葉と、どこか懐かしい湿った土のにおい。身体から根が生えたような気がしていた。大気の塊をその身に受けているはずなのに、重たさなど感じない。どこまでも空は透明で軽やかだった。

クソったれな青空だ、とテツは思った。

同時に跳ね起きて辺りを見回す。テレビで見たことがあるような片田舎の一本道だ。舗装されておらず、軽自動車が一台通れるかどうかという横幅しかない。

違和感を覚えている。テツが慣れ親しんだ自然とは微妙に違う感覚。見慣れているはずの太陽も、今日は他人の空似であるように見えた。

周囲にはテツの他に巻き込まれた道場生が点在していた。彼を含めて男5名に女5名。バランスよく巻き込まれた人数が欠けることなく見受けられるのは、喜ぶべきなのだろうか。

そうともしないうちに、数人が呻き声をあげて覚醒し始めた。

「……」

状況はまったく掴めていないが、一番近くに倒れているミコトの頬を軽く叩く。何回か繰り返すとようやく彼女は目を開けた。

数瞬ばかり情報を整理するように辺りを見回したあと、狼狽した様子で彼女は口を開く。

「な、何があったのよ……?」

「……」

「ここはどこ? なんでこんな所に」

同じように混乱する様子で道場生が集まり始める。その中にはキ

ヨウイチの腕に縋りつくスイの姿もあった。みな一様に互いの顔を宇宙人でも見たかのように見合わせている。中には混乱して声を荒げる女子もいた。

テツはそんな中で、自分でも嫌になるくらい冷静を保っていた。じつと右手を眺めてみる。あの訳のわからない渦にのみ込まれる直前、ミコトの手を取った右手だ。己の一部を大罪でも犯した罪人を見るような心持ちで観察する。

隣ではいよいよ状況に耐えられなくなっただのか、口論が始まっていた。ミコトとキョウイチが中心となつて必死に宥めようとしているが、如何せん、このときばかりは普段のリーダーシップも発揮できないでいた。彼ら自身も状況が掴めず混乱している身だ、集団ヒステリー気味になつている場をおさめるのは酷な話だった。

何の得にもならない怒鳴り合いに加わる気にならないテツは、分をわきまえているといわんばかりに集団の端でいっぱしの遭難者気取りの顔をしていた。

少なくとも、この場が草切道場の付近でないことは明白だった。あの付近の地理は、10年来の往復によって自然と頭にインプットされている。周囲2、3キロの範囲であつたなら、裏山に寝転んでいたとしても自分の位置はわかるはずだ。

現在の見慣れない一本道とは一度も出会つたことはない。空気の匂いも、日の光もよそよそしい感じがしてならない。

だが、なんとか説明しようと思えば説明はできる。

——要するに、非科学的な状況に陥つたのだ、ぼくたちは

非科学的な渦に巻き込まれたのだから、非科学的な状況に放り出されただけの話であった。普段から理不尽な力に翻弄されてきた彼からすれば、有り得ない状況とはいえなかった。むしろ、あの不気味な空間のねじれに巻き込まれたというのに、五体満足で生存していることに感謝せねばならないだろう。

つれづれと、芭蕉のごとく思いを巡らせていると、興奮気味だった集団は一転、悲壮感溢れる空気をもし出していった。どうやら、自分たちがどこか遠くの場所に飛ばされたのだと気づいたらしい。近くに民家は見えないし、そもそも母国であるかすら怪しい状況だ。

女子数名はハラハラと固まって涙を流している。卒業式とは違って意味でやり切れない気持ちだ。キョウイチと男数名は深刻な顔で太陽の位置がどうたらと話している。

「テツ、一応聞くけど、おまえ携帯は持っていないよな」

練習の前だったらそれもあり得たかもしれないが、さすがに道着の中に携帯を忍ばせるほど携帯依存症ではない。どちらかといえば携帯嫌いである方だ。

持っていない、と首を振ると、連中はさして落胆もせずに興味を失ったようだった。あの様子からするに、誰も連絡手段を持ち得ていないのだろう。

みながみな、道着と刀一振りという、サバイバルするには場違いな出で立ちである。陽が高いとはいえ、このままでは野宿するはめになるかもしれない。しかしながら、野宿するには適していないアイテムの充実ぶりだ。

「とにかく、人を探そう」

まとめ役であるキョウイチがいうと、みんなが同意する。そんな中、テツは自然と付かず離れずの距離を保って見ていたから、男子のひとりが面白くなさそうに顔を歪めているのを見つけてしまった。

あいつか、とどこか納得できる気分で内心納得する。いつもキョウイチと反目する傾向がある男だ。実力的に申し分ないのだが、少々気性が荒い。実力主義が色濃い世界ではあるが、自分より強いからといって相手を全肯定するわけでもない。

男子は元より、女子にも頼りにされているキョウイチが気に食わないのだろう。翻って、自分の人望の無さに気づいていないのは致命的だった。これではただの嫉妬でしかない。

誰もが黙々と足を進める。テツは自然と列になって進む一団の真ん中に位置するスピードを保って歩いて行く。

視界には、ゆらゆらと揺れるスイの後ろ髪が映っている。気のせいか、いつもより精彩を欠いているように見えた。

「……スイ、調子でも悪いの？」

「別に、何てことない」

なぜわかったのか、という顔をして、すぐに顰め面になる。

「こんなわけのわからないことになってんのよ。誰だって疲れるでしょ」

「そうだね」

「そういうあんたは普段と同じような顔してるのね」

皮肉げにいうものだから、これだけいえれば心配するほどでもないか、とテツは思った。

が、話をしているうちに、他の人間も同様に疲れた表情をしているのに気づく。

能力者は身体のポテンシャルを引き上げることができる。いくら精神的なショックが続いているとはいえ、この疲れ様は異常に思えた。普段から、彼らをつぶさに観察してきたテツだからこそ、本当に疲労にやられているのだと察した。

前方の集団にいるミコトに目を向けると、やはり釈然としない顔をしている。のどに小骨がささったような、違和感を覚えつつも正体が知れないもどかしさを感じているように見える。

「体調？ 悪くはないはずだよ。でもなんというか」

同様の質問をしてみると、案の定の反応だった。

「ダルいというか、身体が重いというか……妙な気だるさを感じるのよね」

ミコトは手を握り締めながらいった。

同様の症状は、見る限り全員に等しく現れているようだった。し

かし程度の差はあるようで、ミコトのように不快に感じている者もいれば、指摘されて初めて気づく者もいた。

何か感染症にでもやられたのか、と勘ぐったが、当のテツ本人には症状がない。

歩みを止めるわけにもいかず、そのまま集団と共にしながら、彼らとの相違点を考えてみる。

考えられる原因は、ひとつしかない。――能力の有無だ。

だがどういうことだろうか、と下唇を噛む。彼らの気を扱う能力はいわば加護のようなものだ。有利に働きこそすれ、悪影響を及ぼすことは万に一つもないはずなのだ。

考え事をしながら道なりに進んでいくと、前方に影が見えた。ようやく人と遭遇できるようだ。先頭を歩いていたキヨウイチは「おい！」と腕を振って呼びかけている。他の面々もどこか安堵した表情をしていた。少なくとも、人間がいることだけは確かなようだ。人影は騎乗しているようだった。砂埃をあげて二騎が近づいてくる。

「馬、だと……？」

「いまどき、馬？」

同じように疑問に思ったのか、ミコトとテツの声がかぶる。現代世界において、いまだに馬を交通手段として利用している地域は限られてくる。昔ながらの伝統をいまに残す場所か、途上国くらいで

はないだろうか。

目の前で馬の手綱を操り、ふたりの男はテツたちを見下ろした。

明らかに外人だとわかる風貌だった。筋肉質な身体を鎖帷子や部分鎧でおおっている。髪はくすんだ金髪で瞳は青い。コーカソイド特有の出で立ちだった。

異様な雰囲気の外人に当てられたのか、空気が一転してマイナスに転嫁した。

「あ、あの」

「……」

キョウイチの呼びかけには答えず、代わりに腰の剣をふたりの男は抜き放った。くもった鉄の色だった。一瞥して、剣本来の用途に使われていたことが理解させられる。ところどころ欠けた刃が冷たい死の匂いを漂わせている。

友好的でないことは一目瞭然だった。だが、刺すような殺気に当てられた一同は言語を発することすらできない。彼らは剣士であっても、本来の得物は竹刀である。腰に備えている剣は実用には使えない。

「武器を捨てろ」

よどみなく発せられたのは警告だった。僅か一言。余計な単語を一切含まない命令は、これ以上なく平易な構文である。

気圧されながらも、キョウイチは刀を抜くべきか迷っているようだった。人数の利では優っている。腐っても草切道場の筆頭だ。無抵抗で半身たる刀を捨てるわけにはいかなかった。

無言の時間が過ぎる。そうしている間に後続が追いついていた。騎士らしき五騎に、荷馬車が二台。あつという間に取り囲まれてしまふ。それでも10対7と人数は勝っているが、すでに道場生のほとんが戦意を喪失させていた。

テツは片手をあげて、そつと腰の刀を地面に下ろす。

「おいっ、テツ！」

キョウイチの咎める声があるが、

「下手な真似はしない方がいいと思う。こいつら、なんか普通じゃない」

「く……」

それは彼も同意だった。剣を合わせるまでもなく、ひしひしと実力は感じられる。それと同時に、こちらに対する悪意もだ。

捕まったらいけない。それは確実だ。だが、この場を切り抜けられる可能性はほぼ無に等しいと直感している。

「そついいなりになるなよ、臆病者！」

いい放つて刀を抜いたのは、キョウイチを敵対視していた男子だ。さすがというべきか、豪胆というべきか、物怖じしない様子で構え

ている。

「逆らわない方がいいよ」

「無能力は黙ってな。こいつら、只者じゃなさそうだが、おれだつて……！」

張り詰めた空気。ひとりの男が地に足をつけた。

180センチはゆうに超える巨漢だった。筋肉隆々としている。それでいて馬から下馬する体捌きは軽やかなものだった。

テツは偶然にもその男と目が合った。合ってしまった。

「ひっ」

心臓を鷲掴みにされた気がした。なんなのだ、あの目は！腐ったドブ川のように濁っている。そして恐ろしいまでにねっとりとした視線だ。身体の皮膚を丁寧に剥がされていく錯覚に襲われた。嫌な汗が止まらない。テツはいままでこんなおぞましいものを見たことがなかった。

自分はあまり性格がよろしくない、と自覚していたが、この男はそんなレベルの話ではない。関わる者すべてを不幸にするような腐臭を放っている。それに比べれば、かつてテレビで見た犯罪者のなんと生優しいことか。

腰を抜かしたテツに興味をなくしたのか、その大男は酷くゆっくりとした動きで刀を抜いた男子の目の前に立つ。

「なんだ、やるつていいのかよ。いいぜ、あい——」

血飛沫が舞う。肩口からななめに斬り下ろされた剣は、寸分違わず仕事を遂げた。不敵な笑みを浮かべた男子の上半身が滑り落ちる。切り口からは、まだ湯気を立てる身体の構成物が溢れ落ちた。

長い沈黙だった。それから、思い出したようにめいめいが悲鳴をあげ、吐瀉物を撒き散らし、へたりこんで失禁した。

「それで」

意味がわかるのがかえって不幸だった。これで言葉が通じなければ、言語的恐怖は味あわなくて済んだというのに。

テツには男の声が、人の発するものだとは到底思えなかった。思いつく限りの毒物を煮込んだ鍋がボコリ、と吹立つ映像が脳裏をかすめる。耳にしているだけで正気が失われていくようだった。だといつのに、そのテノールの声色は聞く者の注意を惹きつける魔性があった。

「それで、他に意見のある者は？」

逆らえるはずなど、なかった。

第5話

家に帰りたい、と荷馬車に詰め込まれたスイは思った。荷馬車はひっきりなしに揺れて乗り心地は最悪だし、すえた匂いが酷い。平時なら少しの間だっただけなのに空間だった。

豚を屠殺するように人間を切り捨てた男は、殺した人間の着ている袴を珍しく思ったのか、躊躇なくはぎ取っていた。もちろん、使用されることがなかった刀も回収されている。

抵抗の意思をなくしたスイたちは全員の刀を奪われ、手足を縄で縛られた。歩けるように余裕をもたせてあるが、逃亡することは不可能に思えた。この連中は、逃げる素振りなど見せたら間違いなく斬って捨てるだろう。

品定めするように全身を眺められた。スイを含め、残っている女子は5名だ。彼女たちの脳裏は、考えたくもないのに嫌な想像で埋まっていた。だが意外なことに、乱暴されることもなく、男子と同じ扱いで拘束され、いまに至る。

慰み者になる予想は外れたものの、荒れくれ者らしくない態度に不信を覚える。いや、手を出されなかったことは喜ぶべきことなのだが。

さらに厄介なことに、仲間内でも親密だと思われた関係の者同士とは一緒にならないように馬車を分けられていた。頼みの綱のキヨウイチはもう一台の方に囚われている。幸いミコトとは同じ乗り合わせだが、あまり親しくすればどうなるかわからない。

それに、とスイは見慣れた幼なじみの顔を盗み見る。

いの一番に刀を捨てて命乞いをしたテツがいる。いつからこいつは臆病者になったのだろうか。昔はもう少し男らしかった気がするのに。

内心で文句をぶつけてみても、当の本人はどこか見当違いの中空を眺めている。ときおり、馬車に揺られて首が人形のようにカクカクと上下した。

捕らえられたみなは、絶望したように顔を俯かせている。その様子を、数人の女性が油断なく見張っている。どう見ても戦闘向きではない格好だ。中世の村娘といった風貌で、スイの目から見ても美人ぞろいだった。状況からして、あの男たちの仲間なのだろう。

顔見知りの道場生が殺された。その事実彼女の精神も大きく疲弊させていた。キョウちゃん、と精神安定剤よろしく恋人の名を口に転がす。鼻の奥につん、と鈍い痛みを感じる。

スイは不安で押しつぶされそうだった。

—— 血の臭いがした。

惚れ惚れするような一撃だった、とそれを語るならそう評価する。思いがけないところで出会ったテツの理想とする剣筋だった。『気』というブーストに頼らない、純粹な剣技。

敵わない相手なら腐るほどいた。それは道場生であり、幼なじみであり、姉のような存在であり、当主であつた。

だが、見本にしたい、と思える人物に出会つたのは初めてだった。それが人殺しの剣を扱う人物であつても。

目を閉じれば、鮮明に思い出せる。むせ返るような濃い血の臭いと共に。

忘れないうちに、何度も何度も繰り返し想起する。もしも、あの剣を受けたのが自分であつたらなら、同じように斬り捨てられていただろうか。圧倒的な一撃だ。刀のような細身をもって、かの振り落ろしを正面から受けられるはずはない。少なくとも、無能力者たるテツにとっては。

いま彼を捕らえている集団の人間が能力者でないことはすでに気づいていた。拘束される際、何気なく「すばらしい能力の扱いですね」とカマをかけてみたところ、変なものでも見るような対応を返されていた。

テツにとって扱うことのできない能力だが、それがあること自体は感じられる。つまり、相手が『気』を扱えば、彼には気配として感じられるのだ。雰囲気というか、風の流れというか、とにかく、彼にとって最大の壁ともいえる能力の残滓は、この男たちには全く見つけられない。

そして先ほどの斬り合い、とも呼べぬときのこと。道場でもそれなりの使い手であった男が赤子の手をひねるようにやられたのは、気でブーストしていなかったからだ。反射神経を劇的に向上させる能力者ならば、いかに速いあの一撃でもいなせたはずなのだ。

それにミコトを始め、みなが感じていた倦怠感。あれは能力が使えないことからくる症状ではないのか、と予想していた。

能力者は、普段から無意識に身体能力をブーストしているという。戦闘時ほどではないとはいえ、日常生活においても、気の恩恵は能力者に与えられている。それが突然消失してしまったとしたら。微弱ながらも、常時強化されていた身体機能が低下する。それが倦怠感として現れたのではなからうか。

そう推測するに、まずい状況だ、とテツは貧乏揺すりをする。まだ若干とはいえ、大の大人も相手取れるミコトやスイ、キョウイチが万全の状態ならば、少なくとも野盗崩れの連中には遅れを取らない。

だがいまの彼らは、一対一でも相手にできるかどうかだ。しかも道場生を目の前で惨殺されて、抵抗する気力を一気に奪われてしまった。数の有利はないも同然だ。

身体を揺すりながら、おかしな連中だ、とテツは思う。身なりはそれなりの格好だ。中世の騎士と違っていい。だが、映画で見られるような整然とした騎士ではない。むしろ騎士崩れの山賊、といった方が無難だった。

外見とは裏腹に指揮系統はしっかりしているようだった。慄然たる一撃を見せつけてくれた男はリーダー格らしく、残りの者は彼に

従っている。命令はスムーズだし、足も速い。荷馬車を守るように布陣して、ふたりを物見で先行させて道を進んでいる。

自分の置かれている状況がいまいち把握できていないが、元いた世界とは違う状況に置かれていることは理解できていた。テツたちを捕らえた人間たちの身なりからして、現代らしくない。

情報が少ないな、と毒づく。下手な態度は取れないが、テツたちを見張る女性らは普通の村娘のように見える。外見で判断する愚かさは重々承知している彼も、一見した以上の感想は描けそうにもなかった。

「あの……」

誰も口を開かなかった荷馬車内で、久しぶりに声が発せられる。その発声者たるテツは、努めて臆病そうな振る舞いをした。

「ここって大和ですよ？ それにしてはえらいど田舎で人も少ない。いったいどうなっているんですか？」

無論、この周辺がテツの母国たる大和の国ではないのは一目瞭然だ。だが、あえて知ったかぶりの調子でいった。

女性たちは顔を見合わせたあと、ひとりが怪訝そうに問い返してきた。

「ヤマト？ なんだい、そりゃ。……あんたたちも見慣れない服装だし、どこの人間だよ」

「え、大和の国ではないんですか！？ それじゃあ、英帝国らへ

んですね」

「……ヤマトでもエイなんとかでもないよ。どんだけ田舎人なんだ？ この辺りはパツヘル領の境界付近だよ」

当然ながら、その単語に聞き覚えはない。テツが口にした「大和」「英帝国」にも反応を示さないあたり、いよいよありがたくない状況に置かれているようだった。

「そうですか……それで、その。ぼくらは、いったいどうなるんでしょうか」

ひとまずの懸念事項はそれ一択といえた。殺されなかったとはいえ、ご丁寧に保護してもらったとは考えられない。利用価値があるからこそ、こうして捕らえられているのだ。

予期していた質問らしく、ややぶつきら棒に女は答える。

「どうだかね。珍しい服も着ているし、身代金でも取ろうかと思っただけだね。なんかそれも無理みたいだね、話してみた感じは」

魚市場でお目当てのマグロの身がスス力だった競り師みたいな顔で、

「人買いにでもやられちゃうんじゃないかい。きつと」

「それは……困りますね」

引きつった表情で答えるしかなかった。さりげなく聞き耳を立て

ていた者たちの動揺した気配が伝わってくる。

彼女のいうことは奴隷として売られる、ということだろうか。少なくとも、テツたちがいた世界において奴隷が公然と黙認されていた地域は、ほぼ存在しなくなっていたといっている。

当たり前のように口にされたことから考えて、常識を異にする人間に捕らわれているのだろう。改めて、明日をも知れない身の上なのだな、と泣きたくなる。

「こつちだって、ただでパンを食わせるほど余裕があるわけじゃないんだ。儲けにならないんじゃ、あんたたちを手元に置いておく理由はないさ」

この世界が現代欧州である可能性はかなり低い。陳腐な台詞だが、異世界というもののなのだろう。右も左もわからないような世界で生きていけるほどたくましくないテツからすれば、奴隷として売られるのも用済みとして捨てられるのもデッドエンドといっている。

どうにかしなければいけない。それだけは確実だった。

黙り込んだテツを見る視線は幾分か和らいでいた。女は人見知りしない調子で、

「あたしの名前はシンシアっていうんだ。あんたは？」

「ぼくは遠見……いえ、テツ・トオミといいます」

シンシアは難しい顔をして、「テツトオ……なんだって」と聞き返す。やはりというべきか、大和風の名前はわかりにくいようだ。

「テツ、です。テツ」

「テツ、だね。あんた、なかなか見込みがあるから覚えておくよ」

気に入ってもらえたのは何よりだが、彼女の集団内での立場がわからない以上、深入りするのは好ましくなかった。愛想笑いをしてごまかしておく。

それをどう取ったのか、癖のある金髪を指で絡めとりながら、

「物怖じしないで情報収集とは恐れいったよ、坊や。少しは事態がのみ込めたかい？」

「……」

この雌狐め、という悪態は、すんでのところで口から出ることはなかった。

第6話

拘束されて2日ほどたった。最低限死なない程度の水食料が与えられているのは幸いというべきか。それでも固いパンに僅かばかりの水では腹は膨れない。1日1度の食事は現代人には辛いものがある。

身体に力が入らないのは気のせいではないだろう。連続した馬車での移動と、精神的重圧がジリジリと体力を奪っていく。

この日は近くの水場に寄るようだった。さして幅は広くない川だ。水流も緩やかなもので、浅瀬であれば水浴びもできそうだった。

一団は足を止めると、必要な水を補給し始めた。テツたちは縄をほどかれ、仕事を手伝うように命じられる。当然のように、逃げ出したら容赦しない、と釘を刺された。

大量の水を運び入れる作業は重労働だ。万全とはいいいない難しい体調のせいで余計に重く感じる。

ミコトやキョウイチ、スイといった能力者の面々は、ここにきてついに己の能力が扱えなくなっていることに気づいたようだ。こちらにとばされる前よりかなり落ちた筋力に愕然としている。

テツはその様子を複雑な心境で見ていた。彼らは決して超えられない壁として、長きに渡って立ちはだかっていた者たちだ。その彼らがいま、能力を失って四苦八苦している姿を晒している。名状しがたい感傷がテツを襲っていた。

「レギンス、おまえも水浴びしてこいよ。見張り代わってやるから」

見張り役の男に声をかけたのは、まだ青さを残す顔立ちの青年だった。愛嬌のある笑顔で、いまは軽装だが、鎧を着込めれっきとした騎士に見えるだろう。

「んじゃ、頼む」

「おう」

交代した男は剣を抱き込むと、どっかりと腰を下ろした。

「ほら、サボってんなよ。キリキリ動け」

不躰に見ていたテツを怒鳴りつける。慌てて作業を再開した。

テツは10年間基礎体力作りをかかしたことがないから、この程度の労働なら我慢出来ないこともない。誰もが嫌がる基礎体力作りを趣味のごとく行っていたから、それをして変人といわしめていた事実がある。

「へえ、おまえ、かなり鍛えてるみたいだな」

農夫の筋肉の付き方と違うしな、と男は付け加える。

「あのヘンテコな剣も持っていたわけだし、剣術の覚えがあるのか？」

「たしなむ程度ですが」

テツは剣の腕について、どの程度戦えるのか見当がつかなかった。かつての大和では、考えるまでもなく底辺に位置していた彼だったが、この集団を見る限り、勝てるかもしれないが、負けそうでもある、という微妙な感想を抱いていた。

無論、死んだ道場生を切り捨てた男には勝てそうだとはいえ、露ほども思えなかったが。

「おまえに比べて連中は使えないな。見ろよ、あのへっぴり腰」

「……」

特に能力を失った影響が大きいのは女子だ。気の恩恵を大きく受けていた彼女たちにとって、そのサポートがなくなるのは致命的とあっていい。筋力などは以前と比べ物にならない。

あの女性剣士たちにもいつも地面を舐めさせられていたといったところで、この男は信じるだろうか。テツはフラフラと頼りない様子の女性たちを流し見ながら思った。

「オレの名はポールってんだ。覚えとけよ、テツ」

「なんでばくの名前を」

この男に名乗った覚えはない。訝しげに聞くと、

「シアはオレの女だからな」

なるほど、とテツは納得した。シアというのはシンシア嬢のこと

だろう。馬車で乗り合わせた食えない女性は、この男の恋人だったらしい。彼女からテツの名前を聞いたのだ。

下手なことをいわなくてよかった、と胸をなで下ろす。彼女から情報が流れていくのは確実だ。あまり相手に有利な展開になるのは好ましくない。

「真面目に動きゃ、あとで水浴びさせてやるって団長がいつてたぞ」

「それはありがたいです」

まだこの地に来てから数日とたっていないが、公衆衛生の整っていた時代の輩たるテツからすれば、身体のおいが気になっていた。時代的に衛生の観念に乏しいようで、現代人の感覚はあの男たちには理解できないだろう。

ポールのいうとおり、作業を終えた一行は水浴びを許された。しかし男女混合であり、馬車の乗り合わせのメンバーで済ませるという条件付きだった。

当然のことながら、女子の面々は異議を唱えようとしたが、

「野営の準備を早く済ませるぞ」

と、何気なしに剣をちらつかせる男——団長に文句などいえるはずもなく、テツたちは水浴びを強制的に混浴とされたのだ。た。

かつてであればピンク色のイベントとなったであろうヒトコマも、

まるで通夜のように肅々と行われた。それでも男子諸兄の視線は女子の裸体に引き寄せられたし、ポールや他の男連中は堂々とその様子を眺めていた。

羞恥に頬を染めるのがツボであるのは世界共通であるらしく、彼らはニヤニヤと嫌らしい表情を惜しげもなく晒していた。

「ちょっと、もっと近くに寄りなさいよ」

髪から水を滴らせたスイが頭の痛くなる台詞を吐く。

「……ぼくの聞き間違えか？ どうでもいいから、あまり近寄らないでよ、エッチ」

「え、っ、それはあんたの台詞じゃないでしょ！ あの男たちに裸見られるのが我慢ならないのよっ」

「別に、いまさらだろ。あとで犯されるかもしれないだし、いまのうちに慣れときなよ」

その未来はありえなくもないので、悔しそうにスイは黙り込んだ。

「そんなズケズケという？ 最低ね、あんた」

「あんまりいいたくないけど、犯される可能性はぼくらだって同じだ。衆道って言葉知ってるかい？」

知らない、と首を降るので親切丁寧に教えて差し上げると、スイは顔を真赤にして「嘘でしょ!？」と驚愕した。

大声をあげたせいで一斉に注目を浴びたスイは、縮こまってテツの影に隠れる。

「だから、あまり近づくなよ」

「だって……」

自身の源であった能力を失ってから、彼女たちは臆病になってしまっていた。力づくで襲ってくる男を撃退できない、という事実が重くのしかかっているのだ。

圧倒的な力をもつ相手を恐れるのは当然のことだ。生まれてこの方、そういった連中ばかりを相手にしてきたテツには痛いほどわかっていた。

「ふう。大丈夫だよ、スイ。大丈夫」

触れるか触れないかの微妙な距離だった。スイの肌は陶磁器のように白く、彼の目から見ても美しかった。河川の水は冷たすぎるほどだったが、近くににいる彼女の体温がそのぶんリアルに感じられるようだった。

幼い頃。

まだ能力による優劣を思い知らされる前は、テツとキョウイチの後ろをスイは無邪気に追いかけていた。テツは幼いながらも、女の子は守らなければならない、なんていう時代錯誤な使命感がなかったこともないし、彼女の手を引っ張っていくのは自分たちの役目だと信じていた。

それが成長していくにつれ、彼女は守られるだけの存在ではなくなっていた。いつの間にかテツ以上の、もはやどうやっても敵わない力を手に入れていた。

かつてはその事実が悔しくもあつたし、情けなくもあつた。だが能力者の強大さを思い知らされるにつれて、そんな感情は消失していった。良くも悪くも、彼は世界の常識という枠に取り込まれていったのである。

この世界では能力は使えない。そもそも、『気』という概念が存在していないとテツは踏んでいる。自分たちを襲った面々が、戦闘において必須の概念であつた『気』の匂いを一切させないのはいらない。

スイたちは力を失つた。いままでずっと共にあつた力を失つた衝撃は、いかほどのものだったのだろう。テツはやり切れない思いになった。もしも自分から、そう、剣を握る握力や筋力が失われてしまったとしたら。そのショックは計り知れない。

不安になるのは仕方がないといえた。自分が全く影響のないだけに、彼女たちの怯えや不安が際立って見えた。

「ねえ、テツ」

それは自己防衛のための仕草なのだろうか。上目遣いで保護欲を刺激する声色だった。

「もしものときは、助けてよね」

「それはばくじゃなくて、キョウイチにいうべきだと思う」

「そ、そうかもしれないけど」

ちよつと憤慨した、というように、

「女の子が助けを求めてたら、助けるべきでしょ。紳士として」

「紳士として」テツは未確認飛行物体を目にした科学者みたいな調子で反復する。理解できない単語を一時脳内で観察研究してから、結局わかりませんでした、とレポートの結論に書き上げ、

「何をいつてるんだ、スイは」

この少女に紳士は必要なかったのだ、少なくとも2、3日前までは。それがいま、何をトチ狂ったのか、テツに紳士性を求めている。彼は失望を感じていた。能力者たちは、彼からすれば大きな壁であり、敵であり、憧れの存在だったのだ。己には超えられないひとつ上の存在だったのだ。

その「殿上人」が、自分の加護を求めるなんて。

「……」

深い虚無感が襲ってくる。テツの10年間を否定する闇だった。憧れの人物に裏切られたのだ。それはいままで感じたことのない痛みだった。

能力者たちに、自らの弱さを笑われても悔しくはなかった。それは真正銘の事実だったからだ。彼は事実を笑われて憤慨するよう

なプライドを育てていなかったし、あの世界の常識として「能力者には勝てない」という真理が働いていた。

—— ぼくは異世界に来てしまったのだ。

世界が変わり、真理が変わり、能力者の意識も変えた。大きすぎる変化から取り残されたテツが感じたのは、静かな孤独感だった。

遠見テツが異世界に迷い込んだという事実を付きつけられたのは、まさにこのときであった。

第7話

意外なことに、水汲みの働きが評価されたようで、テツたちは待遇の改善が実現されていた。手足の拘束はされなくなり、ある程度
の自由が許されるようになったのだ。

仲間たちは手足の不自由がなくなって喜んでいたが、逆にテツは何らかの思惑を感じずにはいらなかった。とはいっても、一介の学生剣士に過ぎない自分たちを手懐けようとしてもメリツトは大きくない。そこまで人手不足なのだろうか、と集団の顔を探す。

行動を共にしているうちに、男たちはただの野盗などではなく、戦闘集団であることがわかってきた。いまだって剣を振るっている者がいるし、各自に己の鍛錬をにかけていないようだった。

その一方で、どこかの国に属しているとも思えず、テツの頭の中を検索して出てきた単語は「傭兵団」である。荷馬車からしても、定住せずに移動を続ける装備一式であるのは間違いない。裏方といえる女たちは、暇があれば裁縫や武具の手入れを手伝っている。

この大きいとはいえない一団の中で、ある種のコミュニティが出来上がっているのだ。

中心となっているのは、騎士の身なりをしている7人であり、リーダーはいうまでもなく「団長」と呼ばれている大男。その下に神経質そうな壮年の男、恐らくナンバー2であろう者がいる。以下は同位、あるいは年功序列でやっているように見える。

サポート役は10人ほどの女たちが任されているらしく、その中

でも、テツをして抜け目ならない女と思わしめたシンシアは中心人物であるようで、きびきびと指示を出している様子をよく見かけた。

食事情も余裕がないのは明らかながら、以前より改善されている。

男達は戦闘訓練をかねて狩りを行う。それに同行を命じられるようになったテツは、まだ自分で獲物を狩ったことはないものの、追い詰める役割としては、十二ぶんによく働いた。

生来の俊敏さに加えて、確かな基礎訓練で育んだスタミナがある。森の中を縦横無尽に駆けまわる姿には、団員も舌を巻いたほどだった。

大和人特有の諦めの良さというか、順応の速さというか、その生真面目さが理解される頃には、テツの名前はそれなりの価値をもって団員に記憶されるようになった。

とはいっても、道場生の中には反目的な者もいるし、自らを捕らえたやつらのいいなりになるテツを快く思わない人間も存在していた。

仲間のひとりを惨殺されているのだ。当たり前の話だろう。

彼らの心境を理解しながらも、テツはなるべく逆らわない方がいいと考えていた。それから、なるべく役に立つと思わせるべきだ、とも。

最初に反抗したひとりを切って捨てたのは見せしめのためだった。団長と呼ばれる男を観察し続けてそう確信した。あの大男は全身筋

肉の脳筋だと思わせる出で立ちだが、わかったのは恐ろしく合理的に動くということだった。

集団をシステマティックに動けるようにしたのもこの男の功績だろう。例の指揮系統をはじめとして、見張りの交代制から狩りの当番、必ず誰かが警戒任務につけるシフトを組んでいる。

信賞必罰も徹底していて、働きのあつた者には褒美を取らせる。

それは食料であつたり、自由時間であつたりした。働きがよければ、団長である自分よりもいい飯を食わせた。一方で、彼自らが見張りや狩りにも参加した。それでいて、玉座に座っているようなふてぶてしい装いは崩さない。なめるやつは容赦しないという、殺気じみたオーラは常時展開されていた。

団長は団員からも恐れられているようで、実際、狩りや見張りでコンビを組まされることが多いポールなどは、いつも団長を悪魔のごとく恐れていた。感心したのは、こうして恐怖されながらも、同時に尊敬されてもいることだった。畏敬の念、というべきだろうか。

戦闘を生業とする集団において、親愛や友愛では人をまとめることはできない。死地に向かわせるのは上の人間の権利であり義務なのだ。変わって、主のために死ぬ、というシチュエーションは素晴らしいこともあるが、それに至るまでのコストがよろしくない。

恐怖という道具は、もっとも効率のいい統率用具だ。それにプラスアルファを加えれば、さらに使い勝手のいい代物になる。テツの目から見て、団長はその代物をいかになく使いこなしていた。

「よお、テツ」

ポールが昼飯をもって声をかけてきた。ひとり考え事をしていたテツは、礼をいって自分のぶんを受け取った。

この気のいい男は、集団では一番若手だったらしく、新たな使い走りであるテツたちを歓迎している様子だった。偉そうに威張り散らしながらも、憎めないひょうきんさを垣間見せる人徳もあった。テツもこの青年が嫌いではない。むしろ道場生たちよりも話しやすい存在であるかもしれない。

人間というものは、ふたり以上集まれば派閥ができる。テツたち道場生も、例に漏れずふたつのグループにわかれていた。あくまでも、ゆるやかに、ではあるが。

気に入らないのは、そのグループのひとつの筆頭にテツが据え置かれていることだった。彼からしてみれば、打算もなく食い残した食料、水を融通してやっていただけなのだが、いつの間にか取り巻きのような人間ができあがっていた。

この世界に迷い込んで、相対的にテツの実力は彼らを凌駕した。その事實は、元能力者に彼を遠ざけさせる要因になると思われたが、現実にはプライドよりも飯の種を問題にした人間が多かった。

そんな利を求めて近づいてくる人間など信じられるか、というほどテツは青春しているわけではない。むしろ打算的に動く彼らを自分に重ね合わせた。もしも自分に力がなく、誰かの腰巾着になるしかなかったとしたら、きっと同じような行動に出ただろう。

だから邪険に扱うことはなかった。その上で、きちんと働くようにいい聞かせて指示を出した。各自バラバラになって動くよりも、指揮されて動く方が効率のいいことは、いまさらいうべきことでは

ない。確実に結果を出せば、そのぶん褒賞ともいえる物資が手に入る。いわば、テツたち以下数名は「従順組」ともいえた。

「なんというか、いつもおまえはシケた面してるよな」

「よくいわれるよ」

苦笑いする。

ポールは気の許した相手に敬語を使われるのが気持ち悪いらしく、少し前に「敬語は面倒だ」といって、テツにくだけた話し方で接するようにいい含めていた。この一件もあって、敬語を使わずに話しているテツの評価が「認められている」として道場生の間で高く見られる結果となる。

「おい、シンシア。女たちつれてこいよ」

「わかったわ」

ポールはコンパニオンでも注文する調子でいった。事実、侍らすために呼びつけるのだから、あながち間違っているともいえない。

気乗りしない顔でスープをすするテツは、今朝方狩った野鳥さんの冥福を祈りながら、とりとめもなく現実逃避に精を出す。団員の男たちは女を侍らすことをステータスと考えている節があつて、現代に生きる草食系男子を自負するテツとしては、イデオロギーの対立を感じずにはいらなかった。

もつとも、道場生の中には、彼らを真似してみようとする挑戦者もないわけではなかったが、いち小間使い兼奴隸的立場の男子で

は、待つてくれる女子がいなかった。

「おまたせ」

「やつほう、少年。お邪魔するよ」

シンシアが連れてきたのは、ミコトをはじめとする女性3名。顔見知りの女子も見える。

「わたしを指名してくれるとは嬉しいよ、テツ。この色男め」

「食傷気味のこの顔を見てください」

げんなりと返すと、ミコトは不満げに隣の女子の手を取って腰をおろす。ふたりに挟み込まれる形となったテツは、居心地悪そうに縮こまった。

ポールはその様子を満足げに見ている。よもや、これを楽しむためにミコトを連れてきたのではないか、と邪推してしまう。

「さあ、これを見ろよテツ。おれ様の秘蔵の品だあ」

もったいぶって差し出されたのは、香りからして林檎の果実酒だろう。てつきり、この世界の住人はワインしか飲まないものだと思っていたから、なかなか興味をそえられるものだった。とはいっても、酒の類に恋するには若すぎる彼である。あまりよろしくなかった反応に、拍子抜けしたポールは調子を崩した。

「ふん、まだお子様かよ、ったく」

「あはは……」

シンシアがポールに果実酒の配をして、残りを受け取ったミコトがずい、と身体を寄せてくる。

顔を赤くしたもうひとりの少女も、先輩に続け、といわんばかりに幅寄せを試みる。

「……」

とても居心地が悪い。ちょっと離れてよ、といったら、空氣の読めない男として末代まで語り継がれることになるう。いくら大草原のトムソンガゼルを自称するテツであっても、目の前に異性がいれば、DNAを残そうと考えることはなくもない。ただ、普通の男よりも自制だとか理性だとかが占める割合が大きいだけである。

ごく一部の学者先生いわく、それは「ヘタレ」なる属種らしいのだが、テツには全くもってわけがわからない。

「どう？ お姉さんの色香は。アソコだった？」

「ええ、たちました。腹がたちました。ありがとうございますっ」

ヤケクソ気味に、一気に酒をあおる。片方の女子は「あわわ」と剣幕に驚いてしまって、テツはバツの悪い顔で謝った。

ミコトと一緒にいても見劣りしない女子だった。名前は確か、サツキといったか。ぼんやり、という擬音が似合いそうな雰囲気で、この殺伐とした世界には似つかわしくない人種だ。

テツはこの可愛らしい女子にも、元の世界では敗北している。「やあ」という日曜の早朝に放送していそうな少女向けアニメキャラ声と共に繰り出される剣戟は、テツの身に恐怖をもって記憶させるだけの破壊力があつた。

だからというべきか、身体は自動的に防衛体制を取ってしまいそうになる。いけない、いけない、と意識して身体の力を抜く。

「おまえさん方、仲がいいよな。もしかしてアレか？」

鼻の下を伸ばしてたずねる男は見苦しい。「あー」と半目になつて、

「残念ながら違うよ。ミコト姉さんには別に男がいるし。でしょ？」

「え、うん。まあ」

歯切れ悪い調子でミコトは答えた。

「でも、あの男連中の中にはいないんだろ？」

キョウイチを含めた数人は、離れた位置で食事をとっている。幾人か、チラチラとこちらに興味を示しているのが見て取れた。

「そうですね」

遠い目をしているミコトを見て、テツは不憫に思った。両親に会えない、友達に会えない、恋人に会えない。そんな状況に彼女は置かれているのだ。

異世界という概念さえ理解して貰えるとは思っていないので、出身地は包み隠さず「大和」とだけ話してあった。下手に嘘をついても悪い結果しか招きそうにない。ならば、真実であるがゆえに説明をつけられる事実を話した方が無難であろう。そうテツたちは決めたのだった。

「ならば、問題ないだろ。テツも出すもん出さなきゃスツキリしないだろうさ」

ポールは、それが人類普遍の真理とでもいうように力説する。その相手だろうシンシアも、当然とばかりのしたり顔だ。というか、彼らはいつよろしくやっているのだろう。馬車の中は共用だし、いくらなんでも、みなの前でギシアンするわけにもいくまい。

「まあ、無理にとはいわんがね。だがいつ死ぬとも知れない身の上だ。やりたいことやっておかなきゃ損だろうに」

いいたいことはいった、とばかりにポールはシンシアとイチヤツき始める。完全に蚊帳の外に置かれたテツは、ため息について身近なふたりに向き直るしかなかった。

ポールの言葉はある意味真理ともいえた。こうして酒をわけてもらえる状況自体、奇跡のようなものだ。運が悪ければ、両断された男子と同じ運命を辿っていたかもしれないのだから。

この世界には警察なんてものはいないし、最低限度の人間らしい生活を保証してくれる国家もない。人権を尊重してくれなければ、自由を保証してくれない。

大きな力に出会ってしまったえば、それに蹂躪されるしかないのだ。
ぼくらの命は、パンのひときれよりも安いのかもな、とテツは内心
毒づく。

「いつ死ぬんだろうな、ぼくは」

「何いつてんだか。どこか鬱っぱいよね、テツは」

「別にいいでしょ。誰にも迷惑はかけていませんし」

世迷言をいうのは、きつと酒のせいだろう。ミコトの指摘にそう
勝手に納得する。

「もつと希望を持ちなさいよ。童貞のまま死ぬるかっ、とかさ」

「別に童貞のまま死んでも地獄に堕ちるわけじゃないでしょうに。
それに、新兵のまま人生を終えるモテナイ種はいくらでもありますヨ」

口をへの字に曲げて、

「それにぼくは童貞じゃありません」

「——嘘」

「ええ嘘です」

ゆらり、とミコトは無言で立ち上がった。訝しんで見上げると、
表情が前髪に隠れてよく見えない。機動兵器の起動音よろしく「ヴ
オン」という効果音と共に両目が光った気がした。

素早い動きでテツの背後に回ると、チョコレートスリーパーが音もなく決まる。

「ぎ、ギブギブっ。苦し……あと、おっぱい当たってますっ、おっぱい」

「当たり前でしょ！ わたしはDカップよっ」

横であわあわしていたサツキは、「わたしはCです」と補足情報を付け加えた。特に意味はない。

「まじで苦し、おちる、おちちゃっ」

顔を真っ赤にして降参を主張するが、新選組嫌いの長州人みたいな勢いで白旗はなぎ倒される。

「わたし、笑えない冗談は嫌いなよね」

「いつも、笑えない下ネタというのは、どの口ですか……」

なんやかんやで開放されたテツは貪欲に空気を求めた。有史以来、こんなうまそうに空気を吸ったのは、ぼく以外いないんじゃないかと彼は思った。

涙目になって抗議の視線を向ける。ミコトは鼻息を荒くしながら、同じように目を潤ませていた。派手に騒いでいるのは不安を紛らわかすためだろうか、少々空元気にも見て取れた。

無理もない、とテツは思う。すでにこの集団と行動を共にして数週間になる。元の世界、と呼んでいいのかいまだに不明だが、元居

た場所に帰る算段は全くついていない。

ときおり与えられる情報は聞いたことのない地名のものだし、そもそも情報源は数人の団員や女たちでしかない。情報網がコミュニケーションの内部で完結してしまっているのだ。これでは外部の状況が掴めない。

もつとも、それがテツたちの手綱を握るためであるのは予想できた。情報を与えないことによって、反抗しようと考えさせない。支配者の他に寄るべきものがいない状況を創り上げる。

彼らからすれば、テツたちなど奴隷の価値以外ないようなものだ。それに対して、用心深すぎるほどの用意周到ぶりだ。団長の方針なのか、それともただの考え過ぎか。

ミコトはしんみりと鼻をすすった。テツも、サツキも彼女の気持ちは痛いほど理解できていた。理不尽を感じつつも、どこにぶつければいいのかわからない。途方にくれる、とはまさにこのときのために用意された言葉だった。

あれこれと、持ち得ている情報から推測するが、それが十中八九、役に立たないことは明白だった。いざというときに、考えすぎるやつはあっさりと死ぬ。その意味からすれば、あの団長に斬り殺された男の行動も馬鹿にはできないものがある。少なくとも、苦しまずに死ねたのは確かだろうから。

「ねえ、陶片木」

「いきなり悪意に満ちた名称にするのはやめて頂きたい」

ぐす、ぐす、と鼻を鳴らしているミコトは、腫れぼったい目を向けてきた。

「だって女の子が泣いちゃってるんだよ？　そこは抱きしめて慰めてあげるのが筋つてもんでしょう」

「それはまた」

シンジラレナイ、と外国人風のイントネーションの感覚で、

「求める相手が間違っているでしょう。それとも何ですか。ミコト姉さんは、少し参っただけで恋人を乗り換える人だったんですか」

「違う」

「違うくないですよ。だって」

「違うよ！」

そう怒鳴ると、ミコトはどこかに行ってしまった。わけがわからない。困惑していると、サツキまでもが「きつと違うんですよ」といって、トテトテ逃げていってしまった。両手に花の状態から、一気に独身貴族にジョブチェンジしたテツを、ポールたちは気色悪い笑顔で見物している。他の離れて見ていた連中も同様だ。

娯楽の少ない世界では、人間関係のもつれも格好の飯の種だ。いろいろと、あることないこと噂されるに違いない。頭が痛くなりそうだった。

「おい、おまえ」

頭を抱えていると、目の前に大きな影ができているのに気づいた。顔を上げると、団のナンバー2、副団長ガヴァンが仁王立ちしていた。慌ててテツは姿勢を正す。基本、団員メンバーには逆らってはいけない。不文律ながら、道場生たちの間で守られている決まりごとだ。

「なんでしょうか」

「おまえは剣術をかじったことがあるそうだな」

確かに、そうもらしたことがある。それに、元々テツたちは各々が帯剣していたところを捕らえられたわけだから、ガヴァンにしても事実確認する意味合いでたずねたのだろう。

狩りをするときに用いるのは、もっぱら弓矢だ。広く武芸に手を出していたこともあって、テツは人並みではあるが弓を扱える。さすがに、動いている野生動物を射るような腕前はないが。

「近々、戦がある」

「……そうでしたか」

ポールが生き死にの話をしたのも、こういった訳があったのか。納得して頷く。

「団長とも話し合ったのだが、その戦におまえたちの中から数名、使うことになった」

ガヴァンは神経質そうな顔をしている。身体も、どちらかといえ

ば細身だし、目元もつり上がっていてきつい。年齢は30前後に思えた。話し方も抑揚を欠いているが、このときばかりは不満げな様子が伝わってきた。

「すでに決まっているのは、おまえ」

それから、あの男、とキョウイチを差している。その当人は引きつった顔で、向けられた指を閻魔大王の笏でも見るかのように凝視している。おそらく自分も同じような顔をしているんだろうな、とテツは思った。

「我がセブンス傭兵団はエメロス伯爵側につく。近く出立するので」

ガヴァンの顔には呆れた様子があった。団長に逆らえないのは彼も同様らしく、この采配を決めたのはどうやらあの大男らしい。

「残り2名を選出して参加させるように。これは決定事項である。意義は認めない」

「戦に紛れて逃げるとは考えないので？」

ふん、と見下した目でテツを見据える。

「残った者は人質だ。それくらい貴様も理解しているだろう」

「人質が人質たる真価を発揮するには、前提条件が必要ですが」

「貴様には人質を取る効果がないとでも？」

「……仮定の話です。あくまでも」

なるほど、とガヴァンは少し見直した様子だった。ごみ山の中から、まだ使える品を見付け出したように、

「責任は連帯して取らせる。それが方針だ。だが曲りなりとも戦果をあげられたのなら、わたしとしても、評価しない訳にもいい」

「あくまで、逃亡せずに、戦果をあげられたら、の話ですか」

「ああ、仮定の話だ」

戦に参加させるだけ参加させて、何も褒美をもらえない事態は回避できそうだった。拒否すれば殺されそうだが、参加したところでメリットがなければ戦などしない。戦場に出れば、傭兵団員に殺される前に死ぬことなど容易なのだから。

用事を済ますと、ガヴァンは幽鬼のような足取りで去っていった。この傭兵団には化物のような雰囲気、団長と副団長がいるのである。きつと本当の団名は「幽霊兵団」とかいうに違いない。

「下手すれば、ぼくもお化けの仲間入りか」

この世界の宗教に、幽霊なんて概念があるかどうかは知らないけれど。

第8話

それから数日間は、道場生の中ではピリピリとした空気が漂っていた。残り2人の指名はキョウイチに任じてある。近頃は緩やかな住み分けが始まったとはいえ、実質的な仲間内のリーダーはキョウイチだという認識がある。逆に、テツがリーダー面したところで、従う者は少ないだろう。特に、血の気の多い男はキョウイチを支持している。

考えることが少なくてありがたい、と心から思う。戦、なんて格好つきたい方だが、要は殺し合いである。他人の世話をしている暇はないだろう。第一に考えるべきは、自分が生き残ることである。

団内にはわかに活気づいてきている。まるで自分の宿命を思い出した騎士のように。テツは彼らの一面しか知り得ていなかった、ということだ。戦いこそが、彼らの生きる世界なのだ。

今回の参加にあたって、与えられた剣と盾を確認する。剣は片手で扱えるショートソードだ。取り回しに長けたものを選んだ。盾は木製だが、飛んでくる矢くらいは防げるだろうし、ともに受けなければ剣戟も少しは耐え切れるはずだ。

心配なのは防御面だった。動きやすいように改造した道着に、申し訳程度のレザーアーマーをまとっている。これでは剣でばっさりやられること間違いなしだ。一撃でももらったら終わりだと考えておいた方がいい。

幸か不幸か、足の速さが殺されない装備ではある。機動性をもって生き残るしか手は残されていない。やばくなったら、すぐに逃げ

よう、と固く誓う。戦況が悪くなって逃げたとしても、あの団長なら問答無用で背中から斬り殺してきたりはしないはずだ。何より合理的に動く思考を持ち合わせているから、無理に特攻をかます方が彼の意にそぐわない行動といえる。

「緊張してるの？」

「『まさか。武者震いだよ』とかいえたら格好いいんだけどね」

青白い顔のスイに向かって、緊張してる、と付け加える。

出征の準備は整って、あとは団長以下4名の団員と4名のお手伝いがその号令を待つのみである。夜は意識が高ぶってなかなか寝付けないし、気が張っているせいか、早くも気疲れし始めている。

けれども、そう弱音を告白した幼なじみをスイは責める様子はない。かかった。

「今回の戦、わたしも参加する」

「……」

別に不思議なことはない、と思っただろう。以前の世界では。

「能力が使えなくなったのは理解してる？」

「ええ、もちろん。だからって、なめて見られるわけにはいかない。わたしたちは、力のない女であるだけじゃない。男にだって負けないんだ」

そうよね、と誰にいうのでもなく彼女は呟く。

「それにキョウちゃんだって参加するんだもの。わたしだけが留守番なんて真つ平ごめんだわ」

彼女が一度決めたら梃子でも動かないのは、幼なじみであるテツはよく知っている。だから文句をいうつもりはなかった。誰にだって譲れないものがあるのだ。彼自身、彼の信条に従っていままで生きてきた。

今回の戦への参加も、殺人への禁忌から自ら進んで参加を表明する者は少ない。特に女子はその傾向が顕著だ。腕のよさでいえばミコトの方が格段に上だが、彼女は全く刀を振るうつもりはないようだった。その中で、スイは異色ともいえる。

女子仲間とは思いとどまらせようと説得したようだが、成果はなかった。ミコトでさえも、最後には根負けして「死なないでね」と苦い顔をするしかなかった。

中でも一番反対したのはキョウイチだった。半ばいい争いになったのは周知の事実である。

こうして雁首並べてテツと話しているのも、キョウイチとは顔を合わせづらいからだろう。

彼女は遠慮がちに口を開いた。

「あんたは、反対しないのね」

「スイが戦死したら、墓くらいは造ってあげるよ」

「笑えない冗談だから、それ」

口元を引きつらせていった。

「少しくらいは心配してくれてもいいじゃないのよ」

「心配はしてるさ。でも、死ぬかもしれないのはぼくだって同じなんだ。その意味でいえば、ぼくらは対等だろ。さっき『守られてばかりじゃない』っていったのは君だ。なら、心配すべきは、スイ、君がきちんと働くかだ」

いつになく饒舌なテツを見て、スイは氣を使われていることに氣づいた。この陶片木はあまり多くを語らない。黙ってむっつりしているのが格好いいとも思っているのか、道場内でも人と話しているのは稀なことだった。唯一、ミコトとは例外のようだったが。それなのに普段の5割増しで言語を話すのは、彼なりの優しさなのだろう。

その男は慣れないように長文を吐き出すと、アゴの駆動ネジの調子確かめるようにモゴモゴとしてから、口をつぐんだ。

不器用なりに励ましているのだと気づいたスイは、悪くない気持ちになった。

こちらの世界に飛ばされても変わらないテツの様子を見ると、感

心さえしてしまう。能力者は押しなべて気を扱えなくなつて、相対的に強者となつた彼だが、態度は寸分も変化しない。

見返してやろうとか、威張つてやろうとか思わないのだろうか、と不思議に思う。道場内で彼は軽んじられていた。スイだつて、彼を見下していた、とは少し違つかもしれないが、そんな目で見ていたひとりだ。

幸か不幸か、異世界でいままで馬鹿にされてきた者たちを見返せるチャンスに恵まれたというのに、なんら気にもしていない。信じられないことだが、テツは虐げられてきたことを根にもっていないようだった。

感心すると同時に、理解できない彼は恐ろしくも思えた。まるで感情をもたない宇宙人を相手にしている感覚だった。

冷たいようで、たまに優しくもある。冷徹であつて、気遣いも見せる。掴みどころのない人間だった。

いつからテツがわからなくなったのか、スイには思い出せない。昔はいつも一緒だった3人が、いつの間にか関係を変えていたのだつた。

スイは黙りこくつたテツの隣に腰をおろす。

「あんたつて、遠見テツよね」

「……？ 頭でもぶつた？」

「別に。テツか。うん、遠見テツに間違いないわよね」

ベルトコンベアーで流れてくる基板を検査するみたいに見ると、

「気持ち悪いな、本当に。なんだっていうんだ」

「なんかさ、こうしてゆっくりテツを眺めたことなんて久しぶりだなあ、と思って」

「人を田園風景みたいにいわないで欲しい」

スイは不満顔の男の隣に近づいていった。肩がくっつきそうな距離だった。テツは文句をいったが、「別に気にすることでもないでしょ」と黙らせる。彼はキョウイチのことを思っていたのだろうが、それには及ばないと思った。

「わたしとキョウイチとテツ」

3人だ、と本当に久しぶりに考える。わたしたちは3人だったのだ、と。

「やっぱり、幼なじみがひとりでも死んじゃうのは悲しいよね」

「うん。ばくもそう思うよ」

心からそう思う、とテツは少し間を置いてから呟いた。

第9話

傭兵団から出立したのは、団長と団員が3名に、テツ、キヨウイチ、スイ、それから選ばれた男子1名だった。彼はキヨウイチたちと打ち合っても引けを取らない腕を持っている。能力なしで剣を振るのは初めてだったが、それはテツ以外みな同じことだ。

残りの団員は留守番することになる。腕に覚えのある者は、主戦力が抜けている間、ホームたる集団を守ることに専念する。

戦闘面でいえば、テツはブランクがあるのが気がかりだった。反抗の可能性を危惧されていたので、狩りのときにしか剣を握らせてもらっていない。装備を渡されたのは今朝方である。

また、道場生組が身につけている防具は、そろって貧弱なものだ。これなら、剣道の試合で身につける防具の方がよほど防具らしい。

テツ以外は使い慣れた刀を帯刀している。そんな細い獲物で大丈夫か、という顔をされたが、大和人たる彼らは、刀以外は邪道だと考える。すんなりとショートソードに乗り換えたテツが異常なのだ。

見送りは粛々と行われた。団員たちにとっては珍しくもない戦であつたし、残留組の道場生にとっても話しかけづらい雰囲気があつた。

使い走りとして女性方々の覚えがいいテツは、初陣ともあつて激励されていた。シンシアなどは、ポールも出立するというのに、テツに構いつきりであつた。「生き残るのを第一に考えるんだよ」といって熱い抱擁をくれたのだった。

ミコトは意気消沈した表情で、言葉少なげに弟を含めた道場生組を見送りにきていた。何かをいいたげな様子だった。罪悪感でも覚えてるのかな、とテツは思う。この世界に飛ばされた仲間内では一番の年長者である己が参加しないことを気にしているのだろう。

「ぼくが死んだら、これを墓に埋めてください」と髪を一房切つて手渡すと、本気で怒られてしまった。必死になってふざけているわけではないことを説明する。自分でも、死亡フラグを立てている気がしないでもなかったが、この戦で死ぬ可能性は高い。これは純然たる事実だ。

死して地面に伏せようと、弔われない身の上は許しがたい。せめて、簡単にでもいいからよくして欲しい、と告げると、観念したようにミコトは了承した。テツに感化されて、今回参加する全員が彼女に髪を渡すことになってしまったが、決心を感じ取ったらしく、神妙な面持ちで受け取っていた。

行軍とも呼べぬ行程である。集合地点までは騎乗して行くものの、馬の頭数の関係上、道場生組はふたりで一頭に乗り合わせるようになる。幸いだったのは、騎乗技術が現代大和においても廃れていなかったことである。武家文化の名残を色濃く残していたおかげで、学校の授業で乗馬を習うのだ。さすがに常用手段として馬を用いることはないのだが。もしも徒歩で同行する者が存在していたなら、行軍速度は比べものにならないほど遅くなっていたことだろう。

緊張のせいで発汗が多くなっているのを感じながらも、剣を抜くのはまだ先だと思っていた道中。

思いがけず、テツたちにとっての初陣が訪れてしまったのだった。

小規模ながらも、敵部隊の斥候と思わしき一団と鉢合わせしてしまっただのである。

団長以下、歴戦の猛者たる団員の行動は速かった。状況を完全に悟らせる前に敵に襲いかかり、瞬く間に切り捨てていく。馬上からの一撃は正確無比に命を狩っていく。テツたちの出番などあるはずがなかった。

だが、彼らだけでも討ち取れたはずなのに、落馬した数名の敵をわざと生かしていた。訝しむキョウイチたちとは違い、テツはありがた迷惑だと心中毒づいた。

要は殺しの練習である。

「この程度なら、おまえたちでも討ち取れよう。さあ、――
――殺せ」

壮絶な笑みだった。地獄の悪魔もかくや、という団長に逆らうことなどできやしない。普段はおちゃらけた格好のポールも、このときは真剣な表情を崩さない。

馬上から、いの一番に降りたテツは左手の盾で身体を守り、抜き放ったショートソードを確かめるように強く握った。

それぞれが相手どれるよう、4人の敵が残されていた。テツが対峙している男はそれほど身なりがよくない。残りの敵も、似たような格好だった。

剣のグリップを握りしめた瞬間、いままで感じていた緊張感から

焦りまでが、一気に引いていくのを感じた。スイッチが入ったとい
つていい。剣の重さが、鉄の匂いが、あたりの血の海が、ここが死
地であることを教えてくれる。

——腐臭がする。

頬の筋肉がひきつって笑みの形をとった。その形相に敵は怯えた。
その一瞬を、怯えに腰が引けた一瞬をテツは見逃さなかった。躊躇
なく振り切った剣は、半円を描いて敵の右鎖骨から袈裟切りに入っ
た。そのとき思ったのは、骨はなかなか固い、ということだ。

呆然と血が吹き出すのを見ていた男は、手で血を止めようとして
崩れ落ちた。残心する間もなく、テツは残りの仲間の状況を把握す
べく、振り返る。

戦闘はまだまだ続いていた。能力を失ったとはいえ、草切道場の生
え抜きがそろっている。雑兵ごときには遅れをとらない。しかしな
がら、実戦であることがネックとなっていた。

とどめをさせなかったのだ。無我夢中だったのだろう、勢いで殺
してしまったあの男子はいい。だが、なまじ実力があつたために、
敵を無力化したあと、キョウイチとスイは刀を振り下ろせないでい
た。

この戦において捕虜にとられるのは、身代金が望める貴族連中だ
けだ。他は捕虜にとる必要性がない。むしろ生かしておくと邪魔に
なる。

馬上から事の成り行きを見物していた団長は、一刀のもとに敵を
屠ったテツを新しいおもちゃでも見つけたような目で見ていた。だ

がそのあと、ふたりがとどめをさせないでいるのを見ると、つまらなそうな無表情に戻った。

鈍色の瞳は、殺せ、と物語っている。

敵兵も、相手が新兵だと気づいたのだろう。途端に見下した顔つきになった。それでもふたりは刀を動かせない。乱戦だったらよかったのだ。殺す殺さないなど、考えている暇などないのだから。

眼前の命をどう扱うか。その決定権を自分が握っている。キョウイチもスイも、思考は固まってしまっていた。

無理もない、とテツは思った。むしろ人を殺して、その切りにくさの感想を抱いている自分がおかしいのだ。隣で戻してしまっている男の方が、よっぽど人間らしい。

ならば、この血の滴る剣をもつ自分は何者なのだろうか。悪鬼か、羅刹か。馬鹿馬鹿しい、と切り捨てる。何を異常者気取りで語っているのか。血も凍るほど恐ろしい男がいるではないか。あの男に比べれば、自分など赤子に過ぎない。

己より強い人間など、ごまんという。それがテツの常識だった。

彼は無力化された敵兵の後ろをとると、驚く幼なじみの目の前で首をはねた。作業的にもうひとりも済ませてしまう。青い顔で口元を押さえるスイと目が合うと、「ひ」と化物でも見たかのような反応をされた。

デジャヴだな、とテツは思った。どこで、誰に、なんて野暮なこととは考えない。かつて自分が同じような反応をして、今度は自分が

そう反応された。それは、嬉しくない暗示だった。

剣を一振りして付着した血と脂を払う。落ち込んでいる暇はない。目先の問題は、鬼よりも恐ろしい男へのいい訳だ。あの男の目的は、自分たちに殺しを慣れさせておいて、本番でへまをさせないためだったに違いない。殺しに本番も何もないとテツは思うが、その行程に水を差した理由を問われるはずである。

「……」

へたり込む3人には目もくれず、団長はテツを呼び寄せ、黙って見下ろした。生物的な本能というのは克服しがたく、すぐにでも背中を向けて逃げ出したい気分だった。逃げ出したところで、背中からばっさりやられるのがオチだろうとしてもだ。

ポールはやれやれと呆れている。馬鹿なことをして、とその顔がいつていた。

「おまえはもう少し、利口なやつだと思っていたのだがな」

テツは横っ面に拳をくらって派手に吹き飛んだ。脳を揺すぶられたせいで、なかなか立ち上がれない。

「な、や、やめてくださいっ。なんで殴るんですか！」

見ていられなかったのだろう、スイは怯えながらも制止に入った。

その彼女を、殺気だけで殺しかねない眼光で貫く。のどを詰まらせて、筋肉が硬直した。身体のコから凍りついたようだった。なんだこの化物は、と恐慌に陥る。こんな恐ろしい、おぞましい人間は

見たことない。嫌悪と恐怖で口がきけない。足は他人のもののように動いてくれない。

「——そこをどけ、腰抜け」

団長の抑揚を欠いた声が鳴る。テツは痛みなど感じている暇はなかった。どうにかしないとスイまで処分されてしまう可能性があった。

目線も動かせないスイの隣をいく。あの男ならきつとぼくらを殺す。殺しを、殺しと思っていないのだ。鳥の羽をむしるように、人間の首をはねるに違いないのだ。

テツは口から流れる血をぬぐった。殴られることは予期していたから、歯は折られずに済んだ。これで完全な不意打ちだったら、奥歯の2、3本はやられていただろう。

団長はかがみ込むと、テツの髪を引っ掴んで顔を引き寄せた。

なんて臭いだ、と顔を顰める。この大男からは、ありとあらゆる死臭がするようだった。いままで殺してきた人間の、血と脂の混ざった臭いが、べったりとくっついていて錯覚がした。なんともおぞましい香料だった。

「ぬるい。ぬるいなあ、小僧オ……」

歯をむき出しにして、

「おまえの相手をやった一撃はよかった。感心したほどだ。だがな、そのあとの行動はなんだ」

「ぐっ」

髪をむしり取られる勢いで掴まれて、テツは苦痛にうめいた。

「わたしがなぜ人数分残したのか、おまえならわかるだろお、テツ。それをわざわざ他人のぶんまで食いやがって。少々マナー違反じゃないか。違うか？」

「それは」

納得できるいい訳をしなければ許されないだろう。この団長は、全身筋肉のくせに妙に合理的だ。感情論では論破できない。だが逆に、そうするに相当な理由があれば理解してもらえる可能性がある。

「のちの、ためです」

「ああ？」

「彼らは、人殺しに強い禁忌をもっています。育ちがよすぎるからです」

そういうと、いまだに立ち上がれない3人を見て、ふむ、と団長は先をうながす。

「団長の策は、殺しを納得できる前提がなければ成り立ちません。こいつらの中では、無力化した人間を殺すことは、最大の禁忌なんです。無理に殺させれば、完全に心が折れるに違いない」

それでは困るでしょう、と問う。

「乱戦になれば、嫌でも殺さなければなりません。その方が、まだいいのです、こいつらにとっては。戦の中では、気分が高ぶって殺しの嫌悪感など覚えている暇はありません。自分が死ぬか生きるかなんですから」

団長にとって、テツたちは兵隊だ。そのために武器食料を与えている。なのに本来の仕事を果たさなかったら割に合わない。

だがそもそも、なぜ団員ではなく使い走りの彼らを参加させたのか、という疑問も残っているのだが。

「この場で殺させるのは得策ではありません。だから、ぼくがやりました」

「なるほど」

掴まれていた髪が離される。

「確かに、あいつらの性格は、わたしよりおまえの方がよく知っているだろう。あながち虚言でもないのだろうな。だがなあ、糞ガキ、覚えておけよ」

「かつ」

凶器のような手で首を絞められる。ミシミシと嫌な音がした。振りほどこうと両手で抵抗するが、万力に絞めつけられているかのようにつくともしない。

「戦場での命令無視は、死、あるのみだ」

こんどこそテツを開放する。空気を求めてあえぐ彼に興味をなくしたのか、団長はきびすを返す。

訳もなく涙が流れてきた。苦しさのせいか、生きていることを実感しているせいか。彼にはわかわない。だが下手すれば殺されていながらも、と恐ろしくなる。敵に殺されるよりも先に、あの男に殺されるのではないかと思えてきた。

推移を見守っていたポールは、「命拾いたな、テツ」とありがたくもない饞別をくれて行ってしまった。なんとも思いやりのない先輩である。

「テツっ」

「うわ」

腹にタックルされたのかと錯覚するような飛び込みだった。スイは顔を泣きはらしながら、「ごめん、ごめんね」と繰り返した。キヨウイチの手前、抱きしめてやることなど論外だった。この青年は、そついうことを気にする性質なのである。

「すまない、テツ。おれたちのせいで……」

団長とのやり取りは、自分たちのせいなのだと理解しているのだろつ。キヨウイチは暗い表情でテツに謝罪した。

「ぼくが先走ったせいだよ。ふたりとも気にしないで」

「だけど……」

「問題なのはこれからだよ。さっき団長にいったのは、本心でもあるんだ」

わかつている、とふたりの幼なじみは頷いた。彼らだって、戦場で相手が遠慮してくれるなどとは考えていない。先の事態は、敵を無力化してしまったから起こったのだ。敵味方入り乱れる乱戦では、我武者羅に生き残るしかない、と覚悟を決めていた。

蚊帳の外に置かれていた顔色の悪い男子は明らかに弱っていた。テツから見ても、この先大丈夫なのか、と不安になる憔悴ぶりだ。その男子は「悪い」といったきり、黙りこんでしまった。人を斬ったことにショックを感じているのだ。

彼はあくまでも人間らしい。ならば、躊躇もせずには斬り殺した自分はどうなのだろう。テツは考えずにはいられなかった。

第10話

テツたち一行はその後、無事に本隊に合流することができた。誰も彼も、薄汚れていて野盗のような身なりの者ばかりだった。騎士然としているのは、ごく少数しかない。その中でも団長は異彩を放っているようで、しきりに噂をされていた。もっとも、本人は全く気にもかけていなかったが。

兵数はまずまずの集まり具合だった。途中で何度か小競り合いが勃発したが、数で勝る味方側は破竹の勢いで進軍を続けている。

先陣を預かったセブンス傭兵団は、確実な成果をあげている。テツに限らず、複数の戦闘を経験したキヨウイチとスイモ、何度も人を斬っていた。懸念された心配は無用だったようだ。いまだに人を斬る感覚に嫌悪を感じているようだが、その方が健常である証拠だ。血に酔ってしまうよりずっといい。

じりじりと押され始めたパツヘル侯爵側は撤退を重ね、ついに籠城するに至った。この機会を逃すつもりはないエメロス伯爵は、自ら陣頭に立って城攻めを行っている。指揮官が前面に出て戦うのは、白兵戦が主流の戦ならばこそのものである。おかげで寄せ集めの集団ではあるが、味方側の士気は高い。

相手の城はテツが映画で見たことのあるような立派なものではなかった。堀もないし、城壁は木製だ。だが遠目ではまだしも、近場から見ると容易には落ちないのは明白だった。

敵兵も背水の陣なのか、有利な高場から矢を射掛けたり、投石を行ったりと仕事に余念がない。テツは煮えたぎった油をかけられて

転げまわる味方を見て、積極的には参加したくないな、と思った。

平野戦ではあれほど攻めていた団長も、牙をおさめて様子見をしているようだった。流れてくる情報では、攻城用の破城槌が投入されるそうだから、本番はそれからだろう。

「明日あたりが佳境だろうな」団長はいった。

日が沈み、攻撃が中止された。野営地でヘトヘトになっていると、ポールが話しかけてきた。顔は汚れていつもより男前度が下がっているが、そのぶん野性味が増えて凶暴に見える。

どっかりと彼は隣に腰をおろした。

「それにしても初陣とは思えない働きだな、テツ」

すでに両手では数えきれないほどの戦果を挙げているポールには敵わないものの、テツが今日までに斬った人数は6人になるうとしていた。さすがに殺人への禁忌はなくなってきた。それがいいことなのかは別として、だ。

団長やポールから離れないようにして、正面からやり合うような戦闘は避けていた結果だ。おかげで盾も剣も健在である。キョウイチらは、人の脂で切れ味の落ちてしまった刀で奮闘している。それでもまだ、鈍器としては使えなくもないのだ。

「疲労がかなり溜まってきてるけどね」

「無理もないな。だが、大丈夫だろ。この戦、明日にはケリがつく」

城内からの抵抗が弱まってきているのは、テツも気づいていた。守っているのも人間である。逃げ場をなくしているから、精神的疲労は攻める側の比ではない。攻めている傭兵たちは、勝ち馬に乗れると早くも戦勝ムードである。

戦が早く終るのはありがたいことだった。食事は自前で準備しなければならぬし、熟睡できる環境にないので寝不足気味だった。野営になれてきたとはいっても訳が違う。知らない連中に囲まれているのだ。傭兵は金と時運で容易く裏切れることは知っていたので、全面の信頼など置けるはずがない。

「早く帰りたいな……」

「シアとしつぱりやりたいぜ」

ふたりは劣悪な環境に嘆息した。

その夜は何事もなく過ぎ去り、義務的にまた太陽は昇る。

以前何かの本で読んだことがある。ある部族は、太陽が昇る直前に祈りを捧げる掟があつて、彼らは自分たちが祈りを捧げないと、太陽は昇らず、世界が破滅してしまうと信じているそうだ。彼らにとって、自分たちこそが世界の守護者なのである。

朝日に目を細めながら、テツはその話を思い出していた。その部族が本当に世界の守護者なのかはわからない。もしかしたら、彼らが祈りをやめてしまったら、本当に世界が終わってしまうことだってあり得る。

人間は傲慢にも、自分は世界にとって必要不可欠だとか、唯一の存在だとか思い込んでいる。テツだってそのひとりだ。自分自身だ、と思春期の少年特有の思考だとしてしてみたこともある。

だが、こうして生きるか死ぬかの世界に放り込まれると、自分の生きる意味なんてものは価値をもたないことがわかる。

テツは斬った男の顔が思い出せない。彼らにも家族がいて、大切な人がいて、何かしらの生きる意味をもっていたはずなのだ。だが、そんなものはテツに何ひとつの変化もたらさなかった。彼らは斬られ、死んだ。ただそれだけの役割だった。

ぼくもそのうち、いや、今日にでも同じ運命を辿るかもしれないぞつとしない話だった。テツは自分が人類にとって欠かせない存在だとは思ってもいないが、何ひとつ価値をもたない存在だとは認めたくない。遠見テツの遺すものが、相手の剣への赤黒い血潮と脂だけなんて思いたくはない。

死んだら終わりなのだ。いまのままでは、死んだら何もかもが終わってしまう。そんなのは御免だった。

せめて自分の中だけでも、意味のある何かを見つけない。かの太陽を祀る守護者のように、心から信じられる芯がほしい。それは嘘でも真実でも構わない。真偽は頭の硬いインテリが決めるものだ。テツが欲しいのは、主観的な真実なのである。

他の者たちも起き始めた。キョウイチやスイは似たり寄つたりの酷い顔をしている。きっとテツも同じような顔をしているのだろう。傭兵だ剣士だと言葉で飾っても、実態はなんてことない。こちらの世界に飛ばされて自分は変わったのだろうか。幼なじみたちの顔に

鋭利さが見受けられるようになったのと同様、彼らから見て、自分は変わったのだろうか。

団長、ポールたち、セブンス傭兵団の面々が集まってくる。その中に、かつての道場生仲間たる男子の顔はなかった。戦闘を続けているうちに行方がわからなくなっていたのだ。

テツたちは彼の話題に触れなかった。きっと、次に姿を消すであろう可能性が高いのは、彼ら3人だったからだ。

食事ともいえない簡単なものを口にする。いま食べた肉が、なんの肉だったかなんてわからない。ただ生き残るためのエネルギーを補給する行為だ。味はさして重要な要素ではない。

みな口数は少なかった。ポールだけが相変わらずの陽気さを発散している。この調子者を気取れる気概が彼の強さなのだろう。若輩ながら、一騎当千を誇る他の団員となんら遜色ない実力を持っている。

太陽が昇りきる頃、城攻めは再開された。一晩で修復された箇所もあるが焼け石に水だ。すでに満身創痍の身には死臭がしているようだった。

団長は欲をはらなかった。こういうときにこそ、一気に攻め立てるのかと思いきや、表情はちっとも動いていない。むしろ、つまりない三文芝居でも見せられているかのように、気乗りしない様子である。この位置からだ、到底一番槍など望めない。

破城槌で城門を突き破ろうと、最前線は敵味方入り乱れる狂乱の様子を見せている。必死の形相で矢を射掛ける守備側と、盾で矢を

防ぎながら大人数で槌を押し込む攻撃側。すぐ隣の人間が倒れようと構わない。辺りには怒声が響いている。

ビリビリと腹の底に反響するほどだった。これが戦場か、これが殺し合いなのか。テツは順応したと思っていた認識を改めた。戦場とは、恐怖と狂気と悦楽に満ちた世界なのだ。

ク、と自然に口元は歪んだ。この劇場では、自分の価値など考える暇はない。ただ剣戟の音に合わせて踊るだけだ。くるくる、くるくる。耳障りな鉄の打ち合わされる音。深々と胴をえぐられ、ハラワタをこぼれさせながら倒れる男。数少ないながらも女も混ざっている。彼女たちはドレスの代わりに鎧衣装に見をつつみ、ステップをし、ターンを決める。くるくる、くるくる、と。

指は何かを求めてムカデの足のようにひとりでに脈動していた。テツは自分の手を気色悪げに眺める。彼の手は少し逡巡するように動きを止めたあと、迷わず剣の柄に握りついた。

ぼくは剣を振りたがっているのか、と納得する。遠見テツは殺人狂ではない。戦闘狂でもない。ただ純粹に、剣を振りたがっているのだ。彼に相手は必要ない。倒すべき相手など存在しない。いつも素振りをするのは、自分のためだけなのだ。

戦況はいよいよ佳境に入ろうとしていた。

周囲より一段と目立つ鎧をまとった男が見える。彼がエメロス伯爵だ。勇猛果敢で名の知れた騎士だけあって、大した存在感だった。彼を守るように布陣する副将と思わしき男も、負けず劣らずの気迫である。

このまま開城せしめれば、一気に城内になだれ込んで勝利は確実だろう。だが、歴史が示すように、転機というのは不意にやってくる。

誰とも知れない者が放った流れ矢だった。破城槌を担いでいる男たちを鼓舞していたエメロス伯爵の首元に、矢は吸い込まれるように突き刺さった。身体を一瞬痙攣させたあと、伯爵は馬上から転げ落ちた。

誰もが茫然とその光景を見送っていた。周囲の人間には一切命合せず、伯爵に当たることが最初から決定していたかのような矢の軌跡だった。

戦場の流れは変わろうとしていた。それも悪い方向に。

「団長」

ポールはどうするのか、と問いかけている。

「伯爵の剣は当代一の剛剣だと聞くが、流れ矢までは防げなかったか」

テツたちが混乱している中、静かに彼は呟いた。

「撤退する。あの男のことだ、即死でなかったら副将に城攻めを継続させるのだろうが、我々が付き合う義理がない」

それに、と忌々しそうに続ける。

「当主が死んだら褒賞どころの話ではなくなる。はぐらかされて

終わりだろっさ」

雇い主が死んだのだから報奨金は出せない、という寸法である。貴族たちにとって、傭兵の扱いなどそんなものだ。いくらでもいい訳はつくのだから。

戦場は混乱をきたしている。後方で様子見をしていた傭兵たちは、そうそうに撤退を決めたらしく、みな雁首並べて戦場から離脱し始める。

団長以下、セブンス傭兵団もそれに続く。

勝利を得られなかったものの、これで帰れるのだと安堵する。キヨウイチもスイも、口には出さないが嬉しそうであった。

だが、とテツは暗澹たる思いに駆られる。あの団長がこのまま戦果もなしに満足するのだろうか。少なくともコストを払ったのに、ボウズでは商売あがったりである。

損得利益を第一に考える性格を知るテツからすれば、鮮やか過ぎる団長の引き様は不気味ですらあった。何か損失を補填する考えでもなければこうもいくまい。

まだ人がまばらな野営地に戻り、馬をかつさらって戦場をあとにする。着の身着のままである傭兵は非常に逃げ足が速い。戦場の勝敗が決する前に、セブンス傭兵団は撤退を果たしていた。

第11話

行きと違って、帰りは敵や野盗と遭遇することもなくスムーズに帰還することができた。風の噂では、城は結局落ちたらしいが矢を受けたエメロス伯爵は戦死。相手方であるパツヘル侯爵も、報復とばかりに首を落とされたらしい。

結果は両者共倒れという結果だった。伯爵、侯爵共に当主が失われたのだから、どちらの領地もかなり混乱すること間違いなかった。

撤退後、2回目の朝日を拝んだ一団は本隊に合流した。

様々な傷を作った道場生組は酷く心配されたが、大きな負傷はしていないことがわかった、安堵のあまり泣き出す者が続出した。

ポールは「青春だねえ」とひとり納得すると、早速シンシアの腰に手をやってよろしくやろうと試みる。その手をスナップの効いた張り手で払われると、非常に痛そうな小気味いい音が鳴った。

涙目で手に息を吹き付けるポールを無視して、テツの傍にやってきた彼女はにこやかにいった。

「よく帰ってきたね」

「……ええ、本当に」

この人は母親のようだな、と抱擁されたテツは思った。年齢は母と子ほどには離れていない。せいぜい姉と弟だ。だが実母には悪いが、シンシアにははつきりとした母性を感じられる。マザコンでは

ないつもりでも、その温かい抱擁は心安らかになれるものだった。

ひとしきり堪能したあと、シンシアは手を振ってポールの下に向かっていった。これからふたりで蜜月のときを過ごすのだろう。テツは連日の行軍でヘトヘトである。絶世の美女が目の前に現れたとしても、肝心の愚息は反応しそうにない。

顔見知りの道場生にも声をかけられる。道場のみなは、ひとり仲間が減っていることにはすぐ気づいた。だが彼らばかりでなく、実際に戦場に出たテツたちが共通して思ったのは、「死んだのはひとりで済んだのか」ということだった。

日和見な現代人であつても、戦場に出た仲間が全員無傷で生還するなどとは無条件に考えていない。だからこそ、失われた仲間の命は粛々と受け入れられたのだった。

装備一式はサツキが外すのを手伝ってくれた。もうずっと装備に身体を締め付けられていたから、それらを外すとやっと一息つくことができた。ありがとう、と礼をいうと、彼女は微笑んで荷物を置きに行った。

身軽になった身体で腰をおろす。もう長いこと安心して休息を取っていなかった気がする。だがこうして見慣れた顔に囲まれると、自分は帰ってきたのだと実感できた。

蓄積されていた疲労が一気に襲ってくる。すぐにも眠りにつきたい。目をしょぼしょぼさせていると、苦笑いしたミコトが飲み物を手にやって来た。

彼女はテツの隣に座る。

水が入ったコップを手渡されたテツは、一気に中身を飲み干した。身体中に染み渡るようだった。行軍中は、食べ物はもとより、水も十分に得ることができなかった。ただの水がこんなにもうまいものだったのか、と最後の一滴まで舐め尽くす。

「……頑張ったんだね、こんなに傷だらけになってさ」

すでに血は止まっている。浅い傷跡は、至る所に激戦の名残としてテツの身体に残されている。ミコトは怪我の程度を慈しむように確認して、大きな怪我がないとわかると頬を緩めた。

「テツも、キョウイチも、スイも帰ってきた」

それから、すでに死んだであろう道場生の名を小さく口にした。それは祈りのようだった。

「わたしが代わりに参加していれば、彼は死ななかったのかな」

「でも、ミコト姉さんが死んでいたかもしれないよ。彼の身代わりに」

「そう、だよな。わかってるのよ。わたしがいつているのは、意味のない感傷なんだっていうことは。でもっ……」

自らの膝に顔をうずめて慟哭するミコトを慰める術を、テツはもち合わせていなかった。全ては可能性の問題でしかなかった。すでに結果が収束してしまった以上、仮定の話など無意味ではない。

「責任を感じる必要などありませんよ。彼の死の責任を取れる存在がいるとしたら、それは人間とは違う次元の存在でしょうし」

慰めるつもりはなかった。ただ、事実を語るだけだ。起こってしまったことの因果関係を辿れば、行き着くことのない螺旋に迷い込む。元の世界でいわれていた責任の所在なんてものは、ひとつの擬制でしかないのだ。誰かに責任を負わせるために、とりあえずこいつが悪い、と決めることだ。

だが、いかなる言葉で理由を語ったとしても、この優しい姉は納得することはないのだろうな、とテツは思った。

難儀な性格だな、と憐れみ。優しくもある、と彼は尊んだ。それがミコトの美点であるのだ。彼女のように他人の上に立つ人間には、他者を慈しむ心が不可欠なのだ。その両極端たる位置に属している彼からすれば、彼女の弱さは尊いものに思えた。

「テツも、強くなっただね」

昔を懐かしむようにいうものだから、彼は不満気に口を尖らせた。

「別にぼくが強くなっただけじゃないです。姉さんたちが弱くなっただけですよ」

「能力が失われたことならその通りかも。でもさ、わたしがいつているのは、形式的な強さなんかじゃないのよ」

テツは話の要点が掴めなかった。この世界に飛ばされて、『気』という能力が失われたことによって道場のみなは弱体化した。最初に団長に切り殺された道場生だって、能力を使えたなら、あんなに

あつさりとやられなかっただろう。

能力者が絶対者として君臨していた頃を思い出す。その世界では、テツは無能力の変わり者に過ぎなかった。だが、その扱いに不満を覚えたことはなかったし、みなが白眼視するのも当然だと思っていた。

人間は才能に左右される。自分の能力に見合った職業につくのが一般的で、スポーツ選手の場合は、才能があるとされる競技を専攻するのが常識だ。誰が向いていない、とされる競技に打ち込もうか、大半が、自分に向いていないとわかった時点で去っていくし、努力して立ち向かって、強大な天才という化物には決して敵わない。

テツは自分に剣の才能があるとは微塵も思っていない。自分が強いとは万にひとつも考えつかない。なぜなら、どうやっても、どうあがいても届かない頂を知っているからだ。

富士を知っている人間は、近くの小山のてっぺんに辿りつけても、この世界で自分が最高峰にいるとは絶対に思わない。同伴者がどれだけ褒めたたえても、むしろ恥じる思いに駆られるだろう。

テツは、自分を強いというミコトが齒がゆかった。この人は、こんな弱々しい表情を浮かべるような人ではないのだ。いつも大口開けて笑っていて、大男だろうと竹刀ひとつで吹き飛ばす豪胆な娘なのだ。

キョウイチも、スイも、テツなんかでは足元にも及ばない強者なのだ。

理想を汚された気がした。それは身勝手な感想なのだろうが、思

わずにはいらなかった。

彼が長いときを懂れて過ごした人々だった。敵わぬものと、届かぬものとわかつていても、いや、だからこそ能力者でなかった少年の目には古代の英雄のごとく映っていたのだ。

——ぼくは、強くなってなんかいない。

口から出かけた言葉は、ミコトの表情を見たら失われてしまった。彼女は心から嬉しそうに語っていたからだ。それは、親が子を見守るようであり、手のかかる弟が一人前の男になって喜ぶ姉のようだった。

「テツはよくやっているよ。力を失って混乱するわたしたちを守ってくれた。率先して仕事をしてくれたのは、そういうことでしょ？ 団長の目が、わたしたち女性にいかないようにしてくれてる」

「そこまで意識してたわけじゃないですよ」

「なら無意識に守ってくれていたのかな。この優男め」

「冗談めかしてミコトはいった。」

そういえば、長いことこの姉の軽口を聞いていない気がする。女性らしくかぬ下ネタ好きの彼女だが、さすがに大きな環境の変化があったから自重しよう。

あまり下品な冗談はよろしくないと思っていたテツだが、こうして思い出してみると、少しばかり寂しい気がした。一度食べた珍味を無性に食べたくなる心境に似ていた。

「テツはまとめ役なんだ。リーダーなんだよ」

「まさか。それはキヨウイチが」

「あいつの姉としていわせてもらうけど」

そういつて、テツの瞳を正面から覗き込んだ。

「いまのキヨウイチは、テツより弱いよ」

「そんなこと――」

「ないって？　ねえ、テツ。本当にそう思ってるの？」

「……」

黙ってしまった。それが、何よりの回答だった。

彼にとって、キヨウイチとは絶対的な強者だった。リーダーだった。道場は彼を中心に動いていたし、テツはその最下層に属していても、彼には多大な信頼を置いていた。それは幼なじみたる経験則からくるものであるし、周りの評価から当然に導きだされるものでもあった。

戸惑いがあった。混乱があった。かつて経験したことがない岐路に立たされているようだった。

キヨウイチを立てるようにテツは行動していた。それは自然な行動だった。考えるよりも早く、反射的になされる行動だった。

気づいていても、不思議には思わなかった。それはテツにとっての常識だったからだ。

「弟を立ててくれるのはありがたいよ。あれでもできた弟だ。でも、この傭兵団では、キョウイチは力不足だ」

「そんなことはありません」

「あるんだよ。あいつじゃ、団長と渡り合えない。剣でも、口先でも」

道場生は数を減らしたけれど、明確な敵があったわけではない。下手したら全員があのまま餓死していたかもしれないし、野盗に襲われて殺されていたかもしれない。傭兵団に拾われたのは、決して不幸とはいえないのだ。

だが、彼らはテツたちを居候でいさせるつもりもない。役に立たなければ、たちどころに捨てられるだろう。

団長は短くない間、同じ釜の飯を食べた相手であっても容赦はない。慈悲もなく、ただ冷然と切って捨てる。

そうならないためには、役に立つことをアピールしなければならぬ。また、意見の対立があったなら、なるべく要求を通さなくてはならない。

「キョウイチはなまじ才能があったから、自分より強者になかなか会ったことがない。それこそ、父親くらいだろうね。簡単に勝てなかったのは」

「ミコト姉さんはあいつを過小評価し過ぎです。確かに一理あるかもしれないですけど、キョウイチはそんなに打たれ弱いはずがない」

ムキになつて返すと、微笑ましいものでも見るような目をされてしまった。納得がいかない。この幼なじみの姉は、何をいいたいのだろう。

「これも一種の呪いなのかな……」

「今日の姉さんは、少しおかしいですよ。急にキョウイチの悪口いったり、呪いだなんだとかいい出したり」

テツは無性に泣きたくなった。幼い頃、両親が喧嘩しているのを見てどうしようもなく悲しくなったことがある。そのときの気持ちに似ていた。

「ごめんね。困らせるつもりはなかったの。帰ってきたばかりで疲れてるのに、変な話して悪かったわ」

泣きそうなテツの顔を見て、ミコトは取り繕うようにいった。

けれど効果は薄いようで、ムスツとしたまま、

「いえ、いいんですよ」

言葉とは裏腹に、明らかに意気消沈している。

ミコトは己の馬鹿さ加減に呆れるしかなかった。疲労困憊のテツ

に話すような話題ではなかったのだ。時と日を改めるべきだった。

彼は精神的に成長している。道場生の中でも特に。そんな考えがあったからこそ、自分と同等、あるいはそれ以上に頼りになる存在として話をしていた。だが彼はまだ20にもなっていない少年だった。やっと青年と呼べる年齢に手をかけたばかりだ。

最近の状況に毒されて、正常な判断が鈍っていたといえる。失態だ、と彼女は思った。

「ごめんね、本当にごめん」

「……だから、気にしないっていつてるでしょう。いいですよ」

「いや、絶対にいじけてるでしょう、テツ」

「いじけてません」

「いじけてる」

「いじけてません」

まるで子供の喧嘩だった。だが、思い返してみても、テツとミコトは大人だとは到底いえない年齢だった。

そもそも、大人といえる範疇とはどういったものを指すのだろうか。第二次成長期が終わったら大人なのだろうか。恋人ができれば大人なのだろうか。性行為をしたなら大人なのだろうか。

明確な基準など、どこにも存在していない。その意味で、彼らは

まだまだ子供だったのだ。

殺し合いの世界に身を投じ、その身に血潮を浴びたとしても。身体は成長しきったとしても。何か大きなものに怯え、必死に答えを手探りで探す様子は子供でしかない。

だというのに、自らを大人だと錯覚する人間のなんて多いことだろう。今も昔も変わらない。それは、世界が変わってもいえることだった。

「もう、頑固なやつだな、少年。お詫びにお姉さんの胸を貸してあげるから、ここで心ゆくまで泣くといい」

「全身全霊でありがた迷惑です」

「文法的におかしいでしょ、それ」

ミコトは無無をいわずテツを抱きしめた。

むぐむぐと抵抗するが、彼女は予想以上の力だった。抜け出せないと悟ったテツは抵抗を諦める。胸が顔に押し付けられて苦しい。健全な思春期男子なら、泣いて嬉しがりそうなシチュエーションだったが、戦疲れの少年には豚に真珠、猫に小判だった。

酸欠なのか疲労からなのか、頭がうまく働かない。呆けたように身を任せる。

ミコトは慈母のような安らかな表情で受け止めた。共に剣を振るうことはできなかった。ならば、できるだけのことをして癒してあげたい。そう思った。

この世界に飛ばされて少年を襲った出来事は、あまりにシリアスなものだった。潰れてしまってもおかしくはない。

道場生の少女たちの中には、眠れない夜を過ごす者もいる。もう元の世界には帰れないのではないかと、諦めている者もいる。かくいうミコトも、両親のいるあの道場には、もう二度と帰れない気がしていた。

不安なのだ。誰もが先行きの見えない未来に怯えている。縋りたいのだ。暗闇で手を引いてくれる存在が欲しいのだ。

その役目はキョウイチにあるとテツは考えている。あり得たかもしれないことだ。能力が失われていなければ。

弱肉強食の理の下では、人間の倫理観など役に立たない。善だ悪だといい出すのは、いつだって恵まれている者たちだ。今日を生きるのが精一杯である人間には、よき生き方など考える余裕はない。

この子には、自分の信じる道を歩いて欲しい。そう考えて、これは偽善だな、とミコトは思い直した。

傭兵団は慈善組織などではない。ましてやあの男が率いているのだ。団長、そう呼ばれている大男をミコトは好きになれなかった。彼を好いていない、という意味では、道場生は押しなべて同じ感想をもつだろう。だが、それは強烈な恐怖感からくるものだ。

恐怖は確かに感じる。いままで会ったことがないような、負の感情の権化といってもいい。どうしたら、あんな不快な雰囲気をもし出せるのだろうかと思議にさえ思う。

みなと違っているのは、あの男に感じる不吉な勘ともいえるものだった。女の勘というべきだろう。全くもって科学的ではないが、自分の勘が捨てたものではないことをミコトは知っていた。

—— 団長は、近い未来に大きな障害となる。

そう直感していた。

胸の中で脱力している、昔から知っている少年を抱きすくめる。彼の体温を感じると、不安は少しずつ霧散していく。

才能に恵まれなかった少年。

ただひたすらに剣を振り続けた少年。

周囲の嘲笑に一步も引かなかった少年。

彼を思ったび、胸の奥がじく、と痛んだ。それはかつての所為のせいだ。彼女が下したある選択のせいだ。

選ぶ選択肢が異なっていたら、違う未来だったかもしれない。後悔と諦観に犯される心境でそう思う。

だが、もしもの未来は選べなかった。いや、自ら選べなかった。いまでも、あの選択でよかったのか、と迷わない日はない。最善だと選んだ選択が最悪の結果につながるのでは、と懲りずに悩んでいる。

テツの剣は酷く危うい。

愚直なのだ。清廉過ぎるのだ。そういっただけなら彼は否定するだろうが、見ていて美しすぎるほど一途だった。

それ故に、すぐに汚染される。彼の内情を表すといつていい剣だ。黒い感情に支配されれば、剣はたちまちにおぞましい代物に成り下がる。

デジャヴを見た。否定する気持ちはあれど、認めない訳にはいかなかった。彼らは同じ因子をもつ。一方はすでに気づいている。だからこそ、目を付けられているのだ。

渡すものか、と守るべき少年を確かめる。すでに疲労はピークのようで、うつらうつらしている。

守ってやらねばならない。そう思いながらも、自分に彼を気にかける資格はあるのだろうか、とミコトは唇をかんた。

そう、こんな袋小路に迷い込むような思案は、何度も繰り返してきた。テツから好意を伝えられた、あの夏の日から、ずっと、ずっと。

第12話

幼い日に紹介された少女は太陽のような笑顔で「ミコトだよ」と自分の名前をいった。まるで大切な宝物を自慢するみたいだった。それだけで、彼女が家族からどれだけ愛情を注がれているか想像はついた。

テツは、キヨウイチの背中をいつも見て育った。生まれも何もかも異なるのに、彼らはウマがあった。それはパズルのピースがカチリ、とはまるような関係だった。

キヨウイチは幼い頃から明晰だった。行動力もあつた。人を惹きつける何かがあつたのだ。それに対して、テツは口数が少なかったし、魅力というものをどこかに置き忘れた少年だった。

光は影があるからこそ際立つというが、まさにそんな関係だったかもしれない。本人たちにその気はなかったとしても、だ。

キヨウイチがテツの手を引き、その後ろをスイが追いかける。そんな構図が自然とできあがった。子供の頃は、それで問題がなかった。誰もが優秀ではいられない。グループの中であつても優劣は存在する。その意味でいえば、テツはまだ許容される『欠格』だった。

だが時間を経て、剣という道に足を踏み入れてから状況は一変した。能力をもたないテツは、最低限の資格さえもち得ないとみなされてしまう。

自然と孤立しがちになった彼に声をかけてきたのがミコトだった。それまで、何度か顔を合わせた程度だったが、キヨウイチの姉とい

うことで全くの他人ではなかった。

ひとり黙々と剣をふるテツに、彼女は自分の名を告げ、他愛もない話をした。幼い少年であっても、自分に氣を使ってくれていることは薄々理解していた。それはありがたいことだった。

集団から奇異の目で見られることには慣れていた。それでも、親しげに話しかけてくれる存在は貴重で、得難いものだった。

彼女と話している間は、なぜだかあたたかい気持ちになった。それは、陽気な雰囲気がつつたのかもしれないし、彼女自体に人を優しくする魅力があったせいかもしれない。

この姉にして弟あり、といったところか。テツは純粹に羨ましいと思った。どうすれば、彼女のようになれるのだろう。人はみな、生まれたときは同じような状態だというのに、成長するにつれて優劣がはつきりしてくる。恵まれた者と、そうでない者が区別される。

剣を振ることは楽しい。心が穏やかになれるからだ。

ミコトと話すことは楽しい。心があたたかくなれるからだ。

才能の申し子であるはずなのに、自分のような人間に別け隔てなく接することができる。いい人だとテツは思った。好ましい人だ、とも。

ミコトはキョウイチの姉であり、テツやスイの姉でもあった。

顔は仏頂面で、能面みたいと揶揄される少年でも恋はする。その初恋の相手が、身近な優しいお姉さんであったのは、なんてことな

いい、順当なことだったといえる。

——懐かしい夢を見ていた気がする。

頬についた砂を払って、テツは身を起こした。地面にはぼろ布を引いてあるだけで、クッション性など望むべくもない。固くなった身体をひねると、ボキボキと小気味いい音がした。

周りには同じように横になっている人間がちらほらと見える。まだ早朝で、眠っている者が殆どだ。

空は馬鹿らしいくらい澄み渡っている。この空は、テツが長年見慣れていた空とは、やはり異なっていて見える。物理的にそうなのか、精神的なものなのか、確かめる術はないのだけだ。

二度寝する気にもなれないテツは、眠気覚ましにストレッチと素振りでもしようと思いついた。

かたわらの剣を手にとると、確かな足取りで歩き出す。このショートソードも修羅場を共にくぐり抜けた相棒といえる。近いうちに返せといわれるだろうが、どうにかして所持させたままにして欲しかった。気は進まないとしても、あの団長に直訴するしかなさそうだ。

女たちが眠る荷馬車の前には、昨夜の見張り番である団員があく

びをかみ殺していた。

ひとりには傭兵団の紅一点、クリステイナである。荒れくれの男たちとタイマンはれるだけあって、勝気な性格をしている。それでいてクールな面持ちなのだから、形容しがたい女性である。彼女は戦闘で邪魔にならないようショートヘアにされた髪を指に巻き付けて暇を潰していた。

この女性剣士とはあまり会話をしたことがない。テツに気づいたクリステイナは、眠たげな目を寄越したきり、興味を失ったように視線を外した。

ところどころ見やって、足場の適した場所を見つけると、テツは早速ストレッチを始める。この世界の人間は準備運動という概念がないらしく、身体を動かす前に奇妙な動きをする彼を物珍しがった。動きの理由を話すと、理解したような、していないような曖昧な表情をされた。

早朝の空気はいつにも増して清々しい。この世界に来てから口にしたうまい物といえば、この朝方の澄んだ空気といえる。

剣の柄に手をかける。それだけで、外界の煩わしい悩み事が音もなく消え去る。世界は、自分と、自分でないものとの、二元的な世界に変貌する。

そこで意味のあるのは遠見テツという存在だけだ。だから、素振りをするのも、仮想敵として思い描くのも全て自分だ。

その空想の敵である自分は、いままで出会った相手の長所をもち寄ったキメラ的なものだ。

元の世界において、能力者たちは絶対値が離れ過ぎていて、テツの相手には相応しくなかった。その結果、必然的に生まれたのが、テツの一步先を行く存在である。

彼よりも先に行く技量をもつ剣士。現実でテツが見て、聞いて、経験した相手のダウングレード版である。

相手にするのは常に自分より強者。テツの常識からいって、弱者というのは他でもない己なのであって、相手が劣っているという事態は想像さえしなかった。

戦の疲れはほぼ抜けている。安心できる寝場所で眠れるだけで、こんなにも疲労回復度が違うとは驚きだった。現代人気分はまだまだ健在であるようだ。遠征などは、とてもじゃないが耐えられそうにない。

あまりギアを上げずに剣を振り始める。

最近、もっぱら参考に行っているのは団長の剣筋だ。あの圧倒的な剣戟は惚れ惚れするほどだが、パワー型でないテツがそのまま丸呑みできる代物ではない。

盗むべきは、有無をいわさない容赦のなさ、精密機械のような剣の扱いだ。防御した剣を叩き折る剛力と、それを軽々と取り回し、死角や急所を狙ってくる剣は、まさに悪夢といえる。

無理はしないで、初めは剣を滑らすように振る。空気を切り裂く際の、耳を抜ける爽快な音が好きだった。

振り下ろしは的確に急所、あるいは防具の隙間をぬって行われる。先の戦を経験して、一番重要だと感じたのが鎧の間を斬りつける技術である。

腕、足の駆動部分。喉元、または顔面。盾の覗き穴も、範囲はせまいが狙いどころだった。

金属でできた鎧ごと斬ることは適わなかった。それに驚いていたのは、キョウイチやスイたち能力者組だった。

彼らの常識からいえば、刀はまさしく必殺の武器であり、厚さ数センチの鉄板であっても斬り裂き、貫くことができた。だが、それは刀に自らの『気』をまとわせた条件下の場合であって、素を晒す刃では実現しない。

危うく、それでキョウイチは死にかけた。鎧ごと真つ二つにするつもりで振り下ろした刀は、無情にも甲高い音を立てて弾かれた。スイの援護がなかったら、一瞬でも呆けてしまった彼は返り討ちにあっていただろう。

刀に対する絶対の信頼感が揺らいだ瞬間だった。それ以降、無理な戦いをしなかったが、生き残ったのは、あるいはその恩恵なのかもしれなかった。

大人数が入り乱れる戦場は、一対一の立ち会いとはまるで違う。乱戦はテツの好むところでなかった。考えるよりも反射することを要求されるのだ。無駄な思考は己を殺す。ただ遮二無二殺すためだけの剣を繰り出さなければならない。

剣を操っているのではなく、剣に操られているような気分だった。

テツにとって、剣は身体の一部である。遠見テツを構成する重要な要素である。だからといって、剣がテツなのではない。イコールで結ばれるような関係ではないのだ。

あくまでも、剣は主人の支配下に置かれるべきだ。逆の立場に陥ったら、本末転倒もいいところである。目的も意識も埋没して、血に飢えた快樂殺人者に成り下がってしまう。

ぼくはそんな下品な存在にはなりたくない、とテツは思った。

剣は己のためだけに存在している。それで十分だった。

汗をかきすぎても不快でしかないから、身体が十分あたたまるのを見計らって素振りをやめる。いつもより幾分か高めの心拍を確認しながら、今度はクールダウンしていく。

全ての行程が終わる頃には、丁度いい時間帯になっていた。みなが始めて、生活音がBGMよろしく流れ始めていた。

昨夜から何も食事を摂っていないことに気づいたテツは、無意識に自分の腹に手を当てた。

こちらに飛ばされてからというものの、1日2食が当たり前の生活であつたし、先の戦では何も口にできない日もざらにあった。人間慣れれば、あらかたのことは順応できる。とはいっても、燃料がなければ満足に動けないのは人間も機械も同様だ。

人間、遠見テツの燃料ランプはレッドシグナルを発していた。頼んでいないのに、腹からは「ぐう」と不思議な泣き声が聞こえて

くる。

彼の鼻孔が香ばしい香りを捉えると、我慢できずに小走りで集団に混じる。

「ようやくお出まいかい、テツ。もうみんな食べ始めてるよ」

そういつてシンシアはあたたかいスープをよそってくれた。礼をいつて受け取ると、その横からパンが一切れ差し出される。

サツキだった。なんとも堂に入った配膳ぶりである。歴戦のシンシア嬢と並んでいても、なんら遜色ない。

感心した目で見てみると、彼女は誇らしげにCカップの胸を張って、

「給食当番です」

といった。特に意味はない。

傭兵団における女性の役割は、日常雑多的なことに限られる。自ら剣をもつて戦うのはクリステイナくらいなもので、あとは団員に囲われている女性である。その意味でいえば、サツキを含めた道場生組の女性諸君はなかなか有用といえた。

普段は雑事に身をやつし、有事の際には武器をもって戦うことができる。さすがに攻勢的な場面では人を傷つけることに抵抗があったとしても、自衛のためなら基準もゆるくなるう。

団長は有用だと考えているからこそ彼女たちを手元に置いている

のだ。それは、テツたちにもいえることだった。

各自が満腹とまではいかないものの、満足できる程度に朝食を胃に収めると、タイミングをはかったように団長がみなに呼びかけた。いつもなら黙々と食してから、定時であがる公務員みたいにさつさと立ち去るのである。テツは、なんだなんだ、とあまり気持ちのよくない気分ですすめを傾ける。

話を聞いてみると、危惧された嫌な方の話ではなく、先の戦に参加した者への褒賞だった。

敵の首領を打ち取る前に味方の大将がやられてしまったのだし、褒賞も何もないのではないかと思う。少なくとも、あの戦闘で得たものといえば、敵の血潮と戦闘経験くらいである。

そう思ったのだが、団長はどこからか手に入れたという金銀の装飾具を掲げてみせた。倒した者の中で、なりのいい騎士はこうした「落し物」をもっていることがあるらしい。

さすがは傭兵団の団長だな、とテツは呆れるより感心した。初めての戦闘では、相手の身なりなんて元より、どんな顔をしていたかさえ覚えていない。金目のものをもっていそうな騎士を選んで倒すなんて真似はできなくて当然だった。

よく働いたポールが順位1位で褒賞を受け取る。金のネックレスやら、宝石やらを受け取ってご満悦の様子である。早速シンシアはいつもより二倍増で彼の機嫌をとっている。なんともたくましい。

意外なことに、テツは団員たちが褒賞を受け取ったあとの順位で

最初に名を呼ばれた。彼としては、そんなに働いた覚えはないので、やや困惑気味である。

何かの彫刻が施された指輪に宝石が3つほど。命がけで得た褒賞としては、高いのだから相当なのか判断がつきにくい。

「……どうしようか」

キョウイチとスイは、財宝類はもらえず、食料を代わりに得ていた。宝石よりもそっちの方がいい、とはいいい出しにくい。こんな貴金属類よりも食料の方がずっと有用ではないか。

これを換金する手段も場所も知らないテツにとっては、文字通り宝の持ち腐れである。

三者三様に驚喜している中、テツはガヴァン副団長に声をかける。面倒そうに応じた彼は、「例の一件か。それで、どうしたいのだ」と肩をすくめた。出発前の約束は覚えてくれていたらしい。そうでなければ、セブンス傭兵団の副団長は務まらないだろう。

「剣を常時でも所持する許可が欲しいのですけど」

彼はふむ、とアゴをなでて、

「それならいうまでもなく許されるだろうが。そうだな、団長にはわたしがいつておく」

「差し出がましいのですが、本当に大丈夫なんですか？ あとで問題になっても困るのですが」

「くどい」

ギロ、とテツを睨みつける。どうやら大和人特有の慎重さがお気に召さなかったらしい。不機嫌そうな顔をさらに不機嫌にしたガヴァンは立ち去ってしまった。

取り残されたテツは「まいったな」と頭をかく。まあ、少し怒ったくらいで約束が反されることはないだろう。そう判断して歩き出す。

褒賞として受け取ったものを手で転がしながら散策し、誰か世話になった人にあげようと結論する。ただ死蔵されるよりも、喜んで貰ってくれる人に所持された方がこいつらだって本望だろう。

思い立ったらすぐ行動、が信条のテツは、朝食の片付けをしているシンシアの下に向かった。彼が世話になった人と考えて、真っ先に思いつくのがこの人である。

彼女は予想通り片付けをしていたが、何やらご立腹の様子だった。かたわらのポールが、褒賞の首飾りを見せびらかしているのである。

本当はあげるつもりのかせに何してるんだか、と微笑ましく思う。

ポールはどこか子供っぽいところがある。彼からすれば、ただプレゼントするだけでは面白くないのだろう。だからこうしてからかっているのだ。

日を改めた方がいいかな、と思案するものの、ここまで来たのだから用事は済ませるべきである。

ポールのちよっかいから顔を背けて洗い物をするシンシアに話しかける。

「え、これ、あたしに？」

彼女は、差し出された宝石を驚いた表情で見つめる。

世話になったお礼だというと、水に濡れてる手をそのままに、

「なんて可愛い子なんだいっ」

と感極まった様子でテツをホールドし、有無をいわず彼の唇を奪った。ちうー、という擬音が丸聞こえである。「ああっ、テツ、てめえ」とまるで彼女を寝取られた亭主みたいな悲鳴も聞こえる。

しつこい口吸いから開放されたテツは呆けている。辛くも17年間守り通した彼の初物は、こうして散らされたのであった。

「やいやい、この糞ガキめ。人の女に手を出すとはやってくれないじゃないか」

微妙に泣きそうな表情でポールはいうが、

「何、馬鹿なこといつてんのさ。この子はね、初めて手にした褒賞をだよ、世話になったあたしにくれるっていつてんだよ」

「ぐ、ぬぬ」

「なんてできた子なんだいっ」

辛抱ならん、と魂が抜けているテツに再び強襲する。ミサイルを打ち込まれたあと、機銃掃射を受けたかのごとき彼には抵抗する力は残されていなかった。

口づけされるといふよりは、生気を吸われていると表現した方がしっくりくる塩梅である。その様子を他の女たちは好意的に面白がっていた。

手に入れた褒賞をその足でプレゼントしにくる団員はそういない。自分の囲っている女に渡すことはあっても、世話になった礼だ、と純粋な感謝から与えることはまずない。

いつの時代であつても、正当に相手を評価する者は、その当人も評価される。テツがとった行動は、女たちの彼への評価を上向きにさせるものだった。

「テツくん、お姉さんたちもお世話しちゃうぞっ」

「そうそう。シンシアには負けてらんないわ」

女性は3人寄れば姦しいというが、姦しいどころじゃなくなってきたので、テツは戦術的撤退をはかることにした。猫なで声が彼の後ろ髪を引く。なんともたくましい女性たちである。セブンス傭兵団は、囲う女も伊達ではないのか。

戦域から離脱した頃には、どつと疲労感が押し寄せてきた。元々こういったコミュニケーションをしない性格だったので、無理をしたらせいで精神的な疲労が半端でない。

だが、こうした触れ合いは、のちの財産になっても、負債にはならないだろう。あまりにあからさまな媚は嫌われるとしても、ある程度までなら歓迎されるはずである。道場生組は、新米であり、いまだに立場上は奴隷である。団長や団員だけではなく、構成員にプラスのイメージを持つて貰わねばならない。割と死活問題であつた。さて、とホームの区域に向かう。とはいっても、道場生が固まつて生活しているだけの場所だが。

テツが顔を見せると、スイは足早に近づいてきて、「あとで相談があるんだけど」と小声でいった。珍しいこともあるものだ、と彼女を見ると、深刻な表情をしている。

断る理由もないので彼は了解した。恋人であるキヨウイチという相談相手には相応しい相手がいるのに、わざわざ頼み込んでくるとは、込み入った悩みなのかもしれない。

まあ、それとして、本来の目的を果たそう。

テツは残っている宝石を、サツキを初め、道場生の女子に手渡す。驚いて「こんなの貰えない」という彼女たちに、

「無理にとはいわないよ。でも、プレゼントしたのを拒否されると傷つくかも」

と、暗に促すと、やや困ったように、だが物欲は隠せない様子で受け取ってくれた。宝石が嫌いな女性は少数派であろう。特に、本物の宝石を所持したことがない年齢層の女子である。もて余しつつも、所有欲は満たされているようだった。

もらった青い宝石を陽の光に透かしているサツキは、目を輝かせて喜んでいた。素直に反応してもらえると、テツも嬉しい。

しかしながら、こう、日に何度も女性にプレゼントしていると、キャバ嬢に貢いでいるような気持ちになる。

悪いことはしていないはずなのに、複雑な心情になりながらも、最後に残った指輪を渡すべく、ミコトに向き直る。

「指輪を選んだのは、別に含みがあるわけじゃないですよ」

先に釘を刺しておかないといじられそうだったので、予防線を張っておく。

「……え、ああ」

テツは反応を見るよりも早く、先手を封じられてまごついている彼女の手をとって、その薬指にはめてあげた。無論、左手ではない。そこまで鈍感キャラでないことを自負する者としては、仲のいいお姉さんに贈る品物として指輪をあげるのも、やぶさかではないはずだと思った。

はからずも、みなに注目されている中で指輪の贈呈を行ってしまったのが裏目に出た。女性連中は面白いゴシップネタを見つけた団地妻のごとく目を輝かせている。早まったかな、とテツは早くも後悔し始めていた。

渦中の中にいる当人といえば、右手の薬指にはめられた指輪を真剣な表情で眺めている。迷惑に思われていないことは明らかだった。ひとまずほっとする。

指輪は無駄な装飾のない簡素なものだった。見ようによれば、男性用にも見えなくはない。だが、刻まれた文字のデザインは女性的なイメージを彷彿とさせた。

気に入ってもらえるか心配だったが、シンプルである方がミコトに似合っている。渡そうと思ったのは、間違いではなかったようだ。

「左手にはめてくれたら完璧だったのにね」

冗談めかして彼女はいった。

「左手の薬指は、正直、ぼくには荷が重すぎると思うので」

「なんとも乙女心が理解できてない台詞だわ」

ミコトの台詞に「そうだそうだ」と女子軍が追従する。さっきまでテツの味方だった女子たちまで、いつの間にか敵に回っている。気づかないうちに孤立無援に陥っていた。

こうなる事態を避けるために先手を打ったというのに、策士策に溺れるとは、まさに現在の状況をいった。

「いらなら返してくれてもいいですよ」

テツだって、やられてやられっぱなしにはいかない。少々気分を害した表情を作ると、案の定慌てて、ミコトは「いるいるっ、いるってば」と、彼から取り返されないよう右手を庇う仕草を見せた。

「ならいいんですよ」

ミコトに喜んでもらえるのは純粹に嬉しい。彼は朗らかに微笑んだ。

言葉や態度で感謝を表すことはできても、贈り物がそれらに劣るわけではない。むしろ形となって表せるのだから、より感謝が伝えやすいといえるだろう。中には貢物として、こういった行為を嫌う者も少なくないだろうが、気持ちを形にすることは、悪くない行為だとテツは考えている。

「じゃあ、ぼくはこれで」

「あれ、もう行っちゃうの？　少しお話しようよ」

引き止めるミコトの声が名残惜しい気もした。

「スイに用事があるんで、行かなきゃならないんですよ」

「あの子が……？」

「先の戦ではいろいろとありましたから。もし、姉さんにも相談を持ちかけたら、相手になってやってください」

当たり前だ、と彼女は頷いた。テツは弟のような存在で、スイはやはり妹も同然の仲である。決して薄情な関係ではない。

相談事の話聞いて、ミコトは納得できる話だと思った。戦から帰ってきてからというものの、寝付きが悪いようだったし、食欲もいまひとつだった。無理もないことだ、とあえて気遣いを見せなかったのだ。誰だって衝撃的な体験をすればショックで体調もおかしく

なる。

そう考えて、テツはどうだったのか、と口に出しかけた。キョウイチでさえやっとな調子を戻しかけている状態だ。それに比べて、

「……」

まるでなんてことないように佇むテツは、精神が図太いのか、あるいは人間性に欠けていると非難されるべきなのか。少なくとも、ミコトには喜ばしいと思える。こんなことで根をあげていては、これから先、生き残ることはできない。

一方で、強すぎるのも、時には考えものであった。彼のエマージエンシーが捉えられない以上、彼女が注意深く気をつけるほかない。薬指の指輪をなでながら、その役割も悪くない、と口元を緩めた。

「テツ、これはお礼だよ。他意はないんだからね」

ちゅ、と頬に不意打ちで口付けると、テツは懔然として手をそこに当て、

「ミコト姉さんは、まだ可愛らしい方ですね」

と微笑ましいものでも見るようにいった。

「ちょ、それってどういう意味!？」

「いえ別に」

テツは尻尾を巻いて逃げ出した。さすがにミコトは追いつがってくるつもりはないようで、ほっと一息をつく。

今日はキスされやすい日だな、とテツは内心狼狽していた。それを顔に出さないのはお手の物である。こういうときは、自分の野暮ったい顔に感謝してやってもいい。ぼくを地味顔に産んでくれてありがとう、と文字通り遠くにいるであろう母親に感謝したのだった。

第13話

スイに会うために探し回っていると、すぐに彼女は見つかった。荷馬車の影になっている場所である。小さな影であるし、日差しはまだ勢いを弱めていないので、この場には彼らふたりしかない。

乾燥して軽くなった丸木にスイは腰を降ろしていた。物憂げに空を見上げている。つられて視線を上昇させると、綿アメのような白雲が流れていた。

遠くに喧騒が聞こえる。団員の誰かが騒いでいるのだろうか。

太陽は南中を越えて傾き始めており、これから水平線に向かってダイブする予定であるらしかった。

来訪を知らせるために、わざと足音を鳴らして近づく。

顔を向けて、音の主を確かめた彼女は、何もいわずに正面に向き直った。足は投げ出されている。

いつまでも道場着を着ているわけにはいけないので、服の予備をそれぞれ支給されている。お世辞にも上等とはいえないものの、着られるだけありがたい。スイが身につけているのは、手伝いの女たちと同様のものだ。いわゆる村娘スタイルだったが、動きを重視してスカートは長くない。

最初は着られている感が否めなかった様子も、いまでは十分に着こなしている。すらりと伸びた足に目をとられて、綺麗なものだな、とテツは感心した。別に他意はない。

口を開くタイミングを逃したので、黙って隣に腰掛ける。バランスを崩してふたりで転げ落ちるのでは、と期待した結果にはならなかった。安定性がある木を選んでいたようだ。

スイとはまだ仲が良かった頃、さかんに相談事をされていたのを思い出す。内容は「キヨウちゃんに嫌われてないかな」とか「キヨウちゃんの邪魔になってないかな」といったものだ。

彼女のキヨウイチへの好意は立派なもので、嫉妬する気も起きなかったのを覚えている。むしろ、こいつら夫婦なんじゃないのか、と常々思っていたほどである。

3人のグループは、実質的には2プラス1という関係で成り立っていた。便宜上は同一グループとして考えられるが、そこにある彼の役割はさほど重要でなかったように思える。

もしも彼が子供特有の自己中心的思考が顕著であったなら、この組み合わせは成り立たなかっただろう。何の因果か、自分の立場を理解できる聡明さと、それに不満を感じない達観をもっていた。

いま思えば、なぜ3人で行動を共にしていたかなんて覚えていない。友達とは自然発生的にできるものである。気がついたら、キヨウイチとスイの友人というポジションに落ち着いていたのだった。

スイはキヨウイチに惚れていたせいかな、彼の評価を模擬試験のランクと同じくらい気にしていたせいもあって、相談に乗るのはいつもテツの役割だった。

悩みの本人に相談する人間はいない。もしも適する相談相手がい

るとすれば、近しい友人であろう。テツはど真ん中なプロフィールだった。

キョウイチの好きな食べ物とか、趣味とか、好みのタイプも根掘り葉掘り聞き出して報告した。スパイのような真似事だった。いや、恋のキューピットといった方が舌触りがいい。

かくいう関係は例のごとく能力の発現によって終わりを告げるのだが、数年のときを経て復活するとは思ってもよらなかった。なんとなく感慨深い気持ちになる。ひとり、家族写真を眺める年寄りのような顔をしていると、隣のスイは意を決して話し始めた。

「テツはさ、人を初めて斬ったとき、どう思った？」

なるほどその話題か、と納得して、

「キョウイチはなんていった？」

「気持ち悪いって。辛そうな顔してた」

それを聞いて、なら正直にいつでも大丈夫そうだな、とテツは思った。

「骨が斬りづらくなって思った」

「え？」

「脂も斬ったあと邪魔だったけど、やっぱり骨が障害になるね。何度も斬って、切れ味が悪くなった剣じゃ、骨まで一気に断ち斬れなくなる」

この世界の人間は骨が丈夫なんだね、と付け足す。

「わ、わたしはね、真面目に」

「真面目だよ。ぼくは大いに真面目だ」

ふざけていない様子が伝わったのだろっ、スイは黙らざるを得なかった。

「だってさ、殺すか殺されるかの瀬戸際だよ？ 考えるべきは、どうやってひとりでも多く敵を倒すかだろうさ。スイが何を気にしているのか、わからなくもないけど」

「うん……」

話の主導権を奪われた彼女は、小さく意味のない相づちをうつた。

テツは自分が話の流れを支配していることを確かめつつ、声を柔らかにする。あまり責め立てても得策でない。また、スイの話を否定してもいい方向には向かわない。まずは相手を肯定することが大事だった。

「キョウイチには相談した？ あいつなら助言してくれると思うけど」

「してないよ。こんなこと、いえる訳ないじゃない」

はなから諦めている様子だった。ネガティブな方向にひた走っているといえる。

「あいつじゃ、頼りにならない？」

「そんなことない！ そんなことないけど……」

「ぼくは大丈夫だと思うけどな。キョウイチなら、きっと力になってくれる」

幼なじみは、心から信頼してそういった。スイは意外そうにその啖呵に聞き入っていた。まるで疑っていない調子だった。下手をしたら、彼女の信頼感よりも優っているかもしれない。

でも彼は、と思い出して暗い気持ちになる。わたしたちは、テツのことをまるでわかってはいなかったのかもしれない。そう彼女は思った。テツは常人では推し量れない感性を持っているのだ。それが、すれ違いを生んでしまった。

黙り込んだスイを訝しんで、テツは顔を覗き込んだ。

「どうかした？」

なんでもない、とスイは返す。

「わたしは、初めて敵を斬ったとき、ざまあみろって思ったの」

斬った男はまだ青年で、スイを正面に捉えるなり蔑んだ視線を向けてきた。女である彼女を獲物としかみなさなかった。それに気づいた途端、身体が一気に熱くなったのだ。

それは怒りからなのか、羞恥からなのかわからなかった。だが確

実に神経は興奮状態になって、相手を斬りつける思考に支配された。

たまに、こういうことがあった、とスイは告白した。

元の世界においても、女性であることで差別されることが時たまあった。彼らからすれば、差別という意識は持っていないのだろう。それは矜持とか、見栄といった類のものなのかもしれない。

ただ、そういった悪意に対してスイは敏感だった。普通の女性なら気分を悪くする程度のことにも、激昂することがあった。それは元来の性格も影響している。負けず嫌いで、いわれなき差別が大嫌이었다。

日常生活はともかく、剣の世界では実力をもって仕返しすることができた。だから彼女は剣を振るうのが好きだった。真剣に強くなりたいという志をもつ剣士たちには、口が裂けてもいえない理由だった。

そもそも、草切道場で教えられるのは、剣をみだりに振るってはいけないという戒めだった。

たとえ悪人が相手であっても、一方的に行使する暴力は正しくない。そう当主たる者はいつていた。

スイは納得できた。だが共感ではできなかった。

剣は武器だ。相手を倒すためのものだ。抜かれない剣に意味はあるのだろうか、と常々思っていた。

それらの鬱憤した想いが、殺し合いの緊張感の中で一気に決壊し

たのだった。

相手は少女だと油断している男の首をはねた。幸い、相手は軽装だった。軽い手応えと共に、間欠泉からたぎった液体が吹き出る音を聞いた。脳は相手を斬り殺したことを理解した。何より、目の前に転がり落ちた首が雄弁に結果を物語っていた。

わたしを馬鹿にするからだ。

——ざまあみろ。

口元を歪めて、ふと、正気にかえった。やるべきことをやったあとの静けさが戻ってきた。相変わらず周囲は剣戟にうるさいけれど、血の気の引いたスイには遠い場所でのことに思えていた。

わたしは何をしたのだ。相手を斬り殺し、あるうことかなじってさえみせた。本当に、自分のやったことなのか。

呆けている暇はなかった。立ち止まったら死ぬことはわかっていた。無我夢中で知っている後ろ姿を追いかけていた。途中で仲間がひとり姿を消しても、かまっている暇はなかった。

結局、スイは生き延びた。わずかな怪我しか負わなかったのは奇跡といってよかった。生き残ただけでも上出来だった。

人を殺し、自らは生き残る。

良心の呵責に苛まれているのは明白だった。戦のあと、キョウイチは噛み砕いてしまうほど、きつく歯を食いしばっていた。

彼は悩んでいた。だが、その悩みは、スイとは異なる種類のものであるのは明白だった。彼は、正しく悩んでいた。それに比べて彼女の悩みは、品位に劣るといった。

キョウイチにはいえない、と考えるまでもなく思った。きっと彼は真剣に話を聞いてくれるだろう。真剣に話を聞いて、戸惑うのだ。理解できない、スイの悩みに。

それは恐怖だった。恋人に理解されないということは、ある種の絶望だった。一番深くつながっているはずなのに、どこまでも距離は果てしなかった。

代わりに思い描いたのは、テツの顔だった。最近では会話することめつきり減ったが、かつては彼がスイの相談役だった。不思議と、彼に弱音を吐いても恥ずかしくはなかった。彼が誰よりも弱い部分や、汚い部分に精通していたからかもしれない。

悩みを話しても、彼ならば平然とした顔で対応してくれるはずだ。それは幼なじみに対する信頼感だった。めったに表に出てこない感情だ。

「わたしを馬鹿にするからだ、とか。思い知ったか、とか。そんなことを思ってしまったの」

「それが許せない？」

「ええ」

「本当に？」

テツに覗き込まれたスイは、その瞳の深さに怖気が走った。まるで夜に覗き込まれているみたいだった。心なしか、顔のパーツが生氣を失って見える。錯覚だ、と思っても、人間でないものを相手にしている予感捨て切れなかった。

「スイは自分の残酷さが許せないと思った」

説明書を読み上げるように、

「善良さの欠片もない行動が許せなかった」

「……」

「本当に？」

答えられない。

わたしは、本当に自分が許せないと思ったのだろうか。舞台上演技する女優のごとく、自分の不幸に酔っていた？

わきには、嫌な汗をかいていた。見向きもしなかった自分の暗部と向き合わされて、暴かれていく感触を覚えていた。

「スイ、君は勘違いしてるんじゃないかな」

優しく諭すように、テツはいった。

「君が恐れているのは、自分の醜さなんかじゃない。それは君の一部でしかないのだし。ある一部をもって全てを語るのはナンセンスだろ？ それよりも、だ。君が本当に恐れているのはキョウイチ

に知られることだ。自分の醜さを彼に嫌悪されることだ」

「……」

「君はそれほど自分を嫌っちゃいない。それほど人を殺したことに罪悪感を覚えてもいない。殺されるくらいなら、殺した方がよっぽどいい。その最初の相手だって、そのままだったなら、結果は火を見るよりも明らかだった。何を後悔する必要があるんだい？ 君はなすべきことをしたんだ。やらねばならぬことをやったまでのことさ。この世界には人道主義の日和見弁護士なんか存在しないし、ぼくらの所業を裁く法律屋もない。何で悩まなきゃならないんだい？ 殺されかけたんだろ。剣に胸を貫かれてまで、殺し合いはよくないよ、とでもものたまうつもりだったのかい」

そこまで一気にまくし立てて、彼は乾いた唇をペロリ、と舐めた。スイには、その様子が蛇の細くて赤い舌のように見えた。

「どう思う」

「……仕方がなかったと思う、わ。ああしなきゃ、わたしは死んでいた」

そうだね、とよくできた生徒を褒める調子でテツは答える。

「この前提は大事なんだ。スイはなんにも悪くない。戦場で気が高ぶるのは誰だってあることさ。むしろ、淡々と殺している方がよっぽど怖い。まるでロボットだ」

あなたはとうだったの。そうスイはたずねたかった。戦いの最中は自分のことで精一杯で、近くにいたキョウイチとしかまともに話

していなかった。その間、テツはひとりで剣を振るっていたに違いない。

スイやキョウイチと比べて、文字通り孤軍奮闘していたといえる。その孤立感は、いかほどのものだったのだろうか。

「君の悩みは、個人的趣向のものだ。常識をもって語られるべきではない。少なくとも、戦場では。もちろん、それが表面化して問題となれば、非難されて然るべきだ。だが、それが内心に留まっているうちは、何の問題もないわけだ。ぼくがエロい妄想をしても、行動に移さないうちは、犯罪者でないのと同じことだ」

「そうだよな……」

「いや、あの、いまのところは突っ込み待ちだったんだけど」

せつかくボケたのに突っ込んで貰えない芸人のように、所在なさげにテツは呟いた。

困り顔の彼からスイは目を離す。テツのいいたいことはわかった。自分の中にある破壊衝動ともいうべきものは、いまだショーケースの中で展示されているだけだ。極限状態で顔を覗かせることはあっても、その状況は異常といえる中での出来事なのだから、それをもつてスイという人間を語ることでできやしないのだ。

いざとなれば尻尾を巻いて逃げ出すような人間はゴマンといるだろうし、普段は大人しくても、いざとなれば頼りになる人間だっている。

単色の蛍光ペンでは、描き表せないものが人の形だ。

もし、人間の心をキャンパスに描こうとするならば、絵の具入れの色を全て使ったとしても足りないに違いない。暖色系も、暗色系も、誰だって持っている色なのだから。その意味でいえば、スイの破壊衝動も数ある内の一色に過ぎないのかもしれない。

「キョウちゃんにいう必要はないと思う？」

今度は、スイがたずねた。

キョウイチの顔を思い浮かべた。優しい顔をしていた。凜々しい顔をしていた。またあるときは、悲しい顔をしていた。

彼だって、心のキャンパスを持っている。

そう思うと、遠くでおぼろげだった彼の輪郭ははっきりと映し出された。あるとき見せた後悔の表情には、どんな色が混ざっていた？　もしかしたら、自分だって彼の表面しか見ていなかったのではないか。

「——— いう必要はないと思うよ」

スイの顔を見て、もう大丈夫だと思ったのか、冗談めかしてテツはいった。

「さっきといってることが違うじゃない、もう。わたしはいつてみるよ。きつと相談に乗ってくれるだろうから」

それはテツのいった助言だった。なんてことない、シンプルな答えだった。いつだって答えは難しいものではない。それを複雑怪奇

に仕立て上げるのは、他ならぬ自分自身だ。

「わたしは行くよ。ありがとうね」

「どういたしまして」

「テツ」

腰をあげたスイを見送るように、座っているテツは顔だけ向けた。見上げる形になる。太陽は、しばらくすればオレンジの色に染まり始めるだろう。それが待ち遠しかった。

「わたし、テツのこと好きだよ。キョウちゃんの次くらいに」

スイは徒競走よろしく、爽快に去っていった。巻き上げられた砂埃が、置き土産というばかりに残される。

テツは口元を皮肉げに歪めながらも、悪くない気分だった。いつもなら剣を振りたくなる頃合いだったが、このときは意欲が沸かなかった。珍しいこともあるものだった。

第14話

喧騒が聞こえる。物が乱暴に倒される音。泣き叫ぶ村の人の声。風を切る剣の音。

これは罰なのだ、と少女は思った。いま自分が殺されようとしているのも、村が襲われているのも。そうでなければ説明がつかないではないか。

少女は幼い頃から、人によく容姿を褒められた。親の見栄えは悪くはなかったが、人々はトンビがタ力を産んだ、とよく陰口をいつていた。両親は気づいていても、いい返しはしなかった。他ならぬ、彼ら自身がそう思っていたからだ。

妹や弟たちは、少女のように美しくなかった。まるで彼女のみが選ばれて生まれてきたかのように、そして全ての得難いパーツを母親の中から総取りしてきたかのような完成美があった。

10を数える前に、当然のように彼女は目をつけられていた。領主の館に奉公することが決まったのは、それから間もないことだった。数年後に館に迎えられることを約束し、少なくとも金を両親は受け取っていた。わたしは売られたのだ、と感動もなく悟った。

人から嫌というほど聞かされ続けた己の容姿を、うまく利用しようと考えだしたのは、必要にかられていたことだった。

その年は冷害で作物の出来が悪く、彼女の家も食糧不足に陥っていた。空腹に苛まれ、行動しなければ餓死する可能性すらあった。領主からもらった金はあっても、買ったための物がなかった。

彼女は家々を巡り歩いた。どの家も同様に余裕などなかったが、哀れな装いで訪ねてくる少女を不憫に思っ、少ない食料をわけてくれる家もあった。

こうしてその飢饉は耐え切ることができた。少女は自分の容姿が武器になることを知った。それは相手の同情を誘うものであったり、油断をさせるものであった。

少女はまだ幼かったから、それが何を引き起こすのかわかっていなかった。容姿を武器に渡り合うことは、諸刃の剣だということに気づいていなかった。

幸いだったのは、領主に見初められていたことだ。勝手に手を出して、彼女を傷物にすれば、首をはねられるのは明白だった。ある意味、彼女は領主の保護下にあったといえる。

彼女は両親に大事に育てられた。出荷に出される家畜のように、優先的に食べ物を与えられ、きつい仕事は手伝わなくていいといわれた。

弟たちはそんな姉に文句をいつていたが、両親が黙らせていた。

そして、手伝いを断られるたびに罪悪感を、そして同時に優越感も覚えていた。自分は特別なのだという自負は、いつの間にか大きく育っていた。

ある年、家が困窮すると、幼い弟がいなくなった。両親に行方を聞いても、「病気で亡くなった」としかいつてくれなかった。昨日まであんなに元気だったではないか。少女は、彼らが嘘をついてい

ることを見抜いていた。

弟は売られた。それは珍しいことではなかった。他の家でも同じようなことがあった。食い扶持は少ない方が楽になるし、売り払えば収入を得ることができる。

『出荷』されたのが、たまたま弟であっただけだ。わたしも、近いうちに領主様に売られてしまう。

彼女は大人ではなかったが、聡明だった。売られた先でどうなるかは、村の少女たちが話す内容から予想できた。

自分は容姿が整っていたから見そめられたのだ。ならば、買われた花は、その身を愛でられるしかない。

少女は見栄えがよく、器量もよかったから、村の男には人気があった。もしも領主に目を付けられていなかったならば、村の一番の男子といい仲になっていたかもしれない。

領主に齒向かってまで、彼女を手に入れようとする男はいなかった。賢いことだと思う。仮にそんな無謀な男が現れたとしても、その手を握らないことは確かだった。彼女は勇気と無謀との違いをよく知っていた。そして無謀をやつてうまくいくのは、ときどき聞かせてもらえる、お話の中だけであることも。

弟は売られ、その金で自分は育てられた。責任は果たさなければならぬ。

窮屈な身になるだろうけど、それは一種の罰だと思ふことにした。弟を犠牲にした罰だ。善意の人から食べ物を買った罰だ。

だが、その罰は、違う形で訪れようとしていた。

村を野盗が襲ったのだ。圧倒的に村人の方が多いはずなのに、刃向かった男の人はあつという間に斬り捨てられてしまった。特に、リーダーであるらしい大男の剣は、ひとなぎで数人の人間を絶命させた。

瞬く間に反抗の牙を折られた村人は逃げ惑うしかなかった。

両親がどうなったのかわからない。残った妹たちともはぐれてしまった。孤独感に耐えながら、膝を抱えて隠れることしかできなかった。

罰だ、罰だ、とうわ言のように繰り返す。だが、もしも自分を罰してくれる存在がいたとして、それはいったいどのようなものなのだろうか。

そう考えて、何を馬鹿な、と思い直す。人を罰するのは、人しかない。当たり前のことではないか。しかしながら同時に、こうも考える。人は公平でないし、差別したりもする。そんな不完全な人間に、正しく裁くことができるのだろうか、と。

少なくとも、彼女の周りには、自分を含めて不完全な人間しかいなかった。ならば、自分を裁いてくれるのは、罰してくれるのは、いったい誰なのだろう。

完全な存在など、あるはずがないのに。

乱暴に扉を蹴破られ、彼女は見つかった。少なくとも、すぐには

殺されることはないだろう。自分の容姿の希少性を知っているゆえに、そう考える。

腕を掴まれ、無理やり立たされる。抵抗すると酷いことをされるのはわかっていただけ、あくまで従順に従った。

家のすぐ前に両親の亡骸は転がっていた。父親は弓を、母親は肉切包丁を手にしたまま事切れていた。勇敢にも野盗に立ち向かった彼らは、無慈悲に殺されていた。

少女は立ち止まって、自分の生みの親を見た。

悲しいほど、心は揺さぶられなかった。ぽっかりとした喪失感と、奇妙なほどの静寂感が彼女の心中に根を下ろしていた。

わたしは失われたのだ、と彼女は痛烈に思い知らされた。だがそうだったのはいつからだっただろうか。領主に売られたのだと知ったとき？ 弟が売られたとき？ 自分は罪人なのだと悟ったとき？

それとも、わたしがこの世に生まれ落ちたとき？

誰か教えて欲しい。わたしに指し示して欲しい。彼女は渴望する。そして諦観にも似た心境で思う。問題の内容さえ定かではない問いに答えを出してくれる方がいるとすれば、きっと。

—— おとぎ話に出てくる、騎士のような方なのだろう。

第15話

受け入れがたい提案は、決まってあの犬男からもたらされる。行動を共にしていると、テツはつくづくそう感じられる。

訃報を届けるのが団長の役割であるかのようだ。テツをはじめとした道場生の非難の視線を受け、けれどもそれがどうしたといわんばかりに、当人は気づかぬ装いだった。

「仕事だ。準備しろ」

朝一番に下された挨拶は、近くの村への襲撃命令だった。当然のように頭が働いていない面々はいわれたことが理解できない。やがて脳が目覚めてくると、その言葉の意味に動揺した。

すでに戦装束にやつした団長は、聞き分けのない子供に説明するように語る。

先の戦で戦果を十分に得られなかった補填のためだということ。パツヘル侯爵領は当主の戦死を受けて混乱している最中であること。この混乱に乗じて村を襲撃すれば、追っ手もかかりにくいということ。

考えられる限りの襲撃の利点をいつて聞かせる。

当然、それで納得できるはずがなかった。戦と違い、村の略奪は完全に犯罪だと現代組は考えている。略奪行為の禁止が戦争の守るべき一線だという常識からすれば、とても受け入れられるものではなかった。

無論、あの団長がそのような戯言に耳を貸すわけがない。参考程度に聞き流すと、「そのような考えもあるな」と少し感心したように呟いたが、彼の方針を転換させるだけの効果は得られなかった。

中でも、一番に反対の意思を示していたのが、テツ、キヨウイチに続いての、最後の道場生男子のひとりだった。彼は正義感が強く、先の領主同士の戦にも頑なに反対していた人物だった。

彼にとって略奪行為など唾棄すべきもので、およそ認められるものではなかったのだ。

強硬に反対する彼を見て、人相の悪い大男はさらに顔のパーツを不出来にした。

面白い、と彼はいった。

「おまえのいうことはもつともだ。略奪は許されざる唾棄すべき行為だ」

だがな、と害虫が這いよる様子で、

「貴様らが腹に収めていた食い物も、他の村から奪ったものだ。小麦も、肉も。ええ、素晴らしいな？ 略奪された食料はどんな味だった？ 口にできないほど汚れた味がしただろうな」

言葉に詰まった彼をはじめ、キヨウイチたちは複雑な表情だった。いままで彼らの腹を満たしていたのは他所から奪ってきたものだった。だが、それらが彼らを生かしていたのも事実だった。

食わなければ死ぬ。人間の根幹に関わる、シンプルな条件のひとつだった。どんな正論や綺麗事を取り繕っても、変えることのできない普遍的な人間の問題だ。

「我らは補給しなければならない」

繰り返されてきた所為を行うだけだ、とその目は語っていた。

反対する男子は、まっとうな方法で食料を買えばいい、という。だが「おまえが買ってくれるのか」と返される。男子には傭兵団をまかなえるほどの食料を買い込む金などない。

そして、忘れがちなことだが、彼らは団長に意見できる立場にない存在だった。元は売られていくだけの囚われの身である。奴隷が反対したところで、ムチを振るえばいいだけのことだ。

この団長の風変わりな点は、この世界観において珍しいことに、より効率的に奴隷を働かせる術を知っていたことだ。

恐怖や暴力は即応性を持つが、長いスパンで見ると適した方法とはいいいにくい。反抗の芽を生むし、自暴自棄になった者が死を覚悟して刃向かう可能性がある。

簡単に仕事手を殺してしまう者は、奴隷経営者に向かない。損失を考えていない証拠だ。少ないコストで、最大の働きをさせなければならぬ。

だが、それにも許容範囲がある。ある一定のところまでは許しても、それを超えた反抗者をみすみす許すわけにはいかない。彼らと最初に出会ったときのように、見せしめとは非常に重要な儀式であ

る。それによって、あとに残る者の思考、行動を制限する。

ゆえに、団長はその反対する男子の横っ面を殴った。もんどり打って彼は地面に転がる。自分が殴られたことを理解すると、憎悪のこもった視線で団長を貫いた。

「おまえのいうことはわかった。認めよう。襲撃には参加しなくてもいい」

その返答は予想していなかったが、男子は悪魔のような男を甘く見ていなかった。言葉のまま受け取るような真似はしない。何か思惑があるのではないか、と懐疑的な様子だった。

懸念はまさに、その通りだった。

「これより先、貴様に参加する資格はない。元のように、手足を拘束されて荷馬車に転がっているだけでいい」

男子は圧迫感に耐えるように相手の目を見返す。闘志は衰えていなかった。彼の中の正義感は、恐怖には屈しない。

団長は声をあげて笑った。怖気の走る不快な笑い声だった。

「いいなあ、小僧ウ。素晴らしい。貴様のような者に出会えて光栄だよ、わたしは」

いつている言葉とは裏腹に、いまにも剣を抜き放って、男子の首を跳ばしかねない殺気だった。致死量を超えた死の恐怖にやられて、男子の身体はひとりでに震えだした。この大男には、人間を震え上がらせる原始的な恐ろしさがある。

ガヴァンが最後まで団長に抵抗した男子を拘束する。手足を縛られ、囚われの身に帰っても、彼は後悔していないようだった。罪もない人間から略奪するくらいなら、死んだ方がましだと無言の抗議をあげていた。

仲間が捕まる様子を、テツたちはどうすることもできずに見ている。

「なぜ抵抗しない！」

その男子は叫んだ。これから犯罪行為に加担させられようとしているのに、抵抗ひとつしないで沈黙する仲間を非難していた。

「キヨウイチ。おまえならわかるだろ？ あの男のいいなりになっちゃいけない。犠牲になるのは、罪のない人間なんだぞ？」

そんなことはわかっていた。キヨウイチだって一方的な略奪が許されるとは思っていない。だが、どうしろというのだ。彼のように逆らったとしても、略奪が中止になることはない。キヨウイチたち使い走りがいなくなったとしても、食い扶持が減るだけのことだ。

かつての身に戻れば、待っているのは奴隷として売り飛ばされる未来だけだ。そうなればスイとも離れ離れになるばかりか、誰とも知れない人間に恋人が奪われることになる。

良心と自己保身。そして恋人への想いが、ないまぜになってキヨウイチを襲った。とつさに答えられるわけがなかった。

言葉に詰まったキヨウイチを、その男子は親の敵でも見るように

している。道場生たちは答えを待っていた。彼らのリーダーたるキョウイチの答えを、だ。

団長は嫌らしい表情で推移を見守っている。初めからこの状況を待っていたようだった。選ばせるのだ。自ら略奪に加担させて、戻れない位置にまで引きずり込んでいく。

いまにも泣き出しそうなキョウイチを静かに見守っていたテツは、視線を感じて顔をあげた。

ミコトが見ている。何かに期待するように。弟が立場的に窮地に立たされている中、彼女は動くべきは自分ではなく、テツなのだと確信していた。

リーダーとしての役割に徹するならば、略奪に協力するしかない。これは選択肢などない、初めから定められたことだ。ここで拒否すれば、あの男子のように、奴隷扱いに逆戻りする。もちろん、みながそんなことを望んでいるはずがない。

だが同時に、略奪という反社会的行為に拒否感も感じている。死んでも協力しないとまでいいきった仲間もいる。

しかしながら冷静になつて辺りを見回してみれば、その彼に追従する人間はいないのだ。奴隷になつてもいいから犯罪行為はしないという人間は現れない。それはつまり、消極的に略奪への加担を受け入れたことを示していた。

彼は、キョウイチという青年は、汚れ役に徹するには不適だった。いまこの場に求められているのは、略奪という行為を受け入れるだけの器量を示すことだ。それは褒められた行為ではない。だからこ

そ、「それは必要悪なのだ」と納得させるだけの口弁が求められているのだ。

またか、とテツは歯を軋ませた。いつの間にか、自分がしゃしゃり出なければならぬ状況が造られている。もしもこの懸念が自意識過剰ならば大歓迎だった。キヨウイチが追い込まれている中で、その閉塞感を打破してくれる存在がいるなら早く登場願いたい。それは決して自分ではないはずなのだ。

何が起こっているのだろう。遠見テツという存在は、誰かを率いるような人間ではなかったはずだ。ただ道場の片隅で、竹刀を振っているだけの、無害な存在ではなかったのか。

せいぜいが幼馴染の相談役で、それも最近はお役目御免となっていただろうに。

ミコトの期待も、見当はずれこの上ないとテツは思った。彼女は見誤っている。自分のことは、自分が誰よりもわかっていて。

泣きたいのはこっちの方だった。誰が好き好んで団長に意見しようか。あの正義感たっぷりの男子は尊敬に値する。彼のような男こそ賞賛されて然るべきだろうに。

嫌だ、嫌だ、と内心毒づきながらも、すでに腹は決まっている。声には出さないで、こてんぱんに罵倒する。もちろん、自分のことを。

「従おう、キヨウイチ。そうでないと、ぼくたち全員殺されてしまうかも」

「こ、殺されるって……」

青ざめて反復するキョウイチは、団長が無言で剣に手をかけているのを見た。そのままギクリ、と固まる。他のみなもつられて同じような結果を辿った。

この中で武装しているのはテツだけだ。他の者は、当然ながら抵抗するまでもなく殺されてしまうだろう。素手の人間は斬られるだけだ。その場合、皆殺しという地獄が待っている。

「従うんだ。ぼくはまだ死にたくないっ」

「臆病者め！」

捕えられている男子はテツを罵った。それでも人間か。殺される罪のない人はどうなるんだ。そう途切れなく叫ぶ。

狼狽した表情を作りながら、無様にテツは叫ぶ。「仕方がないじゃないか！」「ぼくに死ねっていうのか！」「誰だって自分の命は大切だろ！」

演技をしつつ、団長の反応を見るも、止めに入る予兆はない。このまま続けてもいいらしい。この糞野郎、と吐き捨てて、みなが略奪を受け入れざるを得ない状況にもっていく。

「みな顔をよく見てよ。——ぼくらに、死ねっていうのかい」

威勢のよかった啖呵は途切れた。「罪もない人間を殺すよりマシだ」という言葉がのどまで出かけているようだった。だがそうなる

と、目の前の仲間は死ぬことになる。それはつまり、罪もないのに殺されることだ。彼が提案を受け入れるということは、みなに「死ね」といつていることに等しい。たとえそれが、外部によって強制的にもたらされるものであったとしても。

彼が人を殺したくないというのなら、道場生のみなにも強制はできないはずなのだ。

「くそっ……」

その男子は力なくうなだれた。この世の不条理を心底恨んでいるようだった。

それでいい、とテツは安堵した。君は口を開くべきではない、とも。

どのみち、テツたちには拒否権などないのだ。だというのに、正義感や道徳観で惑わすのは遠回りになるだけだ。結局一回りして戻ってこなければならぬのだから。ならば最初から考えない方が効率的であろう。

正義感が間違っているとはいわない。社会正義という観点からすれば、非難されるべきは傭兵団の面々だ。それは間違いない。

状況が状況なら、反対した彼は正義の人として讃えられる人物だ。脅されたとしても屈しない信念をもっているし、その勇気は類まれな代物だった。

映画の中の主人公の資質を持っているといい。

惜しむべきは、環境が悪かったことだ。お伽話の中のような、敵と味方がはつきりと別れた世界観なら、彼は英雄として名を馳せたに違いない。あるいは、敵さえも改心させる魅力を発揮したかもしれない。

君も運がないのだな、と共感せずにはいらなかった。テツ自身も、場違いな感覚を覚えてならないひとりなのだ。

「さて、他に希望する者はいないか？ 奴隷的拘束を」

ひとりひとりの顔をじっくりと、順番に見ていく。気の弱い女子は向けられる眼光に身体を震わせた。

団長は観察に満足すると、テツに顔を向ける。あからさまに嫌な顔をした彼を見て、面白そうに鼻をならした。

「なかなか興味深い喜劇だった。だがおまえには、いまひとつ演技力が足りない」

その言葉にむすつとテツは黙り込んだ。もしかしくなくても、余計なお世話だった。

第16話

標的に選ばれた村は、野営地から半日もかからない距離にあった。警戒されなかったために、下馬して近づいている。村への道のりは主要街道からほぼ一本道であったが、あえてそこを通らないで、森の鬱蒼とした獣道をいく。

当然、荷馬車とは別行動だった。団長を先頭に、村から補足されないように慎重に進んでいく。この狡猾さが、そこいらの野盗とは一味違う表れだった。

背の高い草が連なる丘に出ると、姿勢を低くして登っていく。ちくちくと刺さる草の葉先が不快だった。視界はよくないので、前の人物から離されないように注意しなければならない。

やがて正面に村を見渡せる光景が広がる。馬は少し後ろに待機させているので、村の方面からこちらは見えていないはずだった。

テツを含めて、傭兵団の面々は肩に赤い布を巻いていた。集団が目印のように身につけているのでよく目立つ。

この赤い布は囃のようなものだ。村人全員を皆殺しにするつもりはないので、生き延びる者が出てくる。その人間に印象的に覚えさせておくのだ。そうすれば、追跡がかった場合も「赤い布を巻いている」という特徴ができる。当然、セブンス傭兵団は、赤い布をトレードマークになどしていない。この襲撃で村人に覚えさせるべきなのが、個人の情報よりも、「赤い布」という抽象的な情報なのである。

テツたちは軽装である。場合によっては、反撃されて死ぬ可能性もないわけではない。村人だって、殺されかければ反撃してくるのは当たり前である。農具であっても、人間は十分に死ねる。

その意味でいえば、道場生組の女子たちは初陣ともいえた。ミコトやサツキも緊張を隠し切れない様子である。

一方で、すでに戦を経験しているキョウイチ、スイは、略奪という行為そのものには嫌悪感を禁じ得ないようだったが、戦闘そのものに臆しているようではなかった。

彼らは刀で武装している。テツはショートソードを腰に、メインは弓であった。今回は司令塔としても動かなければならないので、弓で後方から援護しつつ、全体の指揮をとるつもりだった。彼としては、単独で白兵戦をしていた方が何倍も気楽であった。

テツは昔ながらの様態を見せる、眼下の集落に目をやった。

住居の壁は石積みであり、屋根にはかやぶきだろつ材木で組まれた物が乗っている。お世辞にも生活環境はよくなさそうだった。家々の煙突から白い煙が上がっている。幼い子供の姿も見えた。

一見するところ、何の変哲もない村である。だがテツは樂觀しなかった。「こういうとき」に限って、厄介な事件は起こるのである。それは厄介事にすでに巻き込まれているからこそその懸念であり、すでに幸運の女神に見放されているという自覚からくるものだった。

手はずとしては、団長以下、傭兵団のメインが最初に突っ込み、抵抗するであろう男たちを無力化する。テツたちは女子供を逃がさないよう捕まえる役目だ。大人しく捕まってくれるはずもないので、

手を汚さずに済ますのは不可能に思えた。

メインの目標は村の物資であり、人間はついでに過ぎない。奴隷として売れる値段と、移動コストを考えた場合、利益が出るのはよほどの美人か美丈夫か。その気になれば領主は力づくで村人を従えるので、労働用の奴隷はあまり需要がない。農業の大規模プランテーションが行われていれば話は別だが、この世界において、かのような農業体系をとっている国はいまだ存在していない。

団長の合図が出た。団員は静かに乗馬する。これから突撃するであろう興奮からか、馬たちはいなかった。戦時ほどの重装備ではないものの、騎乗した団員による突撃は村人に行われるには過剰過ぎた。これは相手を萎縮させる効果を狙ったものだ。

団長が抜剣し、その身には適当というほかない長剣をかかげる。彼らは駆け出した。

「生き残ることを第一に考えるんだ！」

まるで戦のときのような叱咤だった。

テツの言葉にみなは頷く。略奪行為に加担して死ぬなんてことは、剣士として最大の汚点である。死んでも死に切れない。そして曲がりなりとも、草切の道場生は剣士だった。生きてまだなすべきことがある。そう信じている。

いまばかりは、善悪の区別も見ぬ振りをするしかなかった。

騎乗していないテツたちは、団員に遅れて村に突入する。すでに周囲は混乱していて、逃げ惑う村人で騒然となっていた。目的は殺

しではないので、武器で威嚇して追い払う。相手は余程のことがなければ、命が大事なので我先にと逃げ出していく。

それでいい、とテツは目まぐるしく変化する状況を把握しつつ、早くどこかに行つてしまえ、と弓で射かけるブラフをかける。

老人子供は逃げ遅れている。その集団にはテツたちがかかつて追いついてる。良心が痛む。自分はどんな顔をしているのだろう。せめて鬼のような形相をしていて欲しいと思う。そうすれば、彼らも恐れて、我先にと逃げてくれるだろうから。

道場生組はよくやっていた。テツが殆ど指揮しなくても、互いに連携して、羊を追いつ込む牧羊犬のように村人を誘導する。心配された村人からの反撃も形になっていないといい。日頃の農作業で屈強な男たちでも、傭兵団員には敵わないようだった。

視界の端で、団長が弓を構えた男を斬り殺したのが見えた。身なりからして、獵師だったのだろう。不幸にも抵抗する武器を所持していたことが彼の運命を決めた。矢をつがえるより早く、団長の剣戟によつて上半身をなます切りにされてしまった。

殺戮の実演は効果があった。目に見えて絶望感を増した村人が、脇目もふらずに逃げ惑う。腰を抜かした女性を、数人がかりで助けようと四苦八苦している姿もあった。

テツは団長の下に向かった。

「首尾はどうだ」

「村人の追い出しは順調です。村長らしき人物はまだ見ていませ

んが」

「それはこちらで確保した。あとは売れそうな奴隷の確保だな。いくらか見繕って、捕らえておけ」

「……はい」

奴隷的身分でいえば、テツたちだって似たようなものだ。その自分たちが、奴隷として売るために人間を捕まえるなんてたちの悪い冗談だ。全くもって反吐が出る。

そのとき、テツの感覚が気配を捉えた。反射的に弓を構える。

身体をターンさせると、一直線に向かってくる人影があった。泣きはらした顔で、手には包丁らしきものがあつた。

女だ。中年くらいだろうか、テツはとっさに、団長が斬り殺した男の妻という言葉が脳裏によぎつた。

「止まれ！」

半狂乱のせいかわ、言葉には少しも反応を示さない。彼女が手にしている包丁であっても、軽装のテツには十分な脅威だ。考えている暇はなかった。

彼は弓を引き絞った。キリキリという弦の悲鳴が聞こえる。目線は厳しくなる。相手の狙うべき位置が拡大されたように明確になる。

ひゅ、という空気を裂いた音がした。

我に返ったときには、矢はすでに放たれていた。そして狙った通りに女の胸を貫く。女は大きく痙攣すると、足をもつれさせて地面に倒れた。のどを詰まらせた音を繰り返したあと、血の塊を吐いて動かなくなった。

ひとりの人間が死んでいく様子をテツは黙って見ていた。

戦のときとは違う、明細な死的一幕だ。あのときは夢中で、倒した相手のことなど考える暇はなかった。死の確認をするまでもなく、次の相手にかからなければならなかった。

だが今回は違う。殺した相手は、まざまざと、その死に様を加害者に見せつける。

腹の筋肉が収縮して、ひとりでに呼吸がもれた。胸糞が悪い。朝食は抜いて正解だった。もしも胃に内容物があつたなら、戻していても不思議でない。

夫婦と思わしき男女は、両者とも苦悶の表情で事切れていた。すでに村人は少なくない数が死んでいる。その中の一部に過ぎない。

一部に過ぎないが、紛れもなくテツが殺した人間だ。

クソ、と吐き捨てる。畜生、畜生、と何度も呪いのように口を動かす。そうせずにはいられなかった。良心という患部に、泥を塗りたくらなければならなかった。もっと汚い言葉で覆いつくされなければ、否が応にでも見せつけられてしまう。

女を射殺したテツを、団長は少し感心したように見た。酷く癢に障る仕草だった。自然と睨み返す形になる。感情を母親の腹の中に

置き忘れた大男は、自身の年齢の半分にも満たない彼の殺気を何とも思っていないようだった。

団長は近くの家の扉を蹴破る。テツの殺気にはすんとも反応しなかったのに、思いがけず片方の眉を持ち上げた。中から引きずり出したのは、彼の半分にも満たない小柄な体格の持ち主である。

ガラスを思わせる少女だった。

着ている服は、ところどころすり切れた粗悪なものだった。だといつのに、身につけている人間の方が服を装飾しているかのようだった。彼女に着られている服は、少しも品を欠いていなかった。

顔立ちはこの地域特有のものだったが、ハーフであるのか、テツたちモンゴロイド系の片鱗を見て取れる。それがいつそう少女を幼く見せていた。どうかさ増しして見ても、10代前半だろう。

シャンプーなどという上等な代物はないだろうに、それでも金色の髪は少しもくすんではいなかった。

何より少女を際立たせているのが、そのガラスのような瞳だった。まるで何も映していないかのような。いや、それは違いかもしれない。彼女は倒れている男女の死体をじっと見つめていた。

「なんとも不気味な人形だな」

団長の揶揄する言葉にも反応を示さない。

興味が失せたのか、少女をテツに任せると彼はいった。すでにあらかたの過程は済んでいるものの、次は食料などの運び出しの作業

が待っている。遊んでいる時間はない。

テツの返事を待たずに団長は行ってしまった。残される青年と、少女。和やかな空気は当然のごとく存在しない。

——なんとも不気味な人形だな。

普段なら口も聞きたくない相手だが、その意見には賛成だった。まるで生氣を感じさせない佇まいは不気味の一言だった。美しい少女の皮を被った、何か得体の知れないもののように思えてくる。

だが、いつまでもこうしているわけにはいかない。指示を出すために近くにいたキヨウイチを呼び寄せると、相手も同じように引き連れている人間がある。

フードを被ったふたりだった。キヨウイチの背に隠れるように付き従っている。隣にはスイの姿もある。

「そのふたりは？」

「捕まえたんだ」

テツは近づいて、そのふたりのフードをとった。あ、というスイの声を無視して、まじまじとふたりを見分する。

確かに、顔立ちが悪くない。むしろ美しい部類だといえる。ひとりには少女で、もうひとりにはテツと同じ年か、あるいは年上の女性だろう。酷く薄汚れていて、駆け回っているテツたちよりも酷い有様だった。

背の低い少女を覗き込む。

抑揚の欠いた動きで見返されると、テツはその少女の瞳に見覚えのある感情を見た。なるほど、と納得する。得体の知れなさでいえば、こつちもいい勝負だ。よりにもよって、ただの村人というには相応しくない人間が、3人も一気に現れるとは。

「お、おまえの方も同じみたいだな」

テツとフードの少女の間に割り込みながら、キョウイチはいった後ろに引き連れているガラスの少女を視界に入れると、すぐに頓狂な声を上げて固まる。

無理もないと思う。不気味さでいえば、テツの後ろに佇む少女は筆舌に尽くしがたい。目を合わせただけで魂を吸い取られそうだ。

「とにかく、あとは最後の仕上げらしい。キョウイチたちは副団長の指示をあおいで」

「わかった」

「ミコト姉さんは？」

周囲に目をやると、手を振って存在を誇示するミコトがいた。サツキたちと一緒に動いていたらしい。

「姉さんは団長の指揮下に入って」

「うへえ」

心底嫌です、と肩を落として返答する。少しふざけた態度だが、空元気でそうしていられるならいいことだ。このぶんなら、彼女たちも大丈夫だろう。

「捕まえたふたりはキョウイチに任せるけどいい？」

「大丈夫だ」

責任をもつて連れて行く、と彼はいった。ならば任せておいてもいい。あまり何人も引き連れると足が遅くなる。まだ穀物類の蔵が見つかってないから、それを探さなくてはならない。

みながそれぞれの持ち場に向かったあと、テツは後ろを振り返った。相変わらず無言の少女は、抵抗する様子も見せず、黙ってついてくる。手がかからないといえそうだが、逆に従順過ぎて気味が悪い。

注意深く瞳を覗き込んで見ても、映っているのは間抜けな自分の顔だけだ。そこには感情の欠片も現れていない。

ため息をつく、村人が逃げ出した空き家の見回りを始める。まだ使えるものが残っていないか調べるためだ。

後ろから刺されてもぞつとしない話なので、少女を先に歩かせる。弓を肩にかけ、代わりに剣を抜く。

やはり、剣はいい。弓も飛び道具として有効な武器ではあるが、テツが絶対的の信頼を置くのは剣のほかにない。すつ、と気分が落ち着くのがわかる。心拍数が高いのと、呼吸が荒くなっていることを感じ取れるようになる。彼は努めて呼吸を落ち着かせ、無駄な緊

張を強いていた身体を平常に近い状態まで戻した。

少女を先導させ、家々をしらみ潰しにしていく。隠れている村人がいないか、注意深く死角に意識をやった。物陰からバツサリ、なんてこともある。少なくとも、テツならばそうする。

突然襲われて逃げ出したはずなのに、あまり金になりそうな物は残されていなかった。元々この村は裕福ではなかったのかもしれない。それでも、少なくとも量の食料が入ったから収穫はあったといえる。

村の開けた場所、広場ともいえるだろうか。そこには捕まった村人が集められていた。例のフード2人もキョウイチの隣にいる。

団長はというと、中でもでっぷりとした老人を脅している最中のように、その老人は顔を青くしながら、かぶりを振って許しを請うていた。

見たところ村長のようである。身なりが他の者よりも上等だった。服は染色が施されているし、刺繍もあった。ボロ布のような他の村人の服と比べると雲泥の差がある。

曲がりなりにも村長を務めるだけあって、団長の脅しにも無様な姿を見ているものの、口を割る気配はない。

どうやら種もみの隠し場所を聞き出そうとしているようだ。ここに来るまでに調べた空き家にはなかった。ならば違う場所か、見つかりにくいところに隠しているのかのどちらかだ。

大抵の人間は、軽く拷問すれば秘密を吐く。だが、この村長はど

うだろうか。ちょっとやさつとでは食えない顔つきをしている。墓の中まで秘密を持って行きそうな雰囲気があった。

団長はこの業突な輩をどう料理するか迷っているようだ。そもそも、種もみ自体が本当にないかもしれない。下手に殺してしまつては、情報が引き出せなくなる。

ややあつて、余興を思いついた、という顔をした彼は、「おまえがやれ」と尋問する役目をテツに押し付けた。

このキングコングはばくに恨みでもあるのだろうか、と半ば諦観の念を抱いた。何かと面倒を押し付けられているのは、きつと気のせいではないだろう。もしかして、自分を胃潰瘍か何かにかからせて暗殺しようと画策しているのかもしれない。あり得ないが。

ひざまずいている村長の前に立つと、彼の目に侮りの感情が横切つたのを見た。それでいい。悪魔の権化のような団長のあとに出はる役者としては、力不足感を否めないテツである。十中八九の人間が安堵し、油断するだろう。特に若さゆえの青さというものは、テツから自然発生的に生じている、相手を転ばすための油のようなものだ。

「村長さん、種もみの隠し場所を教えてください」

「そんなものはない。何度もいっているだろう」

懇願するように訴えるので、テツは理解しているとばかりに相づちを打つ。

この老人は食えない。だから食う必要はない。強欲な人間は雑巾

のごとく絞ったところで、最後まで脂を蓄えているような連中だ。ならば、餌で釣ってやればいい。その欲望で抗っているのだとしたら、目の前に好きな食べ物を垂らしてやるのだ。

「教えてくれたら、種もみの半分は残してあげますよ」

「え？ う、うむ……」

目線をずらして、村長は考え込んだ。頭の中では、隠し場所を話すメリットとデメリットの計算が高速で行われているのだろう。

ここまででいい。自分の仕事は済んだ、と視線を投げると、団長が満足して頷く。団長が知りたかったのは、種もみが存在しているか、していないかである。実在しない情報を引き出そうとする尋問ほど、労力の無駄を感じさせる所為はない。

村長の仕草から、種もみを隠しているのは決定的だ。あとはなぶるなりして居場所を吐かせればいい。存在することはわかったのだから、情報の引き出しに絞って痛めつければ、相手も観念するに違いない。

「団長、少し時間を頂きたいのですが」

「理由は？」

「さつき射殺した者を埋葬するためです」

テツの言葉に対してのあからさまに怒気を孕んだ団長の表情を見て、半ば予想していただけに落ち着いて続ける。

「別に哀れみや後悔というわけではないですよ。自分の精神の安寧のためです」

村人を殺したショックは少なくないので、精神的に辛い状態である。このままではあとに引きずりそうなので、嫌な記憶を忘れるためにも土に遺体を埋め去りたいと告げる。

詭弁だということは団長もわかったはずだ。それでも、テツの言葉は全てが嘘ではなかった。このままでは気分も優れない。駒を動かすキングとしては、部下の体調と精神を良好に保つ行為は無駄とはいえない。それなりに説得力がある話だった。

渋々、といった体で許可は出た。理屈で動く人間でなかったら、こうもいかない。

略奪に参加していたポールも思うところがあったのか、手伝いを申し出てくれたが、自分で埋葬することに意味があるので、丁寧に遠慮した。彼は他の団員とは違って、テツの行動に共感しているようだった。

心持ちうなだれて遺体の元へと向かうテツを、道場生たちは複雑な表情で見送った。幸いにも、今回の村人たちは逃げ足が速かったようで、団員に抵抗して殺された人間以外は逃げ出せていた。それゆえ、道場生たちは手を汚す必要もなく、逃げ惑う村人を追い払うだけでよかったのだ。テツの場合は不運だったとしかいいようがない。

遠くなる背中を見送る中で、2対の目は特に鋭い。フードの奥に隠れている瞳は、まるで怨敵を睨みつけるかのようだった。けれど、静かに怒る彼女たちに気を配る人間はいない。

目立つてはいけない。そう理解しているから、略奪という悪行を行いつながら偽善をなそうとする愚か者に、ふたりは冷笑だけをみまうのだった。

第17話

人の死体というものはいつ見ても好きになれない。特に原型を完全に保っている死体の方が苦手だった。蠟人形のように白い肌で、かつては理性の光を灯していたであろう瞳は何も映していない。むしろ原型を留めていない方が、人間らしくなくて気が楽だとテツは思う。そういった死体は気持ち悪いだけである。

少なくとも遺体には、すでに死肉を狙ってカラスらしき鳥についはまれているものがある。自分も死んだら、こんな風に鳥の餌になるんだろうな、と自嘲気味に笑った。墓を立ててくれるような葬儀屋の知り合いは、この世界にはいないのだ。

「なぜついてくる？」

振り返ってテツはいった。

彼の目をきちんと捉えているのか知れない目付きで、

「離れるなとあなたはいったから」

「それはそうだけど」

少女があとをついてくるのは、情性のようなものなのだろうか。できることなら、どこかに捨て置いておきたい輩だった。しかし団長の手前、放っておくこともできない。あの男からすれば、少女は金なる木なのである。

再び戻って、預けてくるのも面倒だった。仕方なしに前を歩かせ

る。歩き方さえも音もない。氷上を滑るように前へ進んでいく。見ようによっては、さぞかし気品のある少女に違いなかった。

目的の場所につくと、テツは仕事熱心なカラスを追ひ払って、埋葬するのに適当な場所を探した。近くの家が彼らの住居だろうから、その周辺がいいだろう。地面の柔らかな部分を探すため、靴の底で土を削りながら調べていく。

周囲より粘土質な場所を見つけると、早速他の家から失敬してきた農具を使って穴を掘り始める。現代のスコップに通じる形をしていて、平板で掘るよりは効率もかなりよかった。それでも人間2人ぶんの収まる穴を掘るのは並大抵のことではない。とてもじゃないが、遺体を伸ばした姿勢で埋葬するのは無理そうだ。

息を乱しながら掘り進めていく。

テツは少女の視線を感じた。少し離れた位置で作業を見守っているらしかった。見ているだけなら手伝えとはいえなかった。他でもない、テツ自身が殺してしまった人間の墓を掘っているのだ。他人にやらせていいような作業ではなかった。

辺りには土を掘り返す音が無機質に繰り返された。コーラスは気味の悪い鳥の泣き声である。

まるで墓荒らしだな、とテツは思った。教会墓地の眠れる死体を掘り返す盗人。なんとも罰当たりな所業である。

そして作業を行っているのは、はたから見れば陰気なふたり組である。無表情な少女はいうまでもなく、ぶっきらぼうとか、唐変木とか、よく揶揄される彼も似た者同士かもしれない。

ようやくある程度まで掘り終える。穴からはい出ると、地底人を目撃したような目を向けられた。自意識過剰だろうか。

穴はそれほど大きくないので、遺体は身体をくの字にしておさめなければならぬ。死後硬直で固まった関節を曲げるのは、気持ちのいいものではなかった。

折り重なる格好で2体の遺体を安置する。手荒で済まなくも思ったが、テツに射殺された女性からすれば、丁寧も何もあったものではないだろう。なんとも偽善的な、と自分を罵倒する。けれど、これは必要な儀式であった。死人を埋葬しながら、遠見テツの破損した良心の一部を埋葬する儀式だった。

しばしの間、黙祷を捧げたあと、盛られた土を戻していく。土を被せる行為は、死人に鞭打つ残酷な仕打ちに思えた。せめて棺があれば違っていたかもしれない。身体をさらされたまま地中に埋没していく恐怖は、想像するだに恐ろしい。

やがて穴は埋められ、遺体は地下へと消えた。テツはその上に石を2つ並べて置いた。簡素な墓石ともいえない代物である。彼らの遺体が埋葬されていることを示すには適当ではなかった。それでも少なくともテツと作業を見ていた少女には、この地に眠るふたりの存在がしっかりと焼き付いている。

作業は済んだ。きびすを返して戻ろうとすると、不意に声をかけられる。

「死体を埋めることに、意味はあったの？」

彼女はやや怒っているようにも見えた。いままでの無表情しか知らないテツからすれば、それは大きな感情の発露である。

埋葬する、という行為が、何か琴線に触れたのかもしれない。

「死体は何も語らない。ただの肉の塊でしかない。あとは腐って骨になるだけよ」

「そうだね。けれど死体になる前は確かに生きていたはずだ。きちんと息をして、心臓を動かして、生命としてあった」

「それをあなたは殺した」

非難する口調ではなかった。ただ事実を確認したに過ぎない。目にしてきた風景を、口にしてみたかのようにだった。

「ぼくが殺した。間違いない」

ちら、とテツはうかがう素振りで、

「もしかして、知り合いだったのかい？」

「——両親よ」

言葉を返す代わりに、大きく息を取り込んだ。大してうまい空気ではない。死臭が染み付いた空気だ。できるなら、新鮮な山の空気でも欲しいところだった。

なるほど、と納得する。感情が死んでしまっても無理はない状況だった。父親は両断される勢いで斬り殺され、母親は無慈悲に胸を

射抜かれた。なんとも酷い仕打ちだっただろう。そして、その殺人劇の片棒を担いだのは、ほかならぬテツである。

よくも殺されなかったものである。もしかしたら、ずっと復讐する機会を探っていたのかもしれない。そう思つて顔を上げて、それらしき感情はどこにもないようだった。不自然過ぎるほどに、何もなかった。

「ぼくが憎い？」

「その質問は、あまりに不躰だと思う」

「なぜ？ 母親の敵が目の前にいるんだ。憎まなきゃおかしいだろう」

「だから、不躰だといったのよ。わたしにも何が起こっているのか理解できない。本当なら悲しむべきなのに、あなたを憎むべきなのに、少しもそう思えない。まるで自分には関係のない出来事を見ているみたい。……わたしのいいたいことがわかる？」

「わかるかもしれない。ぼくだって、たまに自分がわからなくなる。人を殺すことに動じないと思つたら、人に嫌われただけで死にそうな気持ちになる。絶望して死にたくなるときがあるのに、そのすぐあとには、暗い悦楽が沸き上がってくるときがある。いまだってそうだ」

墓石はどこにでも転がっているような石だ。道端にあれば、誰も気にしないようなものだ。けれどテツにとっては、故人を示す印となる石だ。その変哲もない印を見ると、どうしようもない後悔の念が沸き上がってくる。一方で、そんなものは意味のない感情だ、と

吐き捨てる自分がいる。

「だから、気持ちの整理をつけにきた。自分のためだよ」

「なら、教えて欲しいの。わたしはどうかしちゃったのかな。胸の奥がズキズキするのに、それをなんとも思えない。まるで、わたしがなくなっちゃったみたい」

恐らく、少女は一度死んでしまったのだ。テツはようやくその思いに至った。不気味なまでに無表情だった彼女は、あるときに徹底的に破壊され、失われたのちに残った残滓だったのだ。

両親を殺されたことで引き起こされたのなら、話は簡単だっただろう。だが彼女を見る限り、両親の死は引き金であつたとしても、直接の原因ではないような気がした。聡明な話し方からも、「死」という概念を十分に理解していたに違いない。そんな彼女が、悪くいえば、ありえたかもしれない状況を前にして狂うとは、到底思えなかった。

出会ったばかりのテツには、少女を癒すことはできない。彼女自身も、それを望まないはずだった。

「さっきの答え、君の両親を埋葬した意味だけど、それは救われて欲しいと思ったからだよ。陳腐な台詞だけどね」

無論、自分勝手な理由が第一にくることは間違いない。それと同じに、語ったことも真実であつた。殺しておきながら救われて欲しいとは、身勝手の極地である。指摘されるまでもなく理解している。

「救い？」

「君たちの宗教にはないのかい？　そういう概念が」

「シュウキヨウ？」

理解出来ない単語を耳にしたようだった。

その反応に驚く。中世のような世界観だから、てっきり宗教が発達しているとばかり思っていたのだが。そういえば、この村には教会のような人々が集う建物が見えない。どんな宗教であっても、そういった施設はあり得そうであるのに。

テツのいた世界との明白な違いだった。この世界には「神」の概念がないらしい。あるとすれば、太陽や風、自然に対する崇拜の念だった。少女の話しぶりから、一神教と呼べる宗教がないことを悟る。

代わりにいつて聞かせた、唯一無二の神の存在や、天の国といった話は、少女にとって興味のあるものだった。テツも世間一般が知っている知識しかないので、当たり障りない神学講座モドキをするだけだったが、「神」の概念を発見した少女には、非常に新鮮な驚きだったようだ。

無理もない、とテツは思う。宗教の真価は苦しいときに発揮されるものだ。誰も救ってくれない、誰も理解してくれない。そう思い込むからこそ、天上に救いを求めるのである。科学がはびこる現代においても、新興宗教が絶えず現れ続けるのも、そういった原因が根底にあるからだ。

もしかしたら、彼女に話を聞かせたのは間違いだったかもしれない

い。誤った考えにすがって、身の破滅を招く者は少なくないのだ。特に狂信的な人間は、致命的な誤りを引き起こす。

テツの懸念を、少女は理解しているとばかりに頷いてみせる。

「あなたの話は興味深いけど、鵜呑みにはしない。でも、わたしの疑問の答えを示してくれるのも、あなたの話なのかもしれないわね……」

少女は両親の埋葬された場所を見た。どこにでもあるような石の下には、彼女の肉親が眠っているのだ。自然と頭を垂れる形になった。

死体には何の意味も見出せなかったはずなのに、少女の脳裏には、不思議と生前の両親の姿が浮かんだ。人間として、悪い人たちではなかったといえる。たとえ弟を売ったとしても。自分を領主に売るうとしたとしても。

少女は動き出したんだな、とテツは膝をついて黙祷する姿を見て思った。人形のようなだった彼女は、ようやく両親の死を理解したのだ。ただ失われただけではないのだと。肉体は滅びても、あとに残された人に魂は受け継がれる。彼らの魂は少女の空虚を満たし、人間として動かし始める。

テツに向き直った少女の顔は一変していた。それこそ、テツが戸惑うくらいに。

「——騎士様、お礼をいわせてください。両親をこの地に埋葬して頂き、とても感謝しています」

「冗談にしか聞こえないよ。ぼくは騎士なんて上等なものじゃない。見ればわかるだろ」

両手を広げて、自身の身なりがいかにも貧相であることを示してみせた。鎧なんて見当たらなし、マントだって羽織っていない。これで騎士を名乗ったら、詐欺罪で捕まっても文句をいえないだろう。

少女はかぶりを振った。

「わたしには『本物の騎士』とやらの見分けはつきません。ですが、少なくともあなたはただの野盗ではない。彼らは、わたしを犯し、殺すことはあっても、救ってはくれません」

「君は間違ってるよ。ぼくは君を助けたいわけじゃなかった」

「そうかもしれませんが。ですが、あなたは両親の殺害に手をかけながらも、わたしに救いを与えてくださいました。手をかけたことを望んでいなかったのは、十分に伝わりました。あなたはいい訳という見苦しい行いをせずに、行動で誠意を示してくださいました」

自分の行動が、彼女の目には、そのように映っていたのか。自身に覚えのない善行をたたえられているようで、居心地が悪かった。けれど、彼女の口をさえぎって訂正する行為は、さらに愚かな行為に思えた。

少女の目には、僅かであるが、生きる気力というものが現れ始めているようだった。それがいいことなのかはわからない。彼女は自分と同じように囚われの身だ。感情が死んでいた方がいいこともある。

これは身勝手な要求だ。けれどもガラスのような瞳よりも、いまの彼女の瞳の方が、何倍も好みだった。

テツは、少女の中に眠っていた何かを呼び起こしてしまっただけだった。まるで人が違ったように話す様子は、なんとも不可思議な光景だった。

ある種の神々しささえ感じさせる少女は、時代が時代ならば、何か大きなことをしでかしそうな予感を感じさせた。

うつて変わって、恭しく付き従う少女に困惑しながら、自分の周りにはおかしい人間がよく集まるものだ、としみじみ思う。無論、遠見テツという人間を含めて、まともだと思えない類の者は、互いに引き寄せあうのか、と邪推してしまうくらいに一箇所に集まる。それは団長であり、セブンス傭兵団そのものであり、遠見テツであり、この少女でもあった。

時代を先導している、なんて馬鹿げた妄言を吐くつもりはない。ただ、人間には捉えることができない、大きな奔流の中に飲み込まれている感覚がした。

あの日、謎の渦に巻き込まれていた草切ミコトの手を握った日から、物語は動き出したのだ。ならば、その物語の主人公は誰なのだろうか。

少なくとも自分ではないな、とテツは自信を持って断言できる。彼はそんな男だった。

第18話

帰ってきてからというもの、テツの様子がおかしい。草切ミコトは、どこか気落ちした様子の彼が、行われた略奪行為に気を病んでいるのだと考えた。彼は不幸にも村人のひとりを射殺す事態を引き起こしているのだ。

いつものように軽口で励ますことは憚られた。どうにも自分は女らしい一面が欠けている、と齒がゆい思いでいつぱいだった。彼女の大学の友人ならば、こういうときに自然と慰めるだけの行動を取れるはずだ。その一方で、遠目に気にかけるだけで、どう声をかけていいか悩んでいる自分は、なんと不器用だろうか。

男らしいとか、姉御肌とか、そう何かと評価されることがある。少なくとも、そんな性格で得をしたことなど覚えがなかった。タイムマシンがあるなら、過去に戻って自分を矯正したい気分だった。

現在、傭兵団の一行は、マーンソン領の一大交易地に向かって足を進めていた。食料の類は略奪行為によって補充されたが、他にも必要な物資があった。先の村で手に入れた「戦利品」を換金しなくてはならないし、武器の手入れも必要だったので、得意先であるかの街に向かっていくのだった。

正直、道場生たちは気が気ではなかった。交易が盛んな街に行くということは、奴隷も売られることになる。それはつまり、彼らも売り飛ばされる可能性がある、ということだった。

実際、略奪に反対した道場生のひとり、売られることが明示されていた。村から連れ去ってきた者たちと同じように、手足を拘束

されて荷物のように荷馬車に積まれている。

もしも自分だけが売られてしまったら——そんな不安に苛まれている。右も左もわからない世界に飛ばされて、辛うじて正気を保ってられるのは、仲間たちがいるからだ、みなは当然に理解している。この機になつて離れ離れになるのは、なんとしても避けなければならなかった。

テツは心あらずといった体で歩いている。その少し後ろを、付き従うように歩く少女の姿があつた。

彼が射殺してしまつた女性の娘であるらしい。本来ならば奴隷として荷馬車に放り込まれているはずなのだが、団長の鶴の一声によつて自由が許されていた。それもおかしな話である。

村から撤収して、戦利品を荷馬車に移している中、場違いともとれる光景があつた。親と子供とも離れているふたりが、交渉戦とも思わしき舌戦を繰り広げたのだ。詳細は誰にもわからない。ただ本人の了解も取られずに少女はテツの管理下に置かれ、彼が呆然と事のなりを聞いているのを見ると、想定外のことだったのは予想するに難しくない。

団長が何を思つて少女をテツに預けたのか。そもそも、成り行きから考えて、彼女は自らテツの下に向かったと考えるのが妥当だろう。

一番初めに見た人形のような様子とは、180度方向転換したような変貌もある。あの団長でさえも驚いていたくらいなのだから、よくもまあ、あの短時間で少女を落としたものである。手の早い弟分に少し呆れてしまった。

冗談はさておき、テツが沈んだ様子なのは明白だった。キヨウイチやスイに相談してみても、「そつとしておく方がいい」と諭されてしまった。彼らも殺人を経験している人間である。思うところがあるようだった。

キヨウイチのことで気がかりなこともあった。弟が連れてきたふたり組のことである。あの少女の件もあって、なし崩し的に自分の下に置いてしまった手腕は感心するものの、怪しさでいえば、こちらの方が倍々増しである。

幼い方がティア、姉という方がヘレンと名乗っていた。口数が少ない姉妹だった。スイという恋人がいるのにけしからんと詰め寄ったときに、「キヨウイチ様はわたしたち姉妹を助けてくださったのです」と逆にいい返されてしまった。

この姉妹の件も、あっさりと認めた団長には不信感しか湧いてこない。まるで、策略だけに思いを巡らせているような不可解な行動。思いつつ、自分でも過剰反応過ぎると反省せざるを得ない。きつと、自分と団長は、永遠にわかり合うことはできないのだろう、と自然に悟る。

所帯が増した傭兵団は、いくらか足が遅くなったものの、領主同士の戦いで得られなかった戦果を補充できたおかげで機嫌がよろしいようだった。

いつもは人生に絶望しているのかと邪推してしまうガヴァン副団長の横顔も、心なしが陽気に見える。あくまで心なしか、といった程度であつたが。

聞きなれない鳥の鳴き声がした。空を見上げると、翼を広げた大きな鳥が、風を掴んで優雅に滑空している。目測からして、タカやトンビの仲間のようだった。

スカイブルーの中空は凜いであり、雲は綿菓子のようにもくもくと連なっている。心地良い風が流れ、ミコトの結び上げている髪がそよいだ。

彼女の生家がある地域も、自然が多く残されていた。都会に憧れた時期もあったものの、実際に経験してみると、思ったよりも上等なものではなかった。確かに便利ではあった。それと引きかえに、彼女の当然だと感じていた環境が失われていた。都会で生まれ育ったなら、それが当然と感じていただろう。しかしながら、彼女が生まれたのは、自然が多く残る環境だったのだ。

頭上に広がる空は、少し表情が異なっていた。それでも与えてくれる安らぎのようなものは、彼女を勇気づけさせた。

よし、と気合を入れる。右手の薬指にはめられた指輪を慈しむようになでた。自分には付き合っている男性がいる。だというのに、その相手の顔がおぼろげにしか思い出せなくなってきた。

理由は簡単なことだ。けれど、口にしたり考えたりすることは、相手に対しても自分に対しても誠実とはいえなかった。心変わりとはまた違う。ミコトの弟分に対する感情は、いつでも普遍的に生き続けている。

さりげなく横に並んで、テツに話かける。うろんな視線を向けてくるのは毎度のことであった。しかも今回は当社比で5割増の憂鬱度が上乘せされていた。

「君はいま、徹夜明けの漫画家みたいな顔をしてるわよ」

「だとしたら、それは正しい理解でしょうね。ぼくは締め切り間際だというのに、アシスタントによって原稿にホワイトをこぼされた気分ですから」

「それはご愁傷さまだわ」

なむなむ、とテツの昇華を祈願することにする。

「もう少し気を使ってくれてもいいんですよ？　ぼくはいま、人を殺してしまったせいでナイーヴになってますから」

「キョウイチやスイがいうみたいにそつとしておけと？」

「ええ。キョウイチやスイがいうみたいに」

道場生仲間たちは、落ち込むテツを腫れ物を扱うようにした。無理からぬことで、どう声をかけていいかわからないのである。十代の少年少女が扱う問題としては、テツの抱える問題は敷居が高過ぎるといった。

「少し失礼なこというけどさ、わたしには、テツがそのことで悩んでいるようには思えないんだよね」

遠見テツという人物を鑑みて出した結論だった。空を眺めていると、ふと、彼を過小評価していることに気づいたのだ。略奪行為という暴挙を許容したとき、同時に、その手が返り血に濡れることを覚悟していたはずなのである。ミコトの知る彼はそういう人間であ

る。

「違う？」と推し量るための疑問詞を投げかけると、彼は歩みをゆるめぬまま、心持ち後ろを気にしながら同意した。

影のごとく付き従う少女は、機敏に気配を察知して、ミコトの前に割り込む形で躍り出た。「ちょ」立ち位置を奪われてしまった。なかなか図々しいおなごだな、と怒るより感心してしまった。

その少女は金色の髪を太陽で反射させて、

「お呼びでしようかつ、テツさま」

と、向日葵の咲くような笑顔でたずねた。

「あれ、この子、こんなキャラだったっけ……？」

確認するために思い返してみるが、ガラスのような瞳と表情のない顔が印象的で、いまの彼女とは似ても似つかない。双子の妹です、とでも答えられた方がまだ納得できる。

既存の人格を丸ごと消去して、新規に別の人格をインストールしなければこうもいくまい。遠目からも様子が違うなあ、と思っていたものの、実際に見てみると不気味ささえ感じさせる変貌だった。

従順に返事を待つ少女に、テツは疲れた顔をして「呼んでいないし、用事もない」と切って捨てた。見事なまでに冷酷無慈悲だった。

少女は意気消沈して下がる。ミコトは力なく垂れ下がる獣耳と尻尾を幻想した。

さすがに可哀想だと非難の目を向ける。テツはそれに気づいて、知ったことかとばかりにそつばを向いた。

「カッチーン。お姉ちゃん頭にきちゃいましたよ？ カッチーン」

「擬音を2回も繰り返さないでください。鬱陶しいですから」

「テツはねえ、もう少し女の子に優しくした方がいいと思うんだよね。前にもいったかもしれないけど」

接近して力説すると、彼はひらりと補足範囲から逃げ出した。それに追いつがって首根っこをつかむ。物理的に逃げ出せないと観念した彼は、せめてもの抵抗とばかりに目を合わせない。

「非常に歩きにくいです」

「霊長類なら我慢なさい」

「なんて御無体な……」

「これだから男女は」とブツブツいう文句を黙らすために、首をつかむ手を軽く締める。奇妙な鳴き声とともに草切ミコト批判は下火になった。世話なきことである。

内緒話をするために顔を再度近づける。今度は逃げ出そうとしないテツに満足しながら、声量を落として話し始めた。

「いったい何をしたのよ。まさか手箒めにしたとかいうんじゃないでしょうね」

「それこそまさかですよ」

テツは頬をくすぐるミコトの髪に気を取られつつ反論した。

「何が何やら、ぼくにもさっぱり。強いていえば、彼女の両親を埋葬してあげたくらいです」

なんでもないことのように彼はいった。

遅れて意味を理解したミコトは、この青年はやはり常人と価値観がずれていることを感じずにはいられなかった。彼は死体を埋める行為としか意味付けしていないのだ、自身の取った行動のことを。口にする理由はどうであれ、思考の一番深いところでは、埋葬という行動に意味を感じていない。だというのに、彼にそのような動きをさせているのは、もっと表面的な意識の表れだろう。だから噛み合わないのだ。本心と身体が別々に作動しているような違和感に苛まれるのだ。テツの調子の悪そうな様子の理由を、本人ではなく、ミコトが理解できてしまうのは皮肉なものであった。

本人に指摘したところで理解されないのは想像に難しくない。自分のことなど、他人にわかるはずがないと大多数の人間は考える。けれども、その自身のことを誰よりもわかっていないのが常人なのだ。結局、誰もが誰もを知っていない。世界は誤解と勘違いから成り立っているといえた。

食い違っているようで、歯車が合わさってしまったのだろう。遠見テツという青年とかの少女は、対極に位置していながら、最も近い思考をしている。その琴線に触れた音を、彼女は感じ取ったに違いない。

ひよこひよこ後ろを付いてくる姿は、親カルガモのあとを付けてくるひな鳥のように愛くるしい。少女と目が合う。別ににらみ合ったわけでも、探ったわけでもない。それなのに、先に目を逸らしたのはミコトの方だった。

なるほど、只者じゃない。そう苦笑する。目線が合ったままという居心地の悪さを少しも感じない様子は、弟分の集中状態の姿に似ていた。彼は一度スイッチが入ると、人間の余分な部分をバツサリと捨て去る。少女の場合は最初からもっていない、という違いがあったとしても、根本は同類のものだ。

「ところで、彼女の名前はなんていうの？」

「名前？ さあ」

全く見当がつかない、とテツは小首を傾げた。この男は名前を聞いていないのだ。聞いていないのだから知らなくて当然だった。そして見当がつかない、というのもズレた反応だった。

顔を引きつらせながら、ミコトは己の自制心を総動員した。怒ってはいけない。人間関係の円滑なコミュニケーションは話し合いである。すぐに手を出すのは野蛮人のする所業なのだ。

「あのさ、それはないんじゃない」声のトーンが不自然に高低した。咳払いをして冷静さを維持する。大丈夫、自分は落ち着いている。

「名前を呼ぶと情が沸くっていうじゃないですか」

「犬猫でしょ、その話は。いい？ 彼女の面倒を見ることになったんだから、名前ぐらいは聞いておくべきよ」

「——ぼくは了承したわけじゃない」

ぞつとするような冷たい声だった。驚いてテツに顔を向けると、目の前の見えない敵をにらみつけていた。心なしか、周囲の温度が下がった気がする。彼の中の、逆鱗ともいえる部分が刺激されただけだった。

声を詰まらせるミコトに気づいた彼は、恥じた表情を浮かべて謝罪した。己の失態を悔いているようだった。落ち着きなく手を彷徨わせて、剣の柄に行き着いた。

その様子は、麻薬中毒者の禁断症状に似ていた。剣を確認した瞬間、熱が引くように落ち着いてみせた。

遠見テツは剣に魅入られ、取り込まれている。それは彼女を悩ませてきた問題だった。彼から剣を奪うことは不可能になりつつある。

これが現代社会ならば手の施しようもあつた。けれど、この世界では剣が生きる術であり、アイデンティティでもあるのだ。どう説得したところで、彼は受け入れないだろう。

問題の原因は自分ではないのか、と考えるにはいられない。冗談めかして聞いたことがあつたが、笑って誤魔化されてしまった経験がある。自分では彼を救い出すことができないのではないか。

力も、失われてしまった。能力が使えた時分ならば、力づくでも彼を止めることはできた。しかしこの世界に飛ばされてしまっただけか。

ら、能力は一切の恩恵を与えることをやめた。純粋な剣技と身体能力がはつきり示されるようになったのだ。

その中で、遠見テツは頭角を現す。本来ならば歓迎されるべきことなのかもしれない。長年の修練が実ったともいえるのだから。

けれども、長年の異常ともとれる剣の日々は、彼を身魂から造り変えてしまった。表面上はとりつくろっていても、その身は剣への狂気に取り憑かれていた。その事実に気づいたのはいつだったろうか。気づいたときにはすでに手遅れだった。彼女の知る健気な少年は、その身のうちに悪鬼を孕んでしまっていた。

できることならやり直したい。そう何度願ったことだろう。意味のない行為なのだとしても、そうせずにはいられない。

気づきながらも樂觀し、問題を先延ばしにした結果がいまの状況だ。テツにしても、自分にしても、これは自業自得なのかもしれない。かった。

「ぼくに彼女の面倒を見る余裕はないんですよ」

「わ、わたしは、テツさまにご迷惑はおかけしません！」

いままで事の成り行きを黙って聞いていた少女は、我慢できずに割り込んだ。

「彼女はこういつてるけど？」

「迷惑か迷惑でないかは、ぼくが決めることでしょう。それに、団長からもきちんとした理由を聞いてないんですよ。どうしたら、

彼女をぼくの下に置く理由があるのか。考えるまでもなく、きな臭いでしょうに」

うんざりとした口調でテツはいった。それにはミコトも同意せざるを得ない。

「お願いしますっ。どうか、お側にいさせてください。きっと役に立ってみせます」

「なんとも健気な心意気だよ。ぼくには無用の長物だけど」

キョウイチに預けた方がいいとテツはいった。彼ならば面倒見もいいし、すでにふたりの人間を見ているから、彼女も加えて貰えるはずだ。少女はまだ幼い年頃でもある。自分のような男よりも、キョウイチのような社交的な性格の人間の側にいた方が好影響である。口を酸っぱくしてテツは説得を試みたが、成果はちつとも実らなかった。

「頑固だな、君は」

「……申し訳ありません」

しゅん、と少女はうなだれた。

ミコトからすれば、頑固さは両者とも五十歩百歩だった。似たもの同士であることに気づかないのは、距離が近いゆえの滑稽さというべきか。

そうしている間に、行列の前の方から声が上がった。目的の街が見えてきたらしい。村から離れて3日ほどだ。気がつけば、街道は

馬車を数台並べても余りある幅に変わっている。交通の要地である主要街道は、よく整備されていて荷馬車の負担も少ないようだった。

セブンス傭兵団の他にも、馬車がときおり通り過ぎるようになってくる。それらは交易用の馬車であり、荷物として交易品を多分に詰め込んでいるはずだった。

もう少しで到着するという安堵感のせいか、ゆるい空気が一団の間に流れた。毒気を抜かれたテツは、頭をかきながら、

「とにかく、団長にもう一度話を聞くつもり。君の処遇はそれからだ」

「はいっ、わかりました！」

「なぜ喜ぶ……?」

喜色満面の笑みを浮かべる少女を理解できない、とテツは眉根を寄せた。困り顔を浮かべる表情は、幼い少女の扱いに困り果てている父親のような面影があった。

もしかしたら、これはいい機会かもしれない。ミコトは、自分だけでは、彼を引き上げることは難しいと考えていた。あの少女ならば、一緒に彼の手を引く手助けをしてくれる存在に成り得るかもしれないかった。

「ところで、君の名前はなんていうんだ？」

この男は、ようやく名前を聞いた。あと2日も3日も遅かったのではなからうか。よくも不便に感じなかったものである。もしかし

なくても、「おい」とか「なあ」とかいつて呼びつけていたのだから。晩年になつたら妻に逃げられるぞ、とミコトは呆れた。

名前を聞かれた少女は「待ってました」とばかりに微笑んだ。

「わたしの名前はアリアです。これからよろしくお願いしますね、騎士さま！」

「騎士様……？」

「世の中には、常人には理解出来ない不可思議が満ちているってことですよ」

疑問符を浮かべるミコトに、テツはそう説明した。

第19話

街に近づくにつれて、その堅牢さはテツを圧倒した。要塞といつても過言ではない石壁に囲まれている城壁都市である。一大交易地とはよくいったもので、この守りがあれば、安心して商売を行えるに違いなかった。

街に入るための門も長大で、ここを閉鎖すれば、ある程度の攻城兵器にも耐えきれそうであった。いまは開け放たれている。出入りする馬車を監視する衛兵は、それほど厳しく取り締まっていなかった。

団長は壮年の衛兵から挨拶されていた。顔見知りであるようで、対応していた兵士の顔には尊敬の念も感じられるほどだった。団長の外用の顔は、無愛想でもきちんと対応している。集団のリーダーを務めるくらいなのだから、こういった付き合いも重要だと考えているのだろう。

短くないやり取りを終えると、一団は門をくぐって街に入城をはたした。ひっきりなしに馬や馬車が行きかい、辺りは騒然としている。様々な肌の色の人間が一同に集まって商売をしていた。

遠くには周囲より高い土地があつて、荘厳な城はそこから城下を見下ろしていた。

活発な商売の様子からも、この街が非常に栄えているのは明白だった。この土地を治める領主はかなりの手練であるようだ。税が重かったり、商売するには不適な要素があつたならこうもいくまい。

恐らく、商人にとって有利な環境を整備して、多くの人間を呼び込んでいるのだ。人が集まれば商売が生まれ、商売が繁盛すれば街も潤う。商う人間も、儲かればまたこの場所で仕事をした方がいいと考える。いつてみれば簡単なことだが、実際に現実とするには並大抵の努力では済まないはずだ。

「わあ……」

隣では、大口を開けて興味津々ぶりを示している。少女はずらりと並んだ露店を物珍しそうに眺めていた。この通りは装飾類を中心に取扱っているらしく、太陽の光に反射して黄金色が眩しくきらめいていた。

こんな露店で売っているのだから、そこまで高級品ではないのだろう。売られている品々を流し見しながらテツは思った。それでも女性陣には好評そうで、荷馬車からぞくぞくと顔をのぞかせているシンシアはポールに早くも攻勢をかけ、何か買わせようとしていた。

テツの隣にいるミコトとアリアも例外ではなく、物怖じせず店主に話しかけている。おだてられたのか、ふたりは満更でもない顔をしていた。

手持ち無沙汰になったテツは、人だかりから離れて馬車の影に回った。日差しは弱くなく、大して露店に興味が沸かなかった彼には気になる暑さだった。少しでも涼もうという魂胆だ。

行った先には先客がいて、運悪く、それは団長とガヴァン副団長のツートップだった。顔を合わせたくないランキングの最上位者を占めるふたりに会ったせいで、休憩をとろうとした気分は一気に萎えてしまった。なんとか顔に出さないよう自制する。

これからの方針を話し合っていたらしく、テツに気づいたものの、団長は気にしないで論議を続けた。ガヴァン副団長の不機嫌オーラはいまだ健在である。それでも踵を返して立ち去るのもどうかと思われたので、邪魔にならない位置に腰を下ろした。

雑踏の中にいると元の世界を思い出す。人々の賑やかな話し声は、気力に富んで、生きる力に満ち溢れていた。商魂たくましい商人が軒を並べている。この力強さが街を活気づけているのは間違いないかった。

人混みは苦手なテツだったが、この類の騒がしさは悪いものではなかった。見ていると元気づけられるようだ。身体から溢れ出しているエネルギーが、彼の身魂まで影響しているかのようなだった。

「どうだ、賑やかだろ？」

顔を上げると、太陽を遮るようにして長身があつた。ポールの表情は逆光によって確認しづらい。目を細めて「そうだね」と答えると、気分よさげな表情が見えた。

視界からは、ポールが空を独り占めに行っている風景が映る。なるほど、これは気持ちのいいはずである。彼は青々とした大海原を自分のものに行っているのだ。なんとなく羨ましくなったテツは腰を上げて、空に向かって伸びをしてみせた。

「何してんだ、おまえ」

情緒がわからないのは悲しいことである。ぽかん、とした表情でたずねてくるポールを憐れみの目で見た。彼は訳がわからないと肩

をすくめた。

「大きな街だね。入り口の時点でこれなんだから、中心街は想像がつかないよ」

「この街に來れば、揃わない物はないっていうくらいだからな。食料から武器、薬、何でも売っているんだ」

別に自分の所有物でもないだろうに、ポールは街のよさを声高に自慢した。

「その通りだ。何でも売っているぞ——奴隷などもな」

話を終えた団長は、腐ったような笑みを浮かべてやって來た。土産よろしく胃に優しくない話題をふってくるのはやめて欲しい。テツは引きつった愛想笑いを返すしかない。

自分たちの処遇を聞いておいた方がいいだろう。他の道場生は、街に訪れたことで浮かれていたが、奴隷を処分できる街に來た以上彼ら道場生の未来は決まっているはずである。団長のさじ加減ひとつで、テツたちはいくらかの貨幣にされてしまうのである。

テツが懸念を口にすると、売りに出すのは、先の村で捕まえた人間と、略奪に反対した男子だけであることを団長は教えてくれた。かつての仲間には悪いが、ひとまずほっと息をつく。どうやら自分たちには、まだ利用価値があるとみなされているようだ。もうしばらくは、路頭に迷うようなこともないと思いたい。

団長は必要な物資の補給と、戦利品の売り出しに行くと言った。団員がそれぞれ担当するので、テツたち下働きは、その間自由にし

ていていいと許可が降りた。

自分たちだけ遊んでいるわけにはいかない、と納得できないテツに、「なら奴隷の売りを見学するか」と団長は冗談とも本気ともとれないことを口にした。もちろん、全力で遠慮したいので辞退する。

集合場所はこの荷馬車のところで、見張りの団員が誰が残っているから問題はない、ということだった。

ポールも仕事があるらしく、気乗りしない調子で団長たちのあとをついていく。3人を見送ったテツは、飽きずに露店を冷やかしている面々に団長の決定と自由時間のことを告げた。彼らは降って湧いた幸運に喜んでいるようだった。

傭兵団の女たちも含め、各々がグループになって早速街に繰り出していく。帰る場所さえ覚えていれば、迷子になるようなこともないはずだった。城門近くは目立つ造りをしているから、遠目からでも大方の位置関係は掴める。

キョウイチとスイも、あのフードのふたりを伴って出かけるようだ。彼らと目が合ったので手を挙げると、返答するように手が挙がった。ふと、フードの暗闇の中から刺すような気配が感じられた。どうにも、気がつかない間にずいぶん嫌われたものである。全く身に覚えのないテツは、向けられる視線を無言で受け止めた。しばらくすると唐突に気配は消える。見ると、彼らは街の中心街に向かって歩き出すところであつた。

むっつりと黙り込んでいると、同じように険しい表情をする少女に気づく。アリアは去っていくキョウイチたちの背中を黙って見送っていた。けれども、その視線には友好的な様子は見受けられない。

出会ってまだ長くないというのに、人間とはこんなにも早く好悪がはつきりするのだから興味深い。

ただ、アリアの雰囲気は険悪を通り越して剣呑でさえあったので、テツは好奇心に従ってたずねてみた。彼女は乾いた唇を舐めて、

「あのフードのふたり組。村の人間じゃありません」

「だろうな」

わかっている、とばかりに同意すると、アリアは目を瞬かせた。

「どう見てもただの村人じゃあないさ。雰囲気でわかる。それをいったら、君も同じことがいえるけど」

「ありがとうございますっ」

どう捉えたら褒められたと感じるのだろうか。少女の感性は、テツの理解できない領域に到達しているようだった。

「何より、団長がキョウイチに預けたんだ。それだけで、何事もない、なんて思うわけがないな。あの人は、意味のないことをしない人だ。思惑があるからこそ、ふたりを放置している」

「実は、ただの考え過ぎということはないですか？」

少しも思っていないだろうことをアリアは口にした。試されているのだから。

考え過ぎであるなら望むところだった。あのふたりは、ただの迷

い人で、偶然村に居合わせたときに捕まった。それが一番望ましい。

楽天的に考えればそうなるだろう。だが、遠見テツという人間は、考えることに安堵感を見出す人種だった。逆に考えない人間は死んでいるのと変わらない、と考える。直情傾向の人間とは致命的に折り合いが悪い性格だった。

「フードのふたりは気にしておくに越したことはない」

そう閉めると、背後から多数の声が近づいてきた。ミコトをはじめ、シンシアから見知った女性たちだった。彼女たちの相手は補給の仕事で出てしまっているの、先に出かけた者以外が集まっているようだった。

圧倒的少数に部類されるグループに属するテツは、非常に居心地が悪かった。女性の集団の中で、ひとり男性がぼつねん、と取り残されるのを喜べるほど、彼の性格は高機能ではなかった。

「あたしたちは出かけるけど、もちろんテツも来るわよね？」

シンシアは既定事項を確認するようにいった。

「いや、ぼくは」

「来るわよね？」「ね？」「ですね」四方八方から声に取り囲まれる。これでは自由意志も何もあったものではない。民主主義社会を尊重する者としては心苦しい限りだったが、みなに歩調を合わせるのもまた多数決の原則に沿うものだと割り切るしかなさそうだった。

渋々承諾すると、女性陣から歓声が上がった。「女ばかりだと花がないもんね」と誰かが口にする。テツは花だとしても、ハエトリソウやウツボカズラの類に違いなかった。

「金のことなら心配しないで。ポールからいくらか貰っているし。この間の贈り物のお返しもさせて欲しいから」

蛇がイヴを誘惑したときのような目で捕らえられる。シンシアのピンクオーラにやられたテツは、なぜだか背中に寒気が走った。もはや、捕食されるのは確実なのだろうか。

「贈り物って何ですか？」アリアはテツではなく、ミコトにたずねていた。彼では答えてくれないとわかっていいるからだろう。少しずつ性格を掴んできたようだ。ミコトはつらつらと、初の戦で手に入れた褒賞を気前よくみなにプレゼントしたことを話した。それから嬉しそうに指輪をアリアに見せる。

物欲しそうな表情は隠しようがなかった。この手の話題には疎い唐変木であっても、少女に何か買ってやらねばならない空気は読めていた。それでもあえて反応せずに、黙々と歩みを進める。

視界の端で、少女は心持ち落ち込んだ様子を見せた。周囲の女性陣から、非難めいた感情が向けられたが、そこはぐつと堪えた。少女との関係がはつきりしていないうちに、仲を深め過ぎるのは避けなかった。良心は鈍い疼きを訴えた。それに気づかないふりをして、いつもより背筋を伸ばしながら歩いた。

人通りは俄然増え続け、右へ左へと進む人間と押し合い圧し合いする様相を見せ始める。さすがにこの人混みにはうんざりする。貴金属類をすられないよう、ミコトに注意すると、「価値のあるもの

なんて、これくらいだしね」と右手の指輪を掲げてみせた。さすがに、指におさまっている指輪をするような神業を仕出かすスリがいるとは思えなかった。

中心街に近づく、露店の数は減り始め、代わりに店舗を構える店が増えてきた。店頭にはふたり以上の店員が見える。店舗もちの商人は、単独で行っている者が少ないようだった。

ひとつの店舗の面積はそれほど広くなく、中には詰め込めるだけの商品を並べているといった様子だ。店主と客が商談をしている。商品の値段は定額で決まっているのではなく、交渉次第では安くもなるようだった。

メインストリートは馬車が一台通れるかどうかの広さではあったが、この世界においては十分に広い方である。とはいっても、この場所以外の街を見たことがなかったので、比較しようにも、ポールの話を参考にするしかなかったが。

やがて先頭にいたシンシアたちが扉を開いて店に入った。蛇のしっぽよろしく続いて入店すると、そこは服を取り扱う店らしく、テツたちがまとっている質素な造りの服から、手の込んだものまで幅広く取り揃えてあった。中には、どうやら着ることができるのか、想像がつかないベールのような一枚布がある。外国人が和服を初めて見たときも、同じような感想を抱くに違いない。手を触れないように気をつけながら、テツはしみじみとシルクの輝きを眺めた。

店はテツたち一行が入り込んだせいで、少々窮屈になっていた。女性陣は目当ての品を探すのに忙しいらしく、周囲の状況は二の次らしかった。全く気になっていない。

店内は石造りで薄暗く、外に比べると過ごしやすかった。直射日光に晒されていないだけでずいぶんと体感温度は違っていた。石の壁に囲まれていると、それだけで冷たい印象を受ける。テツの生まれ故郷が木造建築主流だったせいかもしれない。石造りの家というのは新鮮な感覚だった。

見ると、アリアも一団に混じって笑顔を浮かべている。テツは満足気に頷いた。彼女なら、もう大丈夫だろう。傭兵団の女たちにも好意的に受け入れられているようだし、最年少ともあって、みなから妹のように可愛がられている。本人も満更でもなさそうである。

テツはどうかして、少女を自分の下から引き離そうと考えていた。彼女のためという表向きの理由もあるが、自身が人を導くような人間ではない、という自己評価がその根底にあった。むしろ自分の性格は、健全な状態に害を与えるものだとは自覚していた。

それをミコトは卑屈だとか自虐的だとか評価したが、テツにいわせれば事実を述べているに過ぎなかった。それは決してネガティブに考えた結果ではなく、己の精神を注意深く観察して解剖した結果である。しかも客観的に捉えたつもりだった。ミコトとの意見の相違は意外だというほかなく、なぜ認識にズレが生じたのか、彼には大いに疑問だった。

着せ替え人形もかくや、という勢いで遊ばれているアリアと目が合った。じつと眺めていると、少女は羞恥に顔を赤くして視界から隠れてしまった。

苦笑してミコトに近づく。「楽しんでるようで何よりだね」もしも妹がいたら、きつとこのような感じだったのだろう、とテツはあたたかい気持ちになった。

ミコトは意外なものでも見たかのように目を丸くした。なんとも失礼な人だ。口に出さないまでも、へそを曲げた様子が伝わったのか、彼女はわざとらしい咳払いをした。

「なんか驚きだよ。テツは人見知りだから、出会って間もないリアにそんな顔見せるとは思わなかった」

「そんな顔？」

右手で頬を軽くもんでみる。いつもと変わらない感触しか返してこない。しばらく手を動かして、顔の筋肉も骨格も、普段と変りないことを確認する。生まれてからこの方、自分の顔に大した感想を抱いたことはなかった。今日も今日とて、何ひとつ変わらない、面白みのない自分の顔があった。

暗黒物質を前にした科学者のような顔をするテツをミコトは微笑ましく見守っていた。この姉貴分ともいえる女性は、ときおりこんな顔をするから始末に負えない。全てを包み込む包容力の前では、彼のねじ曲がった根性もかたなしだった。

とつさに剣の柄に伸びそうになる右手を自制する。自分でも情けない限りだったが、動揺するたびに剣を求めるのは異常かもしれない。どこか致命的な部分が崩れ落ち始めたのではないか、と漠然とした不安がよぎった。

内心の不安を悟られないように、意識して苦笑いの表情を作る。ミコトはからかってテツの頬をつついた。彼女の指は、記憶にあるものより、少し荒れているようだった。毎日の野宿と、急激に変化した生活の影響かもしれない。それでも、なめらかな指先の感触は

彼の奥底にある炎を揺らめかせた。

そのまま彼女の手を握りしめたい衝動に駆られる。それをいつも引き止めるのは、彼女には恋人がいるのだという事実と、遠き日に捨てた恋心の残滓だった。世界間の移動を経験させられ、彼女の恋人はすでに手の届かない場所にいる。激動した状況は忘れようとしていた古傷を疼かせるものだった。

長い間押さえつけていた暗い感情が目を覚ますのを感じた。それはテツがひた隠しにしてきた感情だった。このために鉄仮面が顔面に張り付いたといってもいい。何としてでも、表に出すわけにはいかなかった腐りきった膿だ。正視に耐えないそれは、長いこと彼を苦しめてきた病でもあった。

彼女の側にいたいという感情と、これ以上近づいてはならないという相反した感情に苛まれる。鬱屈した想いを吐き出す術を彼は持ち合わせていなかった。それらは体内に溜まり、腐り落ちて淀んでいた。

我武者羅に剣に打ち込んだのは、その溜まりきった膿を吐き出すためだったのかもしれない。だが不幸なことに、剣はさらなる悪癖を彼にもたらすことになる。剣のきつさは、彼と彼でないものと乖離させた。その結果に訪れたのは、異常ともいえる思考形態だった。

自らの内に沈み込みそうになる意識を苦勞して引き上げる。目線を戻すと、ミコトと視線がかち合った。そこに不自然さは見当たらない。表面上は何事もなくいられたようだ。テツはほっと安堵の息をつく。

シンシアたちは服を選び、合ったサイズのない者はオーダーメイドで作られることになった。現代のように大量生産品ではないので、サイズを取り揃えることはできないのだ。

寸法を測って貰っている者がいる中で、アリアはちょうどいいサイズがあつたらしく、いつの間にかボロ布の服から着替えていた。シンプルながらも似合っている。膝下まであるスカートは彼女の清楚感に合っていたし、金色の髪とコントラストするかのような落着いた色調で全体がまとめられている。丈夫そうな生地で作られていたので、少々荒っぽい動きをしても平気そうだった。これならば、この城下の町娘といっても通じるはずだ。

褒めて欲しそうな期待の目を向けてくるアリアを少々煩わしく思い、そんな内心を見透かされたのか、背後からは冷気が漂ってきた。そこにいるであろう女性の制裁は末恐ろしくもあつたが、なんとかいい切り抜け方法を考えつく。

「残念だけど、ぼくには持ちあわせがないんだ。君に買ってやりたいのはやまやまなんだけど……」

「それなら問題ないよ。あたしが買ってやるんだからね！」

シンシアは気前のいい声を上げた。

「そんなわけにはいきませんよ。悪いですし」

「ええ、なんだい？ あんた、この子の面倒は見たくないとかいってるそうじゃないかい。なら、あたしがこの子に何を買ってあげようが関係ないだろう？」

意地の悪い笑顔を浮かべる彼女に気圧され、テツは声に詰まった。確かにいう通りだった。あまり仲を深めるのはよくないと突っぱねているのは彼女の方だ。なのに、あれこれと文句をいうのは筋違いである。

ぐぬぬ、と返答に窮する彼を、アリアは不安げにうかがっている。彼女には不干涉を貫くと決めていたはずなのに、早くも瓦解しかけているのは予想外だった。そもそも、本当に彼女を邪魔に思っていたならば無視するのが遠見テツという人間である。いちいち表情を盗み見たり、機嫌をとったりするのは、気にかけている証拠にほかならない。

テツは己の負けを認めた。何に対して勝負を挑んでいたのか、自身にさえわかっていなかったとしても。

視線をしばらく泳がせたあと、彼は渋々といった表情で、

「アリア、シンシアさんにちゃんとお礼をいうんだぞ」

「——はいっ」

途端にぴよこぴよこ跳ね回る少女を見ると、自分の葛藤が馬鹿らしくなってくる。どんな懸念があるにせよ、年齢相応の顔を見せてくれることは喜ぶべきだった。

「らしくないね」ミコトはそういいながらも嬉しそうで、「いい変化なんだろうけど」腕を組みながらテツの隣に並んだ。

アリアは女性たちに囲まれてずいぶんと愛でられている。少し豪快なところがある傭兵団の女性たちであるが、可愛いものを好むの

は普遍的真理であるらしかった。

離れた位置で見守っていたテツは、ふと隣に佇む姿を確認しながらいった。

「ミコト姉さんは、服の新調しないんですか？」

「わたしは遠慮したよ。道着もまだ着れないことはないし、この服も動きやすいからね」

見た目は、麻袋から首と腕が生えた程度だった。しかしながら、このテツたちが着ている服は、見た目よりも機能性を考慮して考えた場合、そう捨てたものではなかった。彼自身も、いまのままの服装で十分だと思っている。

「見た目よりも実用性重視ですか」

「そうなるかな。あるいは、おしゃれに疎いともいう」

自嘲気味にミコトは笑った。

まだこちらの世界に飛ばされてくる前、テツが覚えている彼女の姿といえば、もっぱら道着の姿だ。練習の際は、みながその格好であるし、練習後はすぐに帰宅の途についていた彼は、大学生であるこの女性の普段着をあまり目にすることがない。たまに夕食を共にした際は、タンクトップにショートパンツという目のやりどころに困る服装だったのを覚えている。

思春期にしては枯れていると自覚するテツでさえ赤面させるのだから、彼女の魅力はいうまでもない。健康的な美しさは、着飾らな

い方がかえって彼女の魅力を引き立てていた。しかしながら、花も恥らう大学の輩であるミコトが、女性雑誌に載っているようなコーデインイトで通学している様子を想像できなかった。

「姉さんは服装に頼らなくても、そのまま十二分に勝負できると思いますよ」

テツが慰めるためにお世辞をいつているのではないとわかると、当人は照れ隠しに彼の背中をバシバシ叩いた。

「嬉しいことってくれるね。お姉ちゃんはいいい後輩をもったよ。できればさ、もっと婉曲的じゃない褒め方はない？ 恥ずかしがらないでいいからさ、さ」

この人はすぐ調子に乗るんだから、と内心で呆れながら「ミコト姉さんは綺麗ですよ、すごく」と思ったことを素直に述べた。きざったらしい台詞だった。自分でも、なぜこんな言葉がすらすら出てくるのか不思議に思う。きっと、彼女以外にはこうもいかにないに違いない。

ミコトは非常に上機嫌だった。顔の表面は、毛細血管が頑張っているのか、ゆでダコのようなのである。素直に褒められることに慣れていないのだ。道場では、どちらかといえば「格好いい」「凛々しい」部類で、女性からも人気があつた彼女である。

一方で、テツには腑に落ちないことがあつた。彼女が付き合っている男性のことを思い出す。実際に顔を合わせたことはないものの、悪い噂は聞いたことがなかった。むしろ好青年であると耳にしたことがある。その彼ならば、ミコトを褒めても不思議ではないと思うのだが。

だらしなく破顔する彼女に、その疑問を問うのは憚られた。それは、姿の見えぬ相手に対する幼稚な嫉妬心からであり、己の不甲斐なさを隠そうとする虚栄心からでもあった。それに、咲いた向日葵に影をさすのは、テツの望むところではなかった。

なので、「姉さんはまるでオオサンショウウオみたいに可愛いですよ」と追加して褒めると、一転して憤怒の表情で足を踏まれてしまった。なぜ機嫌を損ねたのかわかっていない彼は、涙目でキルゾーンから脱出したのだった。

「な、なんで……？」

純粹に褒めたつもりなのである。両生類好きの彼からすれば。

第20話

その後、一行は様々な店先を冷やかして回った。結構な距離を歩いているはずなのに、疲れを微塵も見せない女性陣はさすがであった。テツはいえ、人の多さに酔ってしまつて疲労気味だ。体力的というよりは、精神的な面の疲労だった。

途中から、仕事を終えたポールが合流することになった。いままで四面楚歌な状態だった男一匹は、救世主でも見つけたかのように救われた顔をした。

細かいところに気づくポールは、テツとアリアの疲労具合を見て、酒場で休むことを提案した。待ちに待ったお誘いを断るはずがない。テツはさりげなく疲労困憊具合を主張し、早く腰を下ろしたい旨を伝える。

事実、アリアも少々疲れているようだったので、みなも反対する様子はなかった。

傭兵団の行きつけの酒場に行くには来た道を戻らなければならなかったが、やっと休めるのだと思うと苦ではなかった。

目的の店は、人通りの多い好条件の道沿いにあった。一見してわかるように、フォークとナイフが描かれた木のプレートが掲げられている。

年季の入った木製の扉を開けて中に入る。途端に、香ばしい香りが漂ってきた。久しく感じていなかった食欲が刺激されるのを覚える。テツの内蔵は、目の前のうまそうな品々に早速反応を示しはじ

めた。他人の飯であつてもお構いなしに食い意地をはる自分の腹には、苦笑するしかなかった。

店内は広々としていて、大人数が集つていてもまだ余裕があつた。清潔とはいえないとしても、気になる不潔さはなかった。木目が薄くなつた長テーブルが三列並んでいて、客はめいめいに向い合つて食事をしていた。まだ昼間だというのに、大半の人間が顔を赤くしている。アルコール臭がきついのか、アリアは軽く顔を顰めていた。

傭兵団の面々は結構な人数だったので、みなが一緒に座れる場所を探すものの、ちょうどいいところが見当たらない。

シンシアはすでに座っている男たちに詰めてくれるよう頼んだ。気分よく飲み食いしていた男たちは、調子を崩されて嫌な顔をしたが、彼女の背後に控えるポールを見るや、只者ではないと直感して席を譲った。尋常でない何かを感じ取つたらしい。ポールの面持ち、傭兵団の中では優男な部類に属していた。あくまで、傭兵団の基準でいうところの。素人からすれば、武装していることからしても、逆らわない方が無難であるのは想像に難しくない。

少し誇らしげなシンシアに寄り添われ、気分上々の男は「さあ、好きなもの頼んでいいぞ」と太っ腹にいい放った。

とはいふものの、メニューもなければ注文の手順も知らないテツたちは困り果てた。仕方なしに、慣れているだろうポールたちが頼むのをまつて、同じものをさりげなく注文する。「同じのでもいいのか？」怪訝な顔をする彼には、自分たちはこういった場所で食事したことがないのだといい訳をした。それにあまり詮索しないで切り上げてくれたのはありがたかった。

隣に座った少女は、そわそわと落ち着きない様子で店内に視線を走らせていた。そんなことをしてもUFOは現れないぞ、と忠告してやるつもりで落ち着かせるのだが、帰ってくる返答は口ばかりで効果はなかった。

テツも年甲斐なく胸が踊っていた。大勢で食べる食事はすでに何度も経験している。それでも、こうして趣のある店で食べるのは初めてのことだ。料理が運ばれてくるのを待っている時間さえ、味のあることのように思えた。

大量の料理を運んできた手伝いらしき若い女性に感心しながら、並べられていく品々に目をやった。香ばしい香りのするチキンステーキに、大きめにカットされた野菜の入ったシチュー、他には果物やパンなどである。女性陣がそれぞれのコップにワインを注いで周り、食事は始められた。

のどを潤すために、ワインを少し口に含む。こちらに来てからというものの、飲み物はもっぱら水かワインだった。はじめは戸惑ったものだが、旅の途中では生水は危険なため、どうしてもワイン中心になってしまう。いまでは慣れた手つきで芳醇な香りを楽しむまでになっていた。

メインディッシュであるチキンは、現代のものとはではないが、とても味に深みがあって美味だった。

隣のアリアはおぼつかない手つきで肉を切り分け、口にした。すると、たつぷり10秒はふるふる震えて感動したあと、「おいひいです」と昇天しそうな顔でいった。彼女は貧しい農村暮らしだったので、このような食事は初体験だった。それはいままで生きてきた中で、食べたことがないようなおいしさだったのだらう。

「確かに、うまいな」

自身も十分満足しているので、テツは普段より優しげな調子だった。

「はいっ、とってもおいしいです。こんなおいしいものが存在してたなんてびっくりです」

「大げさなやつだな」

苦笑して、パンに手を伸ばす。それを半分に分けると、一方をアリアに渡してやった。彼女は礼をいって受け取ると、早速口に頬張って、

「な……！」

鶏が金の卵を産む場面に出くわしたみたいにあんぐりと口を開けた。

「て、テツさま。このパン、とてもフカフカでモチモチしていますっ」

「うん。確かに、柔らかい」

まだ焼きあげてからそんなに時間が経っていないのだろう。パン生地には、それが受けた火のあたたかみが残っていた。旅の途中で口にするパンといえば、保存の効く石のようなパンだったから、天と地ほどの差があるように思えた。感動に打ちひしがれるアリアのリアクションも大げさ過ぎることもない。

人間の三大欲求に数えられているだけあって、食事に関するこだわりようは古今東西変わらない。こんなにもうまい食事にありつけるのだったら、また明日から頑張ってみようかな、と思えてくるのだから不思議である。

眼の色を変えて料理を貪り、あらかた満足すると会話する余裕が生まれてくる。向かい側に座っているミコトも満足そうにお腹をなでていた。テツに見られているのに気づくと、少し怒った顔でたしなめた。

「レディのあられもない姿を見るんじゃないよ、少年」

それから右手を伸ばして、テツの口元をぬぐった。「汚しちゃつて。子供なんだから」してやったり、という顔をしている。恥ずかしい場面を見られた仕返しのもりなのだろうか。姉さんは一人相撲をしているよ、とはいいづらく、彼としては愛想笑いするしかなかった。

「——ん？ あらら、アリアをよく見ていなきや駄目じゃないのよ」

視線を右にずらしたミコトはいった。

テツがつられて目をやると、いつの間にか顔を赤くしたアリアがテーブルに突っぱしていた。目を回して幸せそうな顔をしている。口からはよだれが垂れてしまっていて、とてもじゃないが殿方には見せられない醜態だった。

手元にあったコップの中身は空になっていることから、ワインを

急に飲み過ぎたせいで酔いが回ってしまったようだ。幼いうちからワインを嗜む習慣があるらしいが、農村育ちのアリアは酒に強いわけではなかった。いつもならば、そのことに気を配って飲んでいただ。だが今日はごちそうを前にしたせい、そのたがが外れてしまったらしい。

軽く肩を揺ると、「むー」と未確認生物のような奇妙な鳴き声をあげた。ちよつとやそつとでは起きる気配はない。これで相手が大人の男だったら、そのまま放っておくところであるテツも、この幼い少女を酒場のテーブルに捨て置くほど冷血漢ではなかった。

仕方なしに、傭兵団の荷馬車に連れて帰ろうと腰を上げると、向かいのミコトが手で制した。

「テツはまだ楽しんでいなよ。わたしがアリアを寝かせてくるから」

「いいんですか？」

「十分満足したしね。それに、乙女にはごちそうを前にしても、我慢しなきゃならないときがあるのさ。哀しいかな、女に産まれた宿命よ」

「ダイエットですか？ そんなに太ってないじゃないですか」

「そこお！ 名誉毀損で訴えるぞ、ああん！？」

般若もかくやという強面の前には、テツもだんまりを決め込むしかなかった。

相手を沈黙させて満足したミコトは、うんうんと頷いてテツたちの側に回った。それに気づいたシンシアに事情を説明すると、彼女は「仕方のない子だね」といいつも柔らかな微笑を浮かべた。

ぬいぐるみでも背負うかのように、体重を感じさせない調子でアリアを背負ったミコトは、どこか悲痛な表情を浮かべた。

「軽過ぎるくらいだね。大したもの食べてなかったのかな」

「……」

その貧しい村を襲ったのは自分たちである。彼らの親に文句などいえるはずがなかった。テツは二元論では説明できない問題を前にしていた。社会の問題というのは、いつだって簡単なものではない。大きな歪の前では、遠見テツという人間は矮小な存在でしかないのだ。

せめて少女にはよくしてやりたい、と彼は思った。それは偽善だろうな、とも。

「じゃあ」と口の中で言葉を転がしてミコトは店から出ていった。それを見送りながら、若干色を失った料理を口にする。最初よりも味気なく感じたのは錯覚ではないだろう。

「ままならないな……」

「そうだね。その通りだ。でもって、あんたにはできることなんてひとつもない」

横から滑り込んできた言葉にテツは返事をしなかった。代わりに

コップに残っていたワインを一気にのどへと流し込む。ブドウの芳醇な香りは、むかついた胸の煩わしさを流し去ってくれる気がした。

ボトルを手にとったシンシアが、赤紫色の流れをコップに作った。半目だけ開けてその流れを追っていたテツは、ともすれば漆黒とも取れる胡乱な濁流にのみ込まれる自分を幻想した。

「あんたってウジウジと悩んでばかりだね」

「それが性分なんですよ」

シンシアのいうことはもっともだった。いつだって悩まずにはいられない。それが無益でしかないとわかっていても、考えるのをやめるのは、遠見テツが死んだときだけだ。

ワインの水面に映り込んだ自分の顔は、ひどく不景気なものだった。面白くない落書きでも見せられたかのような気分になったテツは、アルコールの熱で気分を紛らわかそうと試みる。

彼の正面には、いつの間にかシンシアとポールが夫婦よろしく肩を並べていた。「まずそんな飲みっぷりだな」憤慨した表情でポールがいう。

「ポールのおごりだからいいんだよ……」

自分が払うわけではないのだし、と湯だった頭で内心呟く。

「おまえって、酒が入ると人相が悪くなるのな」

「本当？ そんなつもりはないんだけど」

頬を触ると、手のひらの冷たさが心地いい。本格的に酔いが回ってきたらしかった。このまま潰れて介抱されるなんて無様を晒したくないテツは、名残惜しげにワインの入ったコップを置いた。

ポールは眉間にしわを寄せて、

「そこでやめるのがどうしようもないな。そのまま潰れた方が楽だったろうに……」

「二日酔いは勘弁して貰いたいんでね」

「全く、難儀な性格してるよ、おまえ。飄々としているかと思えばそうでもないし、悩んで動けなくなるかと思えば自己完結しちゃうようだし。はたから見ると冷や冷やするぜ」

シンシアは「そうそう」と追従して同意を示す。

「心配して貰えるのはありがたいね」

傭兵団の良心ともいえるポールたちがいなかったら、いまごろ脱走の手段でも考えていたかもしれない。その場合は、失敗したら死は免れなかっただろう。あの団長が脱走行為を見逃すとは到底思えない。

ああ、何を悲観しているのだろうか。テツは自身の不甲斐なさに虫唾が走った。こうして心配してくれる仲間がいるのは幸福なことだ。ひとりきりで完結しても、それは大した答えではない。視野の狭まった独りよがりな答えだ。

アリアのことだって、テツひとりで考えこむ必要はないのだ。ミコトが、シンシアが、女性たちが、少女の心の隙間を埋めてくれることだろう。

ふたりの顔をまともに見られなくなった彼は、手持ち無沙汰の右手を料理に向かわせる。けれどもその皿は空になっていた。

タイミングよく、隣から料理が差し出される。サツキだった。わたしのでよければ、と控えめにすすめられる。それに礼をいって、フォークに刺した鶏肉を口に放り込んだ。

「おいしいよ」

テツの言葉に、サツキは紫陽花のような儚げな微笑で答えた。彼女にも、気を使って貰えているのを自覚した。なるほど、料理の最高のスパイスは、人との団欒であるわけだ。陳腐な台詞だと思っていたが、これがなかなか真理であるようだった。

「相談できる人間は、周囲に大勢いるってことね」

シンシアはウインクしてみせた。もう少女とはいえない年齢のはずなのに、こう子供っぽい仕草がやけに似合っていた。

「まあ、昔話になるけどさ、あたしもしみったれた村の出身だね。そりゃあもう、ひどいもんだった。寒さで死ぬわ、飢えて死ぬわ。自分の番はいつ回ってくるんだらうって毎日考えてた。それでさ、うちの馬鹿親は金がないから妹を売るとかいいい出しゃがったんだ。確かにその年は不作で、家族の食うぶんは足りなかった。それでもみんなで協力し合えばどうにかなるはずだった」

先を聞くつもりはあるかい、と目がいつていたので、テツは頷いて話を促した。

「だから腹が立ったあたしはいつてやったのさ。『だったらあたしを売りなよ！ その金で食べ物を買えばいいじゃないか』ってね。なんやかんやあって、あたしは売られたわけだけど、妹を売った金で腹を満たすよりはよっぽどまだと思ったね。その後は録でもない未来があるんだろうとは思ってたけど、後悔はしてなかったよ」

彼女は妹を犠牲にしなかった己を誇っているようだった。自分ならはどうしただろうかと話を聞きながらテツは思う。きっと妹が売られたあとで、パンを胃に収めながら、表向きにでも後悔するに違いなかった。

ちらり、と横にいるポールに目をやりながらシンシアは続けた。

「売られる途中の馬車を傭兵団が襲撃したんだ。すでに諦めかけてたあたしには救いだった。もちろん、こいつらは人助けのためにやってきたんじゃないくて、商品の横取りが目的だった。もうどうにでもなれって諦めてた心が熱くなるのをそのとき感じたんだ。翻弄されるのはもう嫌だったね。あたしは自らを傭兵団に売り込んだ。そのままじゃ、同じように売られちゃうから必死だったさ。それで、あたしを身請けしてくれたのが、こいつだったのね」

普段より優しい雰囲気は、ポールへの愛情と信頼感を感じさせた。あまり思い出したくはない過去だろうに、気楽な調子で話してくれたのは、アリアのことを思っただろう。少女の境遇は悲惨なものであったが、この時代の人間は、誰もが似た経験をしている。少女ひとり、この世界の悪を一身に受けたような錯覚に陥っていたテツは、いまさらながらに気づいたのであった。

「傭兵団に囲われているから不幸だなんて思わないことだね。ここに来て食事が満足に取れるようになったって喜んでいる娘もいるくらいだから」

この物騒な集団ではあるが、きちんと全員に食料が行き渡るようにされていた。団員が優先的に与えられるものの、全く飲まず食わずという事態は起こらなかった。それは、末端の人間にまで気を配られていることを示す。この世界の常識ではありえないことだった。

だが、とテツは人差し指の腹をかんだ。アリアの場合は状況が異なる。彼女の父親は団長に、母親はテツに殺されているのだ。

「あんたのいいたいこともわかるよ。でもね、そんなに簡単なものじゃないんだよ。親と子の関係も。人間同士の関係も」

アリアの家族が本当に和気あいあいとしていたならば、状況は異なっていたかもしれない。彼女の問題の根幹にも、他人が安々と立ち入れぬ境界がある。部外者であるテツには、それを想像することしかできないのだ。

「得難いものなのに、手に入れると煩いの種となる、か」

世界が変わっても、人間は変わらない。ならばひとつだけはつきりしたことがある。どれだけ頭を悩ませても、自分だけでは問題を解決できないということだ。遠見テツに必要なのは、シンシアたちの助言なのだった。

第21話

草切キヨウイチは、フード姿のふたりに先導されながら、人が行き交う大路を危なげに進んでいた。隣を歩く不安そうな恋人を励ますために、つないでいる手をしっかりと握り返す。握られる手の感触に気づいたスイは、彼の心遣いに、はにかんで返した。

「その場所は遠いのかい？」

すでに歩き始めてから結構な時間が経つ。行き先の詳細をきちんと聞いておくべきだった、とキヨウイチは後悔していた。街の中心部からは外れ、外周部のうらぶれた位置に差し掛かるうとしていた。

「もう少しですね。ご心配なさいでください」

栗色の前髪をのぞかせた少女が、かたわらの女性に「そうですね？」と話しかけると、恭しく女性は頷いた。

その言葉を信じるしかない。彼女たちについて行くことしかできない自分たちは、否が応でも異邦人であることを認識させられる。キヨウイチの心中には常に望郷の念が巣食っていた。あの悪魔のとき男に捕まってから、どうにかして元の世界に帰れないかと諦めていなかった。

元の世界——なんて馬鹿馬鹿しい言葉だろうか。彼は皮肉げに口元を歪ませた。自宅の蔵が、あんな危険地帯だとは思ってもみなかった。まさか人間を飲み込む空間の渦を発生させるとは。もしも事前にわかっていたら、家族を説得して引越していただろうに。

せめてもの幸運だったのは、スイと一緒に飛ばされたことだろう。彼女がひとり、この世界に放り出された可能性を考えるとぞっとした。または、自分だけの場合も同じことだった。

当初、この異世界に飛ばされた道場の仲間、すでに半分にまで減っていた。特に男子は戦場に駆り出され、ときには団長に逆らって奴隷として売られた。許されざることだ。脳裏に蘇る仲間たちの顔を思い出すたびに、彼は腸が煮えくり返る思いになった。

力さえ失われていなければ――鈍重になった身体を恨めしく思った。そうであれば、あのような大男であつても遅れは取らないというのに。いまの身体は、筋力も瞬発力も回復力も、以前と比べものにならない。スポーツカーから原付バイクに弱体化したようなものだ。

おかげで自分たちは、団長にいいように扱われ、略奪という唾棄すべき行為に加担させられた。逃げ惑う村人たちの姿が、いまだに目に焼き付いて離れなかった。

「ここです」

考え事をしている間に、目的の場所についたようだった。人通りは少なくなっており、一見して何の店だかわからない。現地の人間であつても、興味本位で扉をくぐられないオーラが出ていた。

尾行がないか確認したあと、4人は緊張した様子で足を踏み入れた。中は薄暗く、陰気な顔をした男たちが酒をあおいでいた。突然の乱入者に気分を害された表情を浮かべた者がいたが、すぐに興味をなくして視線を外した。

握られている手の力が強まった。スイは顔を強ばらせていた。キョウイチとしても、このようなアウトローな酒場に長居したいとは思わなかった。

事の発端は、フードの女性ふたりによるものだった。少女の方はヴァレンティア・パツヘル、背の高い女性はヘレンという彼女の従者である。パツヘルという家名に聞き覚えがあつたキョウイチは、少女が先の戦で敵方だった領主の娘であることを知って納得した。

彼女の家は、当主が戦死したあと嫡男がいなかったこともあり家臣団が対立し、領主の娘は生命まで狙われる事態に陥った。そのため命からがら脱出し、かの村で匿われていたところを傭兵団に襲われたのだった。

恵まれない境遇に陥っているキョウイチは、不運続きの彼女たちにひどく仲間意識を持ったのだった。彼女たちを助けたことに後悔はなかった。懸念だった団長へのいい訳も、テツが同じような少女を囲ったことから、彼もなし崩し的にふたりを自分の下に置くことができた。

ティア————少女の愛称だ————は、傭兵団からの脱出を考えているらしく、今回の件も、協力を取り付けるためのものだった。

セブンス傭兵団は強力な一団として名を馳せていて、そこからの脱走を手引きしてくれるような協力者は殆どいなかった。だからこうして、アンダーグラウンドの人間を頼るしかないのだ。

この街から出るには、正面の正門から出る他なく、当然衛兵がいるのでキョウイチたちだけでは外に出られない。使用人、奴隷の脱

走を警戒している衛兵は、みすばらしい格好の彼らを見過ごしたりはしないのだ。

運良く街の外に出られたとしても、潜伏先のあてがなければ追っ手に捕まるだけだ。着の身着のままで逃げ切れるほど、この世界は甘くない。途中には、野盗が出没する危険な地域だって存在している。

つまり、脱走に必要なものは、街から出るための協力者と、安全な受け入れ先だった。

ティアは貴族の息女なので、こういった荒事の人脈に疎いかと思いきや、この街に知り合いがいるらしく、しかも脱走に手を貸してくれるかもしれないという。こうして願ってもみないチャンスが回ってきたキョウイチは、彼女たちに連れられ、協力者を探しにきたのである。

しばらく店内を見回していた少女は、目的の人物を見つけたらしく、顔をほころばせた。相手もキョウイチたちが店内に踏み入れた直後に気づいていたようで、驚きもせずにティアを迎い入れた。

男は中年で上背が高く、がっしりとした体格だった。白髪が混じった金髪はくすんでいたが、その眼光はまだまだ力強さを感じさせるものだった。

「こちらはダグラス。以前、我が家で庭師を務めていた者です」

少女が敬語で話す相手を怪訝そうにしながらも、男は「ダグラスと申します」と丁寧な言葉づかいで名乗った。

キヨウイチとスイも名乗り返す。協力者になるかもしれない相手なので、なるべく好印象を与えた方が都合がいい。こちらもあくまで下手に出ることにした。

一息ついた一行は店の奥の席に腰を下ろし、ダグラスがワインを頼んだ声を最後に沈黙した。だがそれは気まずい沈黙ではなく、彼が感極まって声を詰まらせていることによりもたらされていた。

やっとの思いで口を開いたダグラスは、先の事件を聞いてとても心配していたことを述べた。当主は戦死し、領内が混乱をきたしていることは、すでに周知の事実となっているらしい。また、領主の一人娘が行方不明になっていることも。

ご無事で何よりでございます、と頭をたれるダグラスに、ティアは複雑な表情で答えた。父親は戦死し、母親は生きているかさえも知れない。自身も奴隷の身に落ちたことを告げる。

「この方々は、わたくしを助けてくださったのです」

「それは……、なんとお礼を申し上げたらよいか。お嬢様を助けていただき、ありがとうございます」

キヨウイチは大層な感謝の言葉にたじたじになってしまった。ティアを貴族の令嬢だと知って助けたわけでもないし、あとから正体を告げられたときは驚いたものだった。

若干気まずい思いをしていると、目の前にワインの入った金属のグラスが置かれた。むすつとした表情の男は慣れた手つきで並べ終えると、一言も発しないで踵を返した。恐らくこの店のマスターだろう。他に店員が見えないことから違いあるまい。

ああ見えて気の利く男なんですよ、とフォローを入れたダグラスは、再開を祝して乾杯といった。グラスを掲げて答える。

のどを潤して話の準備を整えたティアは、ダグラスとのいきさつを話し始めた。

もともとパツヘル家の庭師だったダグラスは、腕のよさを買われて、ティアが幼いころから仕事をしていたそうだ。だがあるとき館の美術品が何者かに壊されており、その嫌疑を一番にかけられてしまったのが彼だった。確かな証拠はないまま、誰かが責任を取らねばならず、孤立無援だった彼を救ったのがまだ幼いティアだった。庭師として真面目に働いていた姿を知る彼女は、幼心に彼の無実を信じており、父親を説得してみせたのだった。さすがに館に居づらくなった彼は庭師を辞したが、新たな働き先を融通して貰ったりと、ティアに対する恩義は並々ならぬものを感じているらしかった。

「よもや、このような形で再会するとは思いませんでした」

ティアに同情的な様子であるから、協力も取り付けられそうだった。彼女は脱走の話をダグラスに告げる。あなたの他に頼るべき人はいないので、どうか力を貸して欲しいと懇願する。

少し考える素振りをしたダグラスは、難しい表情を融解させてから、頷いた。

その様子に喜ぶティアとヘレン。ティアは満面の笑みを送ってきたので、キョウイチもほっと一息つきながら笑って返した。

これで傭兵団から抜け出す手立てができた。望まぬ殺しや略奪が

ら手を洗うことができる。そして何より、元の世界に帰る手段を探すことができるのだ。

奴隷となっている間、キョウイチたちは自らの出自をあまり話さなかった。それは目立たないための手段であるし、不自然に思われないためでもあった。幸運にも、即興の作り話で疑われなかったことから、傭兵団の中では、出自はあまり詮索されないようだった。

いままでは生きるだけでも精一杯だった。元の世界への帰還法など調べる暇さえなかった。だが晴れて自由の身となれば、少なくとも行動を起こすことができる。何もできない現状よりは、遙かにましであろう。

スイと笑みを交わしていると、ダグラスは聞き逃さない一言をいった。

「4人ぶんの手配をしなければなりませんので、少々時間をいただくことになりますが」

「ちょ、ちょっと待ってください。おれたちの他にも仲間がいるんです」

それを聞いたダグラスは、これ以上ともなると発見されやすくなるし、秘密裏に送り出せない旨を説明した。

キョウイチは落胆した。これではみなで逃げ出せないではないか。まさか姉や道場の仲間を置き去りにして逃げ出すわけにもいくまい。どうする、と齒を軋ませて思案する。

その様子を不憫に思ったのか、「あとひとりならば、あるいは」

とダグラスは付け足した。

真っ先に浮かんだ顔は姉であつた。それから、テツやみな顔が浮かんできては罪悪感に襲われた。選べというのか、自分に。容易ではない選択だ。誰を選んでも、正解であるはずはないのだ。

恋人の苦渋を見て取ったのか、慰めるようにスイはいう。

「テツがいつてただけど、団長はよっぽどのことがない限り、道場のみなを殺すはずがないって。普通の奴隷よりも利用価値が高いからだっていつてたわ」

「そうなのか……？」

炊事もさせられるし、簡単な護衛にもできる。また、相手は子供だ、女だといって油断する。大和の人間は、実年齢よりも幼く見えるらしいから、奇襲を狙うにはうってつけの人種だった。

ならば、残された仲間がただちに殺されることはないとみていいのだろ。しかしそれでも、彼らを残して逃げることに変わりなく、納得できる選択とは到底いえなかった。

「あの男……」

ティアの従者であるヘレンは、険しい表情で口を開いた。そこには、警戒心がむき出しにされた響きがある。

「キョウイチ様のご友人を悪くいうのは心苦しいのですが、あの男——幼い少女をたぶらかす男は信用なりません。先の村でも、彼が一番精力的に動いていたように見受けられました」

従者と同意権なのか、ティアはしきりに頷いた。

幼なじみを悪くいわれたスイは、あからさまに気分を害したようだったが、キヨウイチは彼女たちの意見を全て否定することはできなかった。テツに対する疑念は、日に日に大きくなっていったからだ。それはすなわち、殺しを楽しんでいるのではないか、という疑念だった。

先の戦でも、彼は多くの敵を屠っていた。それは仕方がないとしても、まるで後悔を感じさせない様子は不気味ですらあった。決定的なのは略奪時のことだ。不可抗力とはいえ、罪もない村人の女性を射殺したのだ。自分であつたら立ち直れないかもしれない。それなのに、遺体の埋葬を済ませた、それだけで何事もないような顔をして戻ってきた。しかもその女性の娘を近くに置いている。キヨウイチには考えられないことだった。

どこか重要な部分で自分たちと異なっているのではないか。そんな思いが沸き上がってくる。

そして、認めたくはなかったが、テツに対して嫉妬していることも事実だった。

こちらの世界において、能力を使えなくなった者は例外なく弱体化した。キヨウイチもスイも同様である。特に姉のミコトは能力の恩恵を多大に受けていたので、その消失による変化に、しばらく体調をおかしくしていたほどであった。彼女は頑なにそれを隠しているようだったが。

唯一の例外であるのがテツだった。彼は元から能力を授かってい

なかった。この超重力に投げ込まれたような弱体化とは無縁だった。そのため、早くから中心的になって活動し、傭兵団の面々からも認められるようになった。あのテツがだ。道場では、変人として扱われていた幼なじみがだ。

最近では、恋人のスイでさえも、彼を頼るようになっていた。初の戦のあと、傷心しているであろう彼女を探しに出たキヨウイチは、テツと真剣に言葉を交わすスイを見つけた。色恋といった話ではないことは明らかだったが、自分が頼りないからなのかと思わずにはいられなかった。

苦い記憶だ。心配そうに覗き込んでくるスイを手で制し、キヨウイチは決心して口を開いた。

「なら、あとひとり、おれの姉さんに。姉さんは秘密を漏らすような真似はしない。それは断言できる」

「わかりましたわ。ダグラス、わたくしたち4人と、キヨウイチ様の姉君、我らの手伝いをお願いできるかしら」

その言葉を聞いたダグラスは、深々と礼をして、了解の意を示した。

あとで姉に話さなければならない。キヨウイチは満足した表情で計画を練る彼らを尻目に思った。事情を話し、決して口外しないように。だが、懸念事項もあった。その姉は、テツを非常に気にかけていることだ。愛情といってもいいかもしれない。

かつて姉がテツではなく、同年代の恋人を連れてきたときは驚いたものだ。キヨウイチはてっきり、姉がもしも恋人をつくるならば、

自分の幼なじみだろうと思っていたからだ。それは普段の仲のよさを見ていれば思いつくことであつたし、姉のテツを見る視線には、弟の友人というだけでない感情が秘められていたのを感じていた。

一時期を境に、微妙な距離感で交友していたようだが、この世界に飛ばされたのをきっかけに、再び距離は縮まったらしかった。

その姉が、テツを置いていくことを了承するだろうか。どう説明すべきか、キヨウイチは途方に暮れた。

苦虫をかみ潰したような口の中に、気を取り直すためのワインを流し込む。彼の意識は、テツとの少年時代へと遡っていった。

第22話

草切キヨウイチが遠見テツと出会ったのは、小学生の頃であった。初めての登校日、見慣れない教室では、新入生たちはこれから通うことになる学校に興味津々の様子だった。キヨウイチも例にもれず、知らない顔ばかりに囲まれている不安感と、これからの学校生活に胸を踊らせていた。

やがて担任が教室に現れ自己紹介を済ますと、キヨウイチたち新入生も自己紹介をすることになった。みなに注目されているという緊張感は、名前と顔を覚えるために四苦八苦しているうちに、どこか遠いところへと消え去っていた。

当たり障りない無難な挨拶を済ます。残念なことに、近くの席以外の者の名前は、初日だけでは殆ど記憶に残らなかった。おそらく他の子供も同じだろう。誰も彼も初めての顔合わせで、一気に何十人もの名前を覚えられるはずがなかった。だから、遠見テツの名前もあとになって知ることになる。

学校生活も始まってしばらく経つと、各々が仲のよいグループ同士で集まることになる。キヨウイチは席の近かった子供とよく遊んでいた。しかしながら、彼はいつも物足りなさを感じていた。運動は彼がいつも一番であった。勉強も周囲の子供が頭を悩ませる中、彼は大した労力もせずに習得していった。

どうしてみなは、あらゆることに手こずっているのだろう。幼心にキヨウイチは不思議でならなかった。もっと効率のいいやり方があるのに、そうしない。しかも親切心で教えてあげると、迷惑そうな顔をする。

彼は聡明であつたから、あまり出しゃばるとみなに敬遠されることを知っていた。だからトップの位置を占めつつも、威張ったりすることはしなかった。家が厳格であつたおかげかもしれない。いつの間にか、彼は教室の中心人物になつていた。

キョウイチくんは凄いいねえ、とよく褒められた。けれど彼は、その言葉に何の感慨も抱かなかつた。それは単に、「いちおくん」と書かれた値札の貼られた壺を見て、周囲の人間が「高価だねえ」「凄いいねえ」と感心しているようなものだ。相手も別に、彼の何を知っているわけでもない。表面上からしか人は判断できない。他でもない、彼自身もそうだつたのだから。

年上の大人たちと話している方が気楽だつた。同年代の子供と話していると、彼らとの間に齟齬が生じている気分になる。得体の知れない不安感が沸き上がってくる。それはきつと、彼らが悪いのではなくて、自分に問題があるのだ。

姉に相談すると、似たような経験を彼女もしたことがあつたらしい。けれどそれは一過性のもので、大きくなるにつれて解消されると諭された。

キョウイチはその言葉を信じて、もやもやする心中を抱えながら生活を送っていた。

そして遠見テツと知り合うきっかけが訪れる。それは学校の運動行事がきっかけだつた。

スポーツというものは、個人競技でもない限り、ひとりがずば抜けていても勝利を得ることは難しい。クラスのみなはキョウイチの

活躍に期待していたが、彼ひとりの力では如何ともしがたく、クラスは結局敗退することになる。

そのときに感じたのは、みなへの失望感だった。キョウイチがいるのなら勝てるという幻想に取り憑かれていた彼らは、まさか敗退するとは思ってなかったのだらう。口には出さないまでも、居心地の悪い空気になってしまった。

他の子供と違っていたのは、そのことを理不尽だと思いつつも仕方がないと考える思考を彼が持っていたことだ。全く子供らしくないといえた。悔し泣きしているクラスメイトの方がずっと健全に違いなかった。

学校からの帰り道、いつもならばクラスメイトと帰る道を、彼は「用事があるから」と別のルートを通っていた。少し気まずい雰囲気が残っていたし、彼も気分転換をしたかったからだ。

自宅は剣術の道場を開いていて、住宅街を抜けた先の辺鄙な丘向こうにあった。キョウイチが歩いているのは、遠回りになるルートで、用事がなければ絶対に通らない道筋だった。

普段と異なる風景は、沈んでいた彼の心をいくらか癒してくれた。まるで探検しているようにきよるきよると目を周囲にやりながら、あの家の犬は大きいとか、三角屋根の面白い家があるとか、様々な発見をしながら進んでいった。

カーブミラーに映る自分の顔が、明るいものになっているのを確認する。こっちに來て正解だった、とキョウイチは満足した。

しばらく行くと、小さな公園が見えてきた。砂場とブランコが唯

一の遊具で、他にはベンチすらなかった。とてもではないが、子供たちの好奇心をくすぐる造りをしていない。

その公園に人影があった。背は高くなく、キヨウイチより一回りほど小さかった。その影は一心に足でボールを操っていた。彼の目から見ても不器用なもので、サッカーというよりは、ボールによる人間遊びといった方が無難だった。けれど集中力は本物らしく、公園内に入っても、一向に気づく様子はない。

足をもつれさせたその子供が転ぶ。ボールは逃れるようにキヨウイチの下に転がってきた。そのときになってようやく気づいたのか、「あ」と間抜けな声を上げたのだった。

近くから見ると、キヨウイチはその子供に見覚えがある気がした。記憶の引き出しを引っ張っていると、その子供がクラスメイトであることに気づく。だが名前がとっさに出てこなかった。彼にしては珍しいことだった。

「あの、ボール……」

その子供は、人質を取られた母親のような表情だった。悪いことはしていないのに、何か過ちを責められている気分になったキヨウイチは、釈然としないままボールを手渡した。

受け取り、「ありがとう、キヨウイチくん」とその子供はいう。「う、うん」とキヨウイチはどもりながら返答した。こちらは名前が思い出せないというのに、相手は知っているとすると罪悪感を覚えずにはられない。

そんな心境を読んだのか、

「ぼくは遠見テツだよ。何度か話したこともあるよ」

「そ、そうだった。ごめん、名前覚えてなくて」

うつん、と遠見テツは首を振る。自分も人の名前を覚えるのが苦手だから気にしない。そういつて苦笑した。

テツは口数が少なかったけれど、驚くほどの確な受け答えをした。こちらのいいたいことを汲んで、期待する答えを返してくる。同い年のクラスメイトたちとは、一線を画した思考力を持っているようだった。

ならばなぜ、こんなにも目立たない立場にいるのだろう。キョウイチは疑問に思った。確かに、自身の能力を誇示し過ぎるのは、人間関係を築く上でいい影響を与えない。それでも、人には「他人からよく見られたい」という欲求が少なからず存在するはずだ。だから人間は着飾るのだし、褒めてもらうために勉強やスポーツを頑張る。もしも行った行動に何の反応も返ってこなかったとしたら、果たして人間は努力を続けられるのだろうか。

その点、テツの行動は奇妙の一言につきた。運動音痴というほどではない。サッカーも、まだあまりやったことがないだけで、遠くない内に上達することが見て取れた。

他愛もない話をしながらも、テツはボールを蹴ることをやめなかった。まるで見えない相手とボールを取り合っているような錯覚がした。キョウイチは彼に、説明のしようがない感覚を覚えた。それは、自分とは違った得難いものをもっている彼に対しての羨望とも取れるものだった。

夕焼けの公園は静寂に満ちていて、遠くで鳴くカラスの声だけが響いていた。飽きずに淡々とボールを蹴る姿は、無声映画のようであって、いつまで見ていても飽きさせない。

熱心に観察するうちに、テツの姿が一瞬、自分の姿と重なって見えた。首を傾げる。キヨウイチは、サッカーをしている己の姿を第三者視点から見たことはなかった。それなのに、テツの動き、それは紛れもなく自分のものを真似たものだった。

勘違いかもしれないと思いつつも、キヨウイチはさりげなくたずねてみることにした。

すると、返ってきた答えは予想通り、キヨウイチの動きを真似ているというものだった。ドリブルの上手さとか、フェイントを入れるタイミングとか、意識して行っていないことにまで彼は言及していた。そして少しでも覚えているうちに、自分もできるようになりたいと語った。

褒められているようでむず痒い思いがした。キヨウイチは、このクラスメイトがお世辞でも何でもなく、自らの向上のためにキヨウイチを手本にしていると知って誇らしい気持ちになった。それはいままでに感じたことのない感情だった。

口先だけでない、行動を伴ったテツの憧れは、その真剣さを通じて余すことなく伝わってきた。

「教えてあげようか？」

遠慮がちにきいてみると、尻尾でも振っているかのように満面の

笑みでテツは頷いた。彼は素直で、実直だった。そのぶん、黙っているときは仏頂面だった。そのせいで気難しい子供だと思われがちであったテツを、キョウイチは気に入っていた。

サッカーはなかなか上達しなかったけれど、根気強く教えていくうちに、目を見張る成果を上げることができた。彼はいわゆる、大器晩成型の人間らしかった。身につけるのは遅いのだが、一旦ものになると、付け刃でない確かな運用をしてみせる。

それ以来、キョウイチとテツは一緒にいることが多くなった。大體は、キョウイチの後ろをテツが追いかけていた。それが彼らのスタンスであった。泣き言もいわず、後を追いつがつてくるテツを尊敬さえしていた。大げさにいえば、彼らは補完し合う関係だったのだ。

キョウイチが実家で教えている剣術道場にテツを誘ったのも自然の流れだった。そこでは新たにスイを加えた3人となった。彼らは小学生のうちから熱心に修練に励み、大人たちからも目をかけられていた。

だが、大きな、良くない転機が訪れたのは中学校に上がってからのことだった。

この世界において当たり前に存在する『気』という力。それを遠見テツは全く扱えないことが判明したのだ。それは日常生活においては支障のないことであっても、剣士としては致命的であった。

中学生の年齢になると身体も出来上がってくるので、能力の開発が修練に含まれるようになる。その過程でテツの欠陥が判明した。全くの無能力というのは稀なことで、キョウイチの父である当主も、

姉のミコトも驚愕を禁じ得ないようだった。

テツは、自身の欠陥を知っても、表情を変えなかった。彼の心中を知らないキョウイチであったが、その長い付き合いから、落胆していることはうかがい知れた。ただ、それを微塵も感じさせないだけだった。

無言で自身の手のひらを見つめ、それから手を前方に付き出したテツは、ゆっくりと拳を握りしめた。理不尽に対する挑戦のようにも見えた。姿のない相手を見定めているようにも見えた。

かける言葉がないのはみな同じであった。スイなどは、「テツはやめちゃうのかな」と寂しそうにいつていた。けれどもキョウイチだけは、根拠のない確信があった。あいつはこんなことを気にするはずがない、と。

その予想は的中した。能力の欠陥が判明してからも、テツは道場に通い続けた。試合をすれば、連戦連敗で、周りからは変人と馬鹿にされても剣を置かなかった。スイは見えていられないと、やめるよう説得した。テツが彼女のいうことを聞かないのを悟ると、周囲の人間と同じように彼を罵った。そのたびに苦しい表情をするスイを慰めているうちに、キョウイチとスイは付き合うことになった。

唯一の救いとなっていたのは、姉の存在だった。ミコトはテツを気につけ、いつもお気楽な雰囲気の話しかけ続けた。その攻勢に白旗を上げたのか、テツも彼女を受け入れた姿勢を見せるようになる。

姉の存在をこのときほど頼もしく思えたことはなかった。そして、テツに対して言葉にしようのない畏敬を覚えている自分に困惑していた。

昔から、あらゆることに対して、諦めることをしなかったテツを尊敬していた。けれど、今回の件はキョウイチの理解を超えた領域の出来事だった。

能力を扱えないということは、これから先、テツは能力者に一方的な剣を振るわれることを意味するのだ。誰が好んで、雨のような剣戟に身を晒し続けるというのだろうか。剣術が勝者と敗者を創り出すのだとしても、それは負けるために剣を取るのではない。いつか勝つために素振りをし、型を覚え、立ち会いの稽古を行うのだ。

ならば、テツは——遠見テツは、絶対に勝利できない剣に、何を見出すのだろうか。

キョウイチの心中に、怖気のような、得体の知れない感情が巣食った。それは徐々に成長していった。テツに対する侮辱だと感じながらも、払拭することはできなかった。同じ感情を抱いたからこそ、スイを始めとした人間が、テツを攻撃していたのだと遅まきながらに理解した。

人間は、理解できないものを恐れる。

過去の回想から気を取り戻したキョウイチは、罪悪感と恐怖心とに襲いかかられ、吐き気に口元を押さえる。

慌てて狼狽するスイとティアに大丈夫だと告げながら、ままならない自身の感情を鬱陶しく思わずにはいらなかった。どうしておれは、テツを信じてやることができないのだろうか。姉のようにテツを励ましてやることができなかったのだろうか。

いつも、そう思うたびに、テツのあの目を思い出す。

一方的に打ち込まれ、痣を作りながらも、失われない目の奥の輝き。歪んだ笑みを作る口元と、鈍い光を放つ瞳が語るのは、怒りや憎しみといった、ありふれた感情ではなかった。

ああ、とキヨウイチは失われた日々を懐古した。

それに伴って、心の中の大切なページが抜け落ちていく感覚がする。それは少しずつ、やがて音を立てて落丁していく。遠見テツに対する好意、嫉妬、哀れみ、畏れ。そんなものが目の前を過ぎていく。

おれには、もう教えてやれることがなくなってしまったのだ。疼くような寂しさが心中を支配した。キヨウイチが悟ったのは、友との決別、そして友への裏切りだった。

だが許せとはいわないよ、テツ。キヨウイチはかたく目をつむった。自己保身的な謝罪の言葉は、テツの嫌うもつともな行為だからだ。彼はそんなものに価値を見出さない。その代わり、遠見テツが望むとしたら、きつと――。

第23話

傭兵団の駐屯所に戻ったミコトは、見張りをしていたクリスティナに手をあげて挨拶する。眠そうな半開きにした目で確認した彼女は、僅かに頷いて了解の意を示した。遠くからでは見逃しそうな反応である。

道場生のみなは、この無愛想な傭兵団の紅一点が苦手らしい。別に近づいたら、顔が半分に割れて噛み付いてくるわけでもない。なぜ彼女が苦手なのかわからなかった。呑気そうな顔をしていても警戒心が強い様子は、幼い頃のテツみたいで可愛らしいではないか。

荷馬車の睡眠スペースに、顔を赤くしたアリアをそつと下ろす。背中で戻されないかとヒヤヒヤであったが、何とか頑張ってくれたらしい。

うつん、と気持ちよさそうな、それでいて苦しげなうめき声を少女はもらす。おでこに張り付いた前髪をすいて、汗を拭ってやると、いくらか表情を柔らかくした。それから静かな寝息を立て始める。

これなら大丈夫そうだ、とミコトは一安心して荷馬車から降りる。すると、帰ってきたらしい弟たちの姿が目に入った。相変わらずフールド姿のふたりは目立って仕方がない。その服装はかえって逆効果だと、それとなく教えてやるべきだろうか。

せつかくの息抜きだというのに、弟カップルは少しも楽しんだ様子はなかった。むしろ深刻な顔をしている。

姉の姿を認めたキョウイチは、「もう帰ってきてたんだ」と意外

そうにたずねた。

苦笑いして荷馬車を指し示す。「アリアが悪酔いしてね。寝かせに戻ってきたのよ」彼女は立てた親指を戻して、代わりに人差し指をくるくると回した。でも料理は美味しかったわよ、と自慢気に付け足す。上等な食事をするということは、ストレス発散にもなるのだ。この世界に来てから気づいた事実だった。

鳥のステーキがうまかったとか、パンは柔らかくてとか話してみても、キヨウイチの反応は芳しくない。何やら思いつめた顔をしている。伊達に生まれてからいまままで姉を務めていないミコトは、弟が悩んでいるらしいことはすぐに察した。

ちら、とスイに目をやる。彼女は落ち着きなく身体を動かしている。加害者というよりは被害者の様相だった。ならば、あのふたりか。ミコトは盛大に溜息をつきたいのを我慢する。格好は怪しいのだから、せめて内面は健やかでいて欲しかったのだが、どうも無理な相談であるようだ。

キヨウイチが迷っているのを見て、フードを取った少女が「わたくしからお話しいたしましょうか？」とキヨウイチにたずねた。

ややこしい話になりそうだったので、できることなら退席したいミコトであった。キヨウイチが身内でなかったならば、何を企んでいると斬って捨てるところである。

観念したように首を振る弟は、辺りを警戒する仕草を見せた。「見張りの他に誰がいる？」若干声色がかたくなった。

いよいよ雲行きが怪しくなってきた。アリアが寝ているだけだよ、

と告げると、安心したのか肩の力を抜いて歩み寄ってくる。キヨウイチは人に聞かれたくない類の話をするつもりのようなようだ。

「――姉さん。あの子は、ちゃんと楽しんでいたか？」

荷馬車の中で眠りこけている少女を確認しながら、キヨウイチは問う。

「そりゃあね。調子に乗って飲み過ぎたみたいだけど」

「そっか」

何を心配していたのか知らないが、何度も「よかった、よかった」と繰り返す。フードの少女も同様だった。

なかなか本題に入らないので、少し苛立った声で、

「それで、話があるんでしょ？」

「あ、ああ。そうだな、姉さんのいう通りだ」

見張りのクリステイナがいる方向を気にしながら、キヨウイチは顔を寄せてくる。それに答える形で耳を近づけると、彼は話し始めた。

それは傭兵団からの脱走計画だった。フードの少女は貴族の令嬢だったらしく、そのツテで脱走をはかるということだった。逃げ出すのはこの4人と、ミコト。そう聞かされると、ミコトは表情を陰しくした。

「わかつてる。みなを見捨てるつもりかっでいいんだろ？でも仕方がないんだ。これ以上になると発見されやすくなるし、協力者にも限界がある」

「だからって見捨てるの？ みんなを」

姉と弟はにらみ合った。もともと喧嘩しない姉弟だったから、こうして意見が真っ向からぶつかり合うのは珍しい。どちらも譲りそうはなく、見守っているスイは「うう」と慌てるだけである。

見かねたティアが、ずい、と割り込んできた。

「少しよろしいですか、キョウイチ様の姉君」

「わたしにはミコトって名前があるわよっ」

「ではミコト様」

何が「では」だ、と慇懃無礼な態度が気に入らないミコトは噴火しそうになっていた。自身の噴火口に無駄な圧力をかけないよう注意しながら、気を落ち着かせていく。草切の剣士たるもの、常に冷静さを忘れるなかれ。いまでは懐かしささえ感じさせる父の言葉を出す。

「キョウイチ様も、悩みぬいた末の決断なのです。ミコト様ならばご理解いただけるはずですよ」

それはそうだ。彼女だって、弟が「おれたちだけで逃げよう！」などと即決したとは思っていない。だとしても、すんなりと提案をのむわけにはいかなかった。

「逃げ出せる機会は、そう何度もあるとは限りません。この街に滞在しているいまが、その機会なのです。これを逃したら、もう永久に逃げ出すための機会が失われるかもしれません」

「あんたたちの、ね」

「ではミコト様は、ずっとこのままでもよろしいと？」

試すような目付きに、「そんなことはないけど……」と自信のない返事することしかできない。彼女自身は、この傭兵団が嫌いではなく、なってきた。それが例え、悪事と呼ばれる行為を行っている集団だとしてもだ。

ある程度の自由を許され、今日だって食事を共にしている。上下の関係は仕方がないとしても、全く信用されていないこともなかった。キョウイチの示した提案は、積み上げてきた関係を破壊する行為だ。

ミコトの口が拒否の形を作りかけ、あえぐように歪み、崩れる。声にならない葛藤だった。

ティアという少女の言葉には一理ある。このままではいけない、と考えていたのは他ならぬミコト自身である。一連の出来事を鑑みても、テツに好ましくない事態が続いている。まるで彼は蟲毒の壺に放り込まれたかのようにだった。

それは偶然とはいいい難く、あの男——団長の思惑が絡んでいると思われる。テツの何をもって見定めたのか知れないが、あの男のいいようにされてはならないのだ。

けれど傭兵団は、団長の統制下にある。ヒエラルキーの最下層にあるといっても過言ではないミコトには、どうすることもできない。弟分が悪意に翻弄されるのを黙って見ていることしかできない。

少女のいうように、これは「機会」なのだろうか。

団長の魔手から、テツを救い出すためのチャンス。傭兵団の外の勢力から力を借りるのだ。いくら傭兵団の面々が一騎当千を誇っている、数の暴力には抗えない。この世界の人間には、かつての世界において存在していた能力がないのだから尚更だ。

人間の腕は2本しかないし、両目は前を向いている。どうやっても捌き切れない一撃があるのだ。特に混戦の中で放たれた矢は、剣の達人をもつてしても防ぐことは難しい。白兵戦における有利不利は、確固たる事実として存在している。

大勢で襲撃し、残された仲間を救い出す。なるほど、悪くない提案だといえる。少なくともこのまま状況を静観するよりは、よほど建設的かもしれない。

ミコトは空を仰いだ。少女の思惑に乗せられるようで癪ではあった。しかしながら、現在取りうる選択の中では、この一択の他に目ばしいものがないのも事実であった。

「——わかったわ、お嬢さん。その提案に乗ってやってもいい」

「それは僥倖ですわ、ミコト様」

ですが、ひとつ問題がありましたよ、と少女はいった。

ミコトは怪訝に口を閉ざした。何かしらの障害があるのだろうか。

「わたくしは『お嬢さん』などという名前ではありませんわ。『ヴァレンティア・パッヘル』という名がありましたよ」

どうだ、やり返したぞ。そんな心の声が聞こえてきそうな自慢顔だった。いけ好かない少女だと思っていたけれども、歳相応の振る舞いもできるらしい。ミコトは肩をすくめて降参の意を示した。

ふたりの険悪さが少し削がれた様子を見て、キョウイチも一安心していた。この5人は一蓮托生ともいえるのだから、なるべくいさかいはない方がいい。内部崩壊で計画が頓挫するなんて笑えない冗談である。

素の表情を見せ始めた貴族のご令嬢に苦笑しながらも、ミコトは決心を新たにした。この機会を最大限に活用して、取り巻く状況を好転させるしかない。いまのままでは、テツの行く先に待っているのは、争いと血にまみれた道だけだ。あの弟分を、むざむざとそんな修羅道に落とすわけにはいかなかった。

やるしかない、と彼女は覚悟を決める。

その、隣の荷馬車の中。

アルコールにやられた頭であつたが、少女の意識ははっきりしていた。小声であっても、話されている内容はしかと聞き遂げていた。

「――」

みじろぎもせず、虚空を見つめながら、できるだけ詳細に話の内容を記憶しようとする。その相手が、先程自分を背負って運んでくれた人であったとしても。

少女は記憶する。裏切ろうとしている人への失望感を。裏切ろうとしている人への罪悪感を。

嵌めこまれたガラスの瞳をもって、少女は記憶する。

第24話

領主に謁見する、と団長はいった。セブンス傭兵団は一介の傭兵団に過ぎない。貴族のお偉方から見れば、そこいらの野盗と大した差はないはずである。地方領主とはいえ、このような大規模な商業都市を抱えるマーソン伯爵との謁見とは驚きである。

衛兵とのやり取りから、只者ではないと確信していたものの、直に拝顔を許されるような関係を築いていたとは思ひもなかった。

疑問なのは、その謁見にテツたちも含まれている点である。団長が領主と対談するならともかく、小間使いの自分たちがいても意味はないのではないか。相変わらず読めない団長の行動には、諦観で答えるしかないのではないかと最近思い始めたところである。

街を見下ろす高台に築きあげられた城は、重厚な石造りであったが簡素な構造で、見た目よりも機能性を追求しているのが見て取れる。この城からも、城主たるマーソン伯の質実剛健な性格が現れているようだった。

団長を先頭に、ガヴァン副団長やポールが続く。団員メンバー全員が一度に行動することは少なく、今回も見張り役が荷馬車と共に駐屯地に残っている。

馬役に愛馬を預けたあと、城内を案内される。外装の実直さは内部にも反映されているようで、テツが思い浮かべた欧州の豪華絢爛な城とは一線を画していた。貴族は頻繁に愚かな人間と描かれがちであったが、このような貴族もいる。これは認識を改めなければならないな、とため息が下った。

接待部屋はうつて変わつて裝飾華美であり、絵画や置物にはとても触れられたものではない。団長はそれひとつとっても値段が付けられなさそうな椅子にどっかりと腰を下ろし、まるで主のごとくぞんざいな調子である。後ろで控えるテツたちは「なんてずうずうしい」と呆れ返るしかなかった。

そんな荒唐無稽な人間にも顔色ひとつ変えないメイドは大したもののである。中年のふくよかなメイドは、柔和な笑みを浮かべて茶をすすめる。それに驚くほど優美な仕草で応じる団長は、格好さえきちんとすれば貴族としても十分やっていけそうである。

テツと同様、おまけとしてくつ付いてきたミコトとアリアは、めったにお目にかかれない代物に目を回している。できることなら、こんな恐ろしい部屋から早く退出したいと表情が語っている。

席に座つて応対を受けているのは団員の面々で、テツたちは手持ち無沙汰に控えるほかない。荷馬車で留守番している方がよっぽど有意義だった。シンシアなどは、城についていけるテツたちを羨ましがっていたが、この直面している現実を知れば、ついていけなくてよかったと心底思うだろう。

部屋の空気が茶の香りに満たされる頃、扉を開き顔を覗かせたのは、まだうら若い女性だった。

事前に聞いた話では、マーソン伯はいい歳をした男性だということだった。けれど目の前に現れた人物はその情報のどれにも合致しない風体である。団長も想像していた人物と違ったのか、一瞬間を置いて手にしていたカップを置き起立する。

他の団員も従ったので、この女性はマーンソン伯の関係者ということなのだろう。彼女に付き従うように続いて入室する男性がいる。こちらは鋭い目付きと容貌で、ガヴァン副団長と性各を同じくしている。そうだった。彼は一言も発しないまま一歩下がって佇んでいる。

優雅な笑みを浮かべた女性は、団長の凶器のような手に臆すこともなく、力強く握手すると、軽やかな仕草で着席をすすめた。着ているのは、ドレスというよりはワンピースに近いシンプルな装いで、趣味のいい首飾りと指輪がアクセントになっている。栗色の髪と、それに合わせるようなブラウンの瞳の光は、この女性の意志の強さを代弁しているかのようであった。

「わたしののような未熟者で済まないが、不在である父の代理とさせてもらおうよ」

「ご謙遜を。ガーティ様のご高名は、遠くの地にいても聞き及ぶほです」

団長のおべっかに、マーンソン伯の一人娘、ガーティ・マーンソンは満更でもなさそうな顔をした。

「貴君のような強者に持ち上げられるのも悪くないな」

話し方や仕草から見ても、男勝りの性格を匂わせる。はつらつとした雰囲気はミコトのそれを思わせ、このふたりが組んだら手の付けられないコンビが誕生するに違いなかった。しかしながら、この令嬢は背後に控えるテツたちを置物以上に思うこともないようで、全く目を向けない。ありがたいといえばありがたかった。

話の内容は、先の戦のことから周囲の村のことまで、多種多様な

域に及んだ。中には、テツたちがいてはまずいのではないかと思える話題もあったが、対談するふたりが気にしていない以上、口をはさむこともない。なんとも微妙な立ち位置である。

それとなく観察してみると、ガーティの背後に控えている男が気になった。無表情を貫きつつも気分を害しているようで、ときおり眉根を痙攣させている。彼は傭兵団の訪問を快く思っていないのだろう。

むしろこの男の反応が正常であるはずなのだ。テツは楽しげな表情で対談する令嬢を見て思う。貴族から見ても、ならず者とそう変りない傭兵団を城内に招き入れて接待すること自体が異例なのではないだろうか。いくら有益な存在だとしても、格式や外聞を重要視する名家にとって、傭兵団と懇意にするだけで様々な噂が流されよう。それは街の支配者であるマーソン家に対し有利に働くとは考えづらかった。

居心地の悪い時間は遅々として進まない。部屋の空気に食中りしそうになる頃、話題はようやく核心部分に辿り着く。

それはセブンス傭兵団のスカウト話だった。傭兵団を正式なマーソン家の家臣として迎え入れたいという。この街では常備軍を設立し試験的に運営しているが、歴戦の傭兵に比べると見劣りしてしまう。そこで傭兵団を教導隊として、後には軍の中心的存在としてののだという。

ガーティは熱心だった。その様子からは、何とかして傭兵団を迎え入れたいという必死さがうかがえる。対して背後の男は冷笑を覗かせていた。テツでさえ気づくのだから、団長たちが見逃すはずがない。どうやらこの話は、彼女のゴリ押しで進められているようだ。

あつた。

恐らく断るだろうな、とテツは推測した。団長はガーティから、いかにも興味があるような調子で事細かな条件を聞き出しているが、そのメリットとデメリットを比較しても、マーソン家に服従する魅力は大きくなかった。

2杯目の茶に口を付けながらも、団長は答えを即断せずに、団員で話し合いたいと伝えた。これは傭兵団の未来がかかっているのだから、と。

ガーティ嬢は気分を害した様子もなく、満足気に頷いた。それどころか、団長が真剣に提案の検討をしていることに手応えを得ているようだった。

話し合う気なんてなくせに、と猫をかぶっている大男に向かってテツは毒づく。セブンス傭兵団の方針はひとりの男の独断でいつも決定されている。団員に伝えられるのは、決定事項でしかない。異議を唱えたところで方針が覆ることは殆どないのだ。

その後は当たり障りない内容に話は向かい、頃合いと見たガーティは城に泊まることを提案した。少し考える素振りを見せた団長は、実際には頭の中で素数を適当に数えた時間程度を消費して「それはありがたいです」とアルカイクスマイルを浮かべた。

テツたちは荷馬車に戻ることになった。訪れたときと逆の道程を辿りながら、城内の見取り図を頭の中に描いていく。意味のある行為だとは思えない作業も、後々に思いもしない場面で役立つこともあるのだ。とんぼ返りに城を後にするテツであつたが、収穫がなかったわけでもない、ということである。

帰還するのはガヴァン副団長とポールも一緒だった。城を出て途中、テツは「ガーティ様の提案には乗るんですか？」とたずねてみたところ、「おまえはどう思う？」とガヴァンに逆に返された。

人指し指で唇をなでながら、「傭兵団は貴族連中には歓迎されないでしょうから、断る方向なのでは？」見解を述べると、ガヴァンは少し見直したような顔をした。

「貴族というのは、大抵が損得勘定のできない人間なのだ」

そう吐き捨てる副団長を見て、おや、とテツは意外に思った。いつも無表情な彼が感情を顕にするのは珍しいことだった。セブンス傭兵団の副団長殿は貴族がお嫌いらしい。

この話題を続けるのはよろしくないと判断したテツは曖昧な返事をして切り上げた。ガヴァンもむつつりした表情に戻る。

後ろを付いて来るアリアに顔を向けると、彼女は不思議そうに首を傾げた。その様子に小動物の面影を見たテツは、何気なしに手を彼女の頭に乗せてみる。目をしばらく瞬かせた少女は、ややあつてにへら、とあどけない笑みを浮かべた。

殺伐とした会話も嫌いではないが、少女の醸成する清涼な雰囲気には敵わない。テツは理由もなく白旗をあげたい気分になった。

第25話

「貴族様のお城の中を見れたんだろう？ いいなあ、テツは」

懐かしい曲調の音楽が奏でられている。団員や女たちが手にした楽器からは、陽気なテンポのメロディーが絶え間なく鳴り響く。声がかき消されないよう、いくらか意識しながら、大きく口を開いてシンシアはいった。

現実とはまるでかけ離れた感想に、城から帰還したテツは胃の痛い記憶しか思い出せないので盛大に顔を顰めてみせた。

「緊張しちゃって見物どころじゃなかったですよ」

「そうそう。高価な物がいっぱいあった部屋なんか、生きてる心地がしなかったわ」

テツとミコトは声を揃えて、あまり楽しいものではなかったことを主張する。テツは根っからの一般庶民であつたし、家が剣術道場だったミコトの実家も質実剛健な生活をしていたのだ。城での経験は、そんな彼らの価値観の遥か彼方にあつた。

少しも楽しそうでないふたりの意見をきいたシンシアは、「そんなもんかい」とよくわかつていない表情を浮かべた。実際に見てみないとわからない事柄である。留守番だった彼女には実感が沸かないのも無理はなかった。

夜の帳が降りて、傭兵団の駐屯地には焚き火が起こされている。十分とはいえない光量でも、ほのかに照らされた雰囲気は格別であ

る。見慣れた人口の明かりとは一味違った空気をかもし出している。

音楽に合わせてステップを踏む姿がちらほらと見受けられる。踊りに縁のなかった面々が、傭兵団の女たちに踊り方を教わっていた。アリアやサツキも思い思いにロボットダンスを披露している。

ぎこちない動作に笑いを誘われる。アリアがテツに気づいて手を振った。それに答えてやると、俄然やる気を出した彼女は真剣な表情でステップを踏み始めた。けれども努力は直ちに報われるはずもなく、ロボットから操り人形に変わった程度の違いしかなかった。

「なんとも味のある踊りをするんだね、アリア嬢は」

「見ようによつては独創的といつてもいいんじゃないかな」

意地悪な意見は聞こえるとまずいので、小声で交わし合う。

傍らのミコトは踊りに混ざらず、テツの隣でコップを傾けていた。ときおり思い出したように、スイと踊る弟にヤジを飛ばす。赤面して俯く弟の姿に、性悪な姉は心底満足した格好をした。

「……なんて意気地の悪い性格ですか」

「褒め言葉と受け取っておくよ」

「残念なことに、耳鼻咽喉科は近くにはないんです。ミコト姉さんのビョーキは治せそうにもありません」

テツはゲテモノ料理でも出されたような声を上げた。

「なんでわからないかなあ。これはコミュニケーションの一環だよ。仲睦まじい姉弟間のね」

ぱちくり、と下手なウインクをしてミコトはのたまう。

「キョウイチはクール気取ってる悪癖があるからね。こうして調子崩してやった方がいいのさ」

「そんなことしなくても、キョウイチとスイは上手くやっていると
思いますけど」

まじまじと幼馴染を観察しながら、

「お似合いのカップルじゃないですか」

「なあに？ 仲のいい幼なじみカップルに嫉妬かい？ ひとりだけのけ者されちゃあ、ズッコケ三人組メンバーとしては、寂しい限りだもんねえ」

「いつの間にグループ名が決まっていたんですか。そんな愉快なネーミングのトリオにはなりたくないですよ。腐れ縁なのは否定しませんけど……」

小・中・高と幼馴染と顔を付き合わせ続けるのも珍しいことではないだろうか。世間一般では、男2人に女1人の幼なじみはドラマにされやすいが、そういったドロドロ愛憎劇を繰り広げた経験はない。そもそもがキョウイチとの間には絶対的な差があったわけだし、スイが自分のような人間に惹かれるとは想像すらしたことがなかった。それどころか、テツはキョウイチに憧れて友人になったのだ。始まりの記憶は、いまになっても忘れたことがない。

「そうなの？ スイってば美少女じゃない。おっぱい揉みたいなあ、ふとももスリスリしたいなあ、とかエロい妄想しないわけ？」

「……しませんよ」

「うつそだあ！ ぜったい嘘だあ！ テツってばムツツリスケベだから口に出さないだけでしょ」

ハイテンションで追求してくるミコトにげんがりして助けを求める。その先ではポールとシンシアがいちゃついていた。砂糖を吐きそうな空気にやられたテツは、まな板の上の鯉のような気分になった。どうやっても、ミコトのエロトークからは逃げられないらしい。

「ほら、想像してみてよ。落ち込んだ様子のスイがテツに相談を持ちかけてくる。『ねえ、ちょっといいかな……』テツは真剣に相談事に乗ってあげるの。真摯な態度に気を許したスイは不安な心情を暴露して潤んだ瞳を向けてくる。『優しいんだね……』いい雰囲気なのふたり。そのまま距離は縮まって重なるふたりの影。ああ、許されぬ恋路。スイの変化を察知したキョウイチがテツに詰め寄る。『何か隠し事してるんだろ？』激しい剣幕にテツは観念して、スイとの関係を白状する。『ぼくがいけないんだ……』口論になる男たち。殴り合い、罵り合い、やがて力尽きて両者は仰向けに寝っ転がる。『やるじゃないか』『君こそ』爽やかな表情のふたり。諍いを克服したふたりの親友は強い絆で結ばれる。それは禁断の恋の始まりだった。スイを巡る三角関係は薔薇の香りをかもし、それに誘われた美しき青年、ポールさんが参戦し、愛と憎しみのスクウェア……！」

反論を許さぬように一気に喋り抜けたミコトは、一仕事やり遂げ

た後の汗を拭って、

「どうよ？」

「姉さんがどうにもならない悪食だというのはわかりました」

冒頭部分に覚えがなくもないテツはひやりとしたが、最後にはついていけないジャンルにまで手を出される始末である。少々姉貴ぶんの正体に疑念を持つ内容だったのはいうまでもない。

「だが悪くないストーリーだったな。劇作家にでもなれるんじゃないか」

感心した様子のポールが会話に混じってくる。彼の正気を疑う発言に、テツはこの世の終わりが来たような顔になった。

「別にテツを狙ってるわけじゃないから安心しろ」

「ふう」

「ほう」

安堵のため息が二度つかれる。テツが目を寄越すと、その当人は明後日の方向を向いていた。

「仲のよろしいこって」

息のあった様子を見て、ポールは苦笑いをした。

「ところでテツ、おまえ、昼にガヴァン副長と仕官の話してただ

る？」

気を取り直すように話題を変えるポールにありがたいと思いつつ、テツは「うん」と返事を返す。

どうやらポールは仕官に賛成であるようだった。マーソン伯を後ろ盾とできれば、不安定な生活ともオサラバできると力説する。

ポールのいうことも最もだ、とテツは前置きした。

「一番問題なのは、既に存在している組織との軋轢だよ。傭兵団が後から重要なポジションに割り込んできたって考える連中が必ず存在する。彼らからすれば、傭兵団なんて害虫みたいなものだよ。仲良くやろうなんて、天地がひっくり返っても思わないんじゃないかな」

「だがガーティ様のお墨付きがあるんだぞ」

「……ガーティ様は確かにやり手だけど、部下の全てを掌握しているわけでもないと思う。主の方針に反感を抱いても不思議じゃない。ポールも覚えてるだろ、あの後ろに控えてた男のこと」

ポールは眉根を右手で揉みほぐして、「あの男か」と呟いた。

「陰険な野郎だったな。確かに、あれは何か腹に一物抱えている雰囲気だった」

やれやれ、と彼は意気消沈した。大分今回の提案に乗り気だったのだろう。根無し草である傭兵団員からすれば、飛びつきたくもなる一大事である。彼でなくとも、期待してしまうのは無理もない話

だった。

「騎士つてのも、悪くはないと思ったんだけどな……」

ポールは遠い過去を省みているようだった。ブルーの瞳は少年が夢見ていた光を残している。きっと、遠くない昔には、剣を掲げた騎士姿の己を夢想したことがあるに違いなかった。

パートナーの項垂れた格好に我慢ならなかったのか、隣で様子をつかがっていたシンシアは「いつまでもうじうじするんじゃないよっ」と強引に彼の腕を取って踊りに繰り出した。呆気に取られたようであったが、気を取り直した彼も吹っ切った様子で踊り出す。

あれでなかなか息の合ったパートナー同士なのである。テツは阿吽の呼吸で軽快にステップを踏んでいる彼らを、眩しいものでも見るかのように目を細めて見た。

ふたりのなり初めは物騒なものであったらしいけれど、その辺の夫婦よりかよっぽど仲睦まじい。先入観だけでは、人間関係を到底語り尽くせるはずはないのだ。

テツは耳に慣れてきた音楽を口ずさむ。すると、腰の横に置いていた右手に添えられる感覚がした。それはひんやりとしていて、尚且つあたたかみのある手のひらだった。

みなは踊りに夢中になっている。その喧騒から外れる位置に腰を下ろすテツとミコトには、あまり注意を払っていないようだった。もしかしくなくても、普通でない雰囲気に入入していることを意識せずにはられない。

あれほど茶化していた様子はどこへやら、無言で手を絡ませてくるミコトを振り払えずにいた。何か大きな力に押さえつけられていて、身体が自由が効かない気がした。心臓の鼓動は優しくないビートを奏でている。

「……」

「……」

口の中が乾いていて、唾液を飲み込む音がやけに大きい。

パチ、と目の前の焚き火がはぜる音がした。

それを待ちわびていたかのように、ミコトは距離を詰めてきた。あつという間にふたりの間にあった空間は消失する。息遣いさえも感じられるほどだ。テツは口を開きかけ、いすべき言葉が見つからずに空を仰ぐ。

陽気な音楽が遠くに聞こえている。人の笑い声や話し声が、得難いバックミュージックとなって彼らの心を揺さぶった。

テツの右肩には、かすかな重みを感じられる。彼女の甘い香りと、黒髪の柔らかさがくすぐったい。それでも無言を貫く男に焦れたのか、非難する目付きを彼女は向けてきた。

泣き笑いの表情を浮かべてテツはいった。

「冗談にしちゃ、たちが悪いです」

「——冗談なんかじゃない。こんなときまでふざけたりし

ないわよ」

ミコトは少し傷ついた様子だった。

「でも、ミコト姉さんには……」

「軽い女だと思う？　少しくらい遠距離だからって、違う人を好きになってさ」

皮肉げにいうミコトに、答えられず黙り込む。恋人たちの間に存在する距離は果てしない。それはきつと、ありふれた恋や愛といった感情では超えることのできないものだ。希望では太刀打ち出来ない大きな壁が、絶望的に道を阻んでいる。

どうして非難できようか。明日をも知れぬ身であるのは、テツだって同じことだった。近くにぬくもりを感じたい。寂しさを紛らわしたい。そう考えることは、至って間違えた考えではない。

このまま彼女を受け入れることが正しいのだろう。人間としても男としても、目の前で打ちひしがれる女性を慰めるべきなのだ。優しい言葉をかけてやるだけでもいい。そっと抱きしめてやるだけでもいい。

けれども、遠見テツという人間は、そんな常道の行動をよしとしない種類だった。自分自身でさえ、おかしい人間であると自覚している。自覚しながらも、もう修理はできないのだな、と諦観にも似た心境になっていた。

だからせめてもの償いに、テツは彼女の額に口付けた。親から子への親愛を示すような、優しい口付けだった。

予想外の行動に赤面した彼女は、額を押さえて恨みがましい目を向けてくる。口元はへの字に曲がって抗議を主張している。感情のタガが外れかけているのか、若干涙目である。

さて困った、とテツは明後日に向けて誤魔化すしかない。額にキスとは、我ながら二十歳過ぎの女性にするようなものではなかったかもしれない、と猛省する。自分が外人ならば絵になったのだろうが。

猛り狂う感情を整理するように「うー」と処理音を発生させていたミコトだったが、やがて収まりがついたのか、深い溜息と共に激情を取り下げてくれたようだった。それでも満足ならぬらしく、テツの右腕は彼女にがっちりとホールドされてしまっている。万力よろしく締め付けられて、彼の右腕はギブアップ寸前であった。

「このヘタレ」

「ごもつともな意見であつた。テツはいい訳も反論もせずに、ミコトの口撃を受け入れざるを得ない。」

「鈍感っ、唐変木っ、意気地なしっ。何とかいったらどうなんだよ、テツ」

「ぼくが女性に疎いだけのヘタレであつたなら、どんなに素晴らしきことだっただろうか、と思わずにはいられなかった。そうすれば、遠見テツという人間は、強引にでも腕を引っ張ってくれる彼女と共に歩むことができただろうに。」

しかしながら、いまこの場に存在する遠見テツは、草切ミコトを

もってしても修正できない。最早彼女とは同じ道を歩むことはできそうにない。それは途方もなく悲しいことだった。そして、その事実を淡々と受け入れてしまう自分は何なのだろう。まるで自分が人間そっくりの人形になってしまったかのようにだった。

埒があかない。彼女はいった。確保していた獲物の腕をむんずと掴み立ち上がる。そして音楽が流れる舞台の中心へと歩みを進める。

テツの抗議などお構いなしだった。挑む目付きにたじろぐと、ミコトは無然とした声色でいう。

「踊りだ。そう、踊るのよ」

「はい？」

「わたしと踊りなさい。難しいことなんか考えられなくなるくらいに。ただ無我夢中に」

タン、と彼女はステップを踏み始める。テツはそれに合わせて動き始めるしかなかった。もともとこの手の踊りは、型なんてあつてないようなものだ。音楽に合わせ、リズムに乗って踊ればいい。

突如乱入したテツとミコトのペアに周囲は沸き立った。触発されたのか、既に踊っている面々も、俄然やる気になって熱が入り始める。それが奏者にも伝染して、アップテンポの音楽はさらに勢いを増した。

最初は遅れがちだった呼吸も、しばらくすると重なり合ってくる。その調子だ、とパートナーの目はいつていた。

両腕で抱擁し、見つめ合う形でふたりは踊る。聞こえてくる歓声と、すぐ傍に感じる相手の吐息。この世界には、もうお互いしか存在しない錯覚に陥る。みなに囲まれながら、どこまでもふたりっきりの世界。

踊りなさい、と彼女はいった。

テツは熱に浮かされながらも、相手の力強い瞳やすっきりした顔立ち、流れる栗色の髪の毛の一本一本まで手に取るように感じる事ができた。

踊りなさい、と彼女はいった。わたしのことしか考えられなくなるくらいに、とも。

彼女の手は柔らかかった。決してゴツゴツとしていない。彼女の手はあたたかかった。決して生命を感じさせぬ冷たさではない。彼女の手は優しさに溢れていた。決して生命を奪う鋭利さを秘めてはいない。彼女の手は愛に満ちていた。決して死を連想させる鋼ではなかった。

くるくる、と踊る。

彼女は心底楽しそうに跳ねる。踊る。ステップを踏む。

ああ、とテツは思った。ミコトの優しさが身に染みていた。彼を思つて、彼女は踊りに誘ってくれたのだ。おぼろげに感じる不安を察知してくれた彼女が、どうしようもない人間を最後まで見捨てずにいてくれたのだ。こんなに嬉しいことはなかった。

なのに、思わずにはいられない。

がさついた灰色のグリップを。抜き放つ際の甲高い金属音を。日の光を照り返す鈍い鉄の煌きを。

遠見テツは、剣を思わずにはいられない。

これは愛なのだろうか。そんなはずはなかった。ならば執着なのだろうか。そんなこともなかった。だったら逃避なのだろうか。それならば簡単な話だった。

遠見テツにとって、剣は全ての始まりであり——その結末でもあった。

ああ、と出来ない自分を嘆かずにはいられない。どうしてミコトを受け入れられないのだろうか。彼女は幸せになって欲しいと思うし、幸せにしてやりたいとも思う。その気持に突き動かされる自分を夢想し、それは素晴らしいことだと確信する。

そのビジョンの前に、墓標のように立ちふさがるものがある。剣だ。剣なのだ。こいつと出会ってしまったせいで、彼は遠見テツという人間に製造されたのだ。

これほどまでに熱い身体を感じているというのに、彼はある絶望に打ちのめされた。呻き声が漏れないよう必死に取り繕った。瞳から悟られないよう、全身全霊をかけて。

遠見テツは踊れない。もう、彼女とは踊れない。

もう、誰とも踊れないのだ。

第26話

昨夜の喧騒は残り火のようにくすぶっている。そこかしこに食べ物の残骸やワインボトル、コップが散乱している。幸せだか苦しんでいるのか判別付かない表情の団員たちも同じように散らばっていた。

テツは彼らを起こさないよう、抜き足で傍を通り過ぎる。折り重なって眠りこけるポールとシンシアは至極幸福そうに見えた。

昨夜のミコトの顔が思い出される。彼女は力の限り踊りきったあと、疲れて眠たげにしていたアリアを連れて先に眠ってしまった。その去り際の顔には陰りがなかったのが救いだった。

人気がない場所に向かっていると、ちょうどアリアに出会った。夜更かししないで眠ったせいか、寝起きはすこぶるよかったらしい。死屍累々としている周囲の人間を心配していた。

「おはようございます、テツさま」

陽光に反射した金髪を片手で押さえながらアリアはいった。朝早くに目覚めてしまったので、後片付けを兼ねて見回っている最中だという。彼女はいつもと変わらないテツを見て「さすがですね」と感心した。

そんなに遅くまで起きていたわけではないことを告げる。

「なら、わたしと一緒にですね」

彼女は起きていたくても起きていられなかった口なので、同じように寝入ってしまった仲間を見つけられて満足したようだった。

「テツさまは剣の素振りを？」

そうだ、とテツは頷いた。傭兵団の仲間内では、毎朝彼が素振りを行っていることは周知の事実である。しかも団長に帯剣を許されてから今日まで、一日も欠かすことなく行っている。ポールは「よくやるよ」と感心していた。素振りという地味な鍛錬は、ともすればサボりがちである。テツがそれを続けられるのは、素振りを苦行だと思っていないからだ。いまでは朝の習慣となっている。これをしないと、調子が出ない気さえしていた。

「もしご迷惑でなかったら、見学してもよろしいでしょうか？」

「見ていても面白いものじゃないよ」

「いえ、そのようなことは。無理にとはいいません」

別に見られても困るものでもないので、テツは同行を許した。

少女は嬉しそうに後を付いて来る。彼女ならば、邪魔をするようなこともないだろう。離れた場所を指図し、ここから近寄らないよう注意すると、「わかりましたっ」と偉く真剣な表情を返された。

地面がかたすぎず、柔らかすぎない最適な場所である。昨日の朝もここで素振りを行っているので、いい具合に地面が踏み固められている。

横目でアリアの位置を確認する。きちんといわれた通り、指図さ

れた場所からは近づいていない。

振るうのは素振り用の木刀である。この世界には「素振り用」という概念がなかったので、テツがハンドメイドで作り上げた品である。実戦で用いるショートソードより重くなっている。基礎となる一本木の周りに、重さを調整する小木をくくりつけている。あまり極端に重くしても意味はない。素振りは筋力トレーニングのために行うのではないのだから。

準備運動は事前に済ませてあったので、木刀を手にして集中する。自分の身体の中に目をやって調子を確認する。どこか鈍いところはないか、異常なところはないか。一通り巡らせて、ようやく剣を降り始める。

テツにとって、朝の素振りは体調確認も兼ねているのだ。毎日行っていたら、どこか調子の悪いところがあればたちまちに判明する。

他人が見ていても決して面白くない動作を、アリアは熱心に観察していた。テツの拳動を細かく見聞し、何かを掴もうとしているようだった。

汗がしたたる頃には、見物人がいたことも意識の埒外に追いやられていた。少しずつ動きを抑えながらクールダウンしていく。体温が汗と共に気化していくのが心地よかった。

一度大きく深呼吸をして目をつむる。自分の身体を突き動かしていた熱が去って行くのを確認して、目を開く。

気がつくともサツキが眠たげな目をしてアリアの隣に立っていた。テツがきよとした視線を向けると、同じようにその存在に気づ

いたアリアが「ひゃあ」と声を裏返した。

サツキはふたりの反応を少しも気にしない素振りでテツにタオルを渡した。肌触りなど度外視した代物だが、汗を拭くという機能だけ見ればタオルと思えなくもない。

礼をいつて受け取る。彼女は「いえいえ」といつてから、堪えきれず小さなあくびをした。自分の醜態を見られたせいか、僅かに頬を染めて、そそくさと退散していく。その去り際に、「実は、わたし、踊りが苦手なんです」と誰にいうまでもなく呟いた。特に意味はない。

「なんとも不思議な人ですね」

「うん」

黒と金のデコボココンビは、なんだか癒された気分になったのであった。

第27話

なんだか変な事態になっているな、とテツは苦虫を噛み潰した心境になった。眼前には、視界に入り切らないほどの巨体がある。そこから放たれる殺気は並大抵のものではない。いまだって膝が笑ってしまっている。

遠見テツは、セブンス傭兵団の団長と対峙していた。その目的は、無論剣を合わせるためである。

場所はマーソン伯の居城、その中庭である。周囲を石壁に囲まれていて、小さなグラウンド程度の広さがある。城に勤める兵士が修練に使う場所だそうで、見物人も少なくない数を見受けられる。

こめかみから伝う汗を感じながら、テツは昼頃の出来事を思い出す。それは城に泊まっていた団長が戻ってきて、テツたち数名を伴ってとんぼ返りすることから始まった。

何の脈絡もなく、「城に行くぞ」と団長が挨拶代わりにいうのは平常運転である証拠だろう。昼過ぎにマーソン伯の城から帰還を果たした大男は、尻も据えないうちに再び登城を果たすとのたまった。

それに不平不満をもらさず行動に移る団員たちは、非常によくしつけられていると考えていい。行動にいちいち理由を求めるのも無粋である。しかしながら、何も考えずに条件反射で団長に従えるほ

ど道場生組は訓練されていなかった。

それでも穴を穿ちそうな視線を向けられては従わざるを得ない。
テツやミコトラ、以前に城へ行つたことのある人間が動き始めると、

「今回は全員だ」

「ぜ、全員ですか？」

団長の言葉に素頓狂な声を上げる。テツが後ろを振り返ると、その面々も呆気に取りられた顔をしていた。

全員ということは、怪しいフード2人組や他の女たちも含まれることになる。城に行けるとわかったシンシアたちは嬉しそうにしている。一方で、フードの奥からは、何の言葉も打ち返してこない。

テツには、この城への訪問の意図するところが全く掴めなかった。前回の経験から学んだことは、自分らは置物以上の役割にはなれないということだ。それなのに人数が倍になったところで、何が変わるというのだろうか。

団長はこれ以上口を開くつもりはないようで、腕を組んで荷馬車の移動準備を眺めている。その表情は毎度おなじみの鉄仮面である。鉄仮面とはいっても、少しでも触れれば大口を開けてかみ殺しに来る物騒なものだった。

この場所に留まっても邪魔にしかならない。テツは後ろ髪を引かれる思いで、自分も準備の手伝いに向かう。

朝から昼にかけて昨夜の乱痴気騒ぎの後始末を行っていたので、

比較的スムーズに移動準備を完了することができた。

馬を操って大通りに行く。先頭を威圧感のある大男が務めるものだから、それに恐れをなした人間が奇声を上げて飛び退いている。おかげで傭兵団は前方を注意するまでもなく悠々と進んで行けた。

まるで大名行列だな、と最後尾につけるテツは思った。荷馬車や傭兵団員の格好はみすばらしいが、まとうオーともいうべきものが普通ではない。武人でなくとも感じられるほどだ。

向けられる奇異とも畏怖とも取れぬ視線が居心地悪くて仕方がない。小さくため息をつき、先に行く馬の尻でも眺めて気を紛らわすほかなかった。

苦行ともいえる行程を走破し、堅牢な城の目前に荷馬車をとめる。中から顔を覗かせたシンシアたちが「おおー」と歓声を上げていた。

城の衛兵は困惑した表情で近寄って来た。団長は彼をつかまえると、静かな調子で要件を伝えている。この巨体の大男は、体格に似合わず物静かに喋るものだから、テツは口を開閉するマンボウを思い出さずにはいられない。彼が無表情の魚顔であるのも一役かっているのだろう。

しばらく待たされたあと、現れたのは件の陰険な男だった。迷惑千万の札でも張っていそうな顔である。口元を引くつかせてテツたちを指さした。それから早口に何かまくし立てている。

団長は一応礼儀だからと、その男の応酬に口を挟む様子はなかった。むつつりと相手のいい分を聞き、ただ黙って睨み返した。

遠くからでもわかるほど男の腰は引けていた。へたり込まなかっただけでも賞賛されて然るべきだろう。温室育ちの人間には、あの
大男は猛毒でしかない。その眼光ひとつとっても体に優しいわけが
なかった。

顔を青ざめさせた男は、すごすごと退散するしかなかった。団長
はその後姿を、まるでダンゴムシでも見るかのような目で見送って
いた。

程なくして先程とは違う男がやってくる。心なしか憔悴した様子
である。嫌に低姿勢な動きで団長に應對している姿を見ると、テツ
は憐憫の情を感じずにはいられなかった。

「テツ、それからおまえ、ついて来い」

指名されたふたりであるテツとキョウイチは揃って「へ？」と間
抜け面を浮かべた。当惑する彼らを一瞥すると、団長はさつさと先
に行ってしまう。ふたりは一瞬間を見合わせ、やがてどちらともな
く早足で団長を追いかけていく。

城の中は二度目だというのに道順は覚えきれていない。テツは以
前に記憶した行程と比較しながら小姓のように付き従った。

辿り着いた部屋は以前と同様の部屋だった。そこには既にガーテ
イが腰を下ろして待っていた。待ち人が訪れたのに気づくと、彼女
は若干かたい笑顔で立ち上がる。

「話があるということだが」

「昨日の今日で申し訳ない。しかしながら、返答は早い方がいい

「と思いましたので」

ガーティにとって色よい返事ではないのだろうな、とふたりのやり取りを見て思う。テツの肌は張り詰めた部屋の空気を感じ取っていた。

昨夜の宿泊に関する謝辞や答礼のやり取りを終え、団長はおもむろに本題に入る。

「我ら傭兵団の仕官に関する件ですが」

「昨日は急かすような真似をして済まなかった。貴君らも仲間内で話し合つべき事柄も多いだろう。じっくり考えてもらつても構わない」

「我ら傭兵団の意志はそう千差万別ということもありませんのでね。話し合いは一晩もあれば十分でした」

「一晩どころか、話し合つてさえいないのに何をいつてるんだというテツの突っ込みは音をなさずに霧散した。」

「ガーティ様のお誘いは非常にありがたいことですが、今回は辞退させて頂きたく思います」

「……理由をきいてもいいかな？」

「我らは元来根無し草ゆえ、組織に組み込まれるのをよしとしない者がおります。それにガーティ様の進める組織編成には、我らのような傭兵は適しているとは思えないのです。自ら恥を公言するようで情けないですが、傭兵は最初に自らの命、次に金。そんな思考

をしている人間です。主君を守るような騎士には到底成り得ません」

「そんなことはない。あなたは成すべきことは成す人間だ。それはわたしが知っている」

ふたりの過去に何があつたのか知れないものの、ガーティの目には団長に対する信頼感があつた。貴族は傭兵を戦争の駒としか考えない連中が多い中、彼女の言葉は青臭いといえる。それでも、その真摯さは認めるしかないようで、団長も気分を害した様子はなかった。

「あなたたちセブンス傭兵団は、他の有象無象とは一線を画している。それは誰よりもあなたが理解しているはずだ」

「お褒め頂き光栄ですが、我らは傭兵。それ以上でもそれ以下でもありません。ご期待に添えず、申し訳ありません」

「……」

これ以上しつこく攻めても不利だと悟つたのか、ガーティは悔しげに黙り込んだ。視線を彷徨わせ、右手を唇に当てている。彼女の思案するときの癖なのだろう。

どうしてセブンス傭兵団に彼女が執着するのか見当がつかない。確かに粒ぞろいの精鋭を抱える集団ではあるが、所詮は弱小勢力である。マーン伯が保有する領土から徴兵すれば、かなりの人数を集められるはずなのだ。戦争では兵士の人数が最も重要であるから、一介の傭兵団を頼るよりか徴兵制度の充実をはかる方がよほど建設的といえる。それにいまだ主流なのは傭兵の雇入れである。消耗品として数えれば、金の無駄遣いとはならないはずなのだ。

「叛意させるのは難しい、か」

そう呟く口調は軽いものであったが、氣落ちした様子は隠せていない。ガーティの目尻は、どことなく力を失ったようだった。

部屋には気まずい沈黙が満ちた。キョウイチはそわそわと落ち着きない。視線で「どうなるんだ？」と訴えかけてくる。そんなことテツだつて教えて欲しい。予想はしていたものの、貴族からの誘いを断るのは後々悪影響を及ぼしかねない。特にマーソン伯は得意先であつたようだから、関係の悪化が懸念された。

ガーティの白い指がテーブルを小突く音が聞こえている。「それで」話の話題にでもしようと思つたのか、彼女は初めて団長の背後に佇む人間に視線を超越した。

「彼らはどういった人間なんだ？」

「新しい団員の候補です」

ほう、と感心したため息を漏らす。品定めするような目になった。ガーティは最初にキョウイチの頭から足まで眺め、それからテツにも同様の行程を行った。

やや不満そうに、

「ずいぶんと若いな」

「我が傭兵団において年齢は重要な要因ではありませんので」

「なるほど。貴君がそういうのだ、よほど腕が立つのだろうな」

挑む目付きでいうガーティに、キョウイチはむっとした表情を浮かべる。明らかに挑発されていた。

これはまずいと思っても諫める手段がないのでどうしようもない。テツは肝を冷やして何も起きぬことを願うしかなかった。

「ならばどうです？ 交友を深めるためにも模擬戦を行ってみては。実力をはかる相手はわたしが務めましょう。そちらの兵士たちもよい経験となるはずです」

「ふむ、名高い貴君に相手取って貰えるならば、我が兵士たちも名誉なことだろう。それにセブンス傭兵団に認められる剣とやらも見てみたい。どの程度の剣が振るえれば貴君が満足するのかわかるしな」

どうやら、傭兵団の勧誘はまだ諦めていないようだ。テツたちの剣を、その物差しにしようという魂胆であるらしい。あれよあれよという間に責任が重大になっている。自分たちを連れてきたのはこのためか、とテツは恨みがましい目を向ける。

団長は涼しい顔を崩さない。「では、城の修練場を借りても構いませんか？」テツからの熱線など、どこ吹く風の彼がガーティにたずねる。

ちょうどいい時間帯だ、と乗り気な彼女は早速腰を上げた。血色のいい舌で下唇を湿らせながら、

「わたしの部下にも腕のたつ者がいる。呼んでこさせよう」

「他の団員を入城させてもよろしいですか？ 彼らにも見物させてやりたいので」

ガーティは快諾した。「では準備があるので失礼するよ」と調子を戻した様子で部屋を退出する。

それを見送ったテツは団長に抗議しようとし、思いとどまる。いったん決定した以上、文句をいっても意味はない。ならばその目的とするところをきくべきだろう。

「別に大した意味はない」

団長はつまらなそうにいいきった。

「だが本気でやれ。でないと死ぬぞ」

第28話

ぎゃあ、という悲鳴と共に崩れ落ちる男。立ち上がったこないことを確かめると、団長は身体力を抜いた。既に4名の剣士が意識をとばして伸びている。そのどれもが自他共に認める実力者だっただけに、城の兵士たちは言葉を失っている。彼らも噂でセブンス傭兵団の名を耳にしたことはあったとしても、実際に目の当たりにした衝撃は凄まじいものがあった。

巨大な身体にマッチングしている全長の剣。それは一般に長剣と呼ばれる代物であった。だが団長がそれを手に取ると、まるで長さや重さを感じさせなくなる。まるで人体の延長線のように扱う技量は誰もが舌を巻いた。

初めは意気込んでいた兵士たちも、手酷くやられる仲間を見て、挑戦する気概がそがれてしまったようだった。「おまえ挑戦しろよ」「い、いや、やめとく」という会話が辺りから聞こえてくる。

その中から、ひとりの男が歩み出てくる。隊長だ、と誰かがいった。その男は恰幅のいい壮年の男で、身長を別にすれば、体格は団長に勝るとも劣らない。

部下が殆どやられてしまったので、出てこないわけにはいかなかったのだろう。その表情は緊張していたが、かたくなり過ぎてもおらず、実力を発揮できないこともなさそうだった。

すでに多数を相手取っているはずの団長は息ひとつ乱していない。そのことから実力の程が想像できた。

今日一番の対戦カードだと悟った周囲の注目度が増した。離れた位置で観戦しているガーティも、自勢最良の剣士の活躍を期待して目を輝かせていた。

団長と男の両者は、ぽつかりと開いた人混みの狭間で立ち会う。剣を眼前で垂直に立て、目礼し、剣の打ち合いは始まった。

「あのオッサンやるなあ」

テツの隣でポールが呟く。確かに、いままでとは違って早々に決着がつくということもない。派手さはなかった。それでも、手に汗握る間合いの取り合いは、剣を手にしたことのある者ならば理解することができた。

「団長は丁寧な剣を振るうんですね」

ポールと一緒にテツをサンドウィッチにしているミコトがみな的心境を代弁してみせる。団長とは共に戦場を駆けた仲であったが、じつくりと剣を振るう姿を見たのは今回が初めてである。

体格の差というものは如何ともしがたく、それは一種の才能として数えても問題ない。どんなに技を極めたとしても、小柄な人物と大柄な人物とでは、差が出てくる。でなければ「階級差」などという言葉も必要ないはずである。

その点、恵まれた体格に任せた力押しの剣は馬鹿にならない。蝶のように舞い剣戟をかわす、なんて離れ業はごく一部の達人にしかできないのだから。大抵は剣を受けざるを得ない。そして、その受け身ごと叩き折る可能性を秘めた剣が団長の剣である。

だというのに、実際の彼は慎重に事を進める。やぶれかぶれ、なんて単語は彼の辞書にはないようで、確実に追い込んで攻め倒すのだ。大振りの隙を狙う相手からすれば悪夢のような嫌らしさである。

剣戟の音はまだ続いている。いい加減焦れる頃ではないか、と誰もが思い始めたとき、団長が動いた。いや、動いたという表現は語弊があるかもしれない。彼はそこから一步も足を動かしていない。だが確実に動いた。変わったのだ。

——団長のオーラとも呼べる気質が。

それまでとはうって変わった凄惨な表情。身体中から相手をひねり殺さんとする殺気が溢れ出ている。ドロドロとした空気はみな瞳に描写されていても不思議ではなかった。

そうだ、これだ。テツは口元が引きつるのを感じながら思った。団長とのファーストコンタクト、仲間が惨殺されたときのあの場面。どうしようもなく恐ろしく、どうしようもなく魅了される剣。

悪意を塗り潰して微塵も感じさせないほどの、純粹なまでに殺意をむき出しにした剣。目が合っただけで死んだのではないかと錯覚さえしてしまう。圧倒的な剣だ。

周囲の人間は空気にのまれ、青ざめている。ガーターさえ目を見開いて身動きが取れないでいる。団長はたったひとりであるはずなのに、この場にいる全員の生殺与奪権を握っているかのようだった。

相手の男は動きの精彩を欠いていた。意志とは無関係に身体は殺気に反応してしまい、思うように動けないのだ。動物的勘が鋭けれ

ば鋭いほど、その傾向は顕著であった。それはつまり、相手が場数を踏んだ達人であればあるほど効果があるということになる。

その後の推移は推して知るべしである。突きつけられた剣が離れたとき、自分の首がつながっているのが信じられないという顔をする男が印象的だった。

勝敗が決まっても、誰も口を開く者はいなかった。判を並べたように強ばらせた顔のまま沈黙している。

原因はいうまでもなくあの太男のせいだ。勝負が終わっても無遠慮に出し続ける殺気は不細工ともいえる。少しでも近づけば斬って捨てられそうな雰囲気である。心なしか傭兵団員も緊張した面持ちだった。

「セブンス傭兵団に認められる剣が見たいとおっしゃいましたね」

団長の深く途切れがちな声が走った。返答する者が皆無の中、やっと自分に向けられて発せられたと気づいたガーティが「あ、ああ」と答える。

それに頷き、振り返ってキョウイチを一瞥した彼はアゴをしゃくった。次に相手するのはキョウイチだった。

「キョウちゃん……！」

険しい顔で下唇をかむ恋人の名を呼ぶ。スイはキョウイチの腕を離すまいと握っていた。いまの団長はまるで容赦がない。彼女でなくとも心配になるのは当然のことだった。

スイの頭をなでて落ち着かせたキョウイチは、テツに視線を超越した。それに答えるテツもいいいたことはわかっていた。キョウイチの次はテツの番なのだ。最も、本気でかからなければ怪我とかいう以前の問題がある。どういふわけかスイッチの入った団長相手では、殺す気でのぞまないと、気がついたら首が転がっていた事態になりかねない。

武器を持たされたときから予想はしていたのだ。今日は何かあると。

ゆっくりとした足取りでキョウイチは団長と向かい合う位置まで進んで行く。彼とて元の世界では道場でも屈指の実力者であったのだ。ただではやられないという自負があった。

次の相手がまだ若い青年だとわかると、周囲からはどよめきが上がった。誰もがキョウイチでは力不足だと感じているのだ。彼らからすれば、童顔の剣士など見習いの少年という認識でしかない。自分たちの隊長を制した男の相手が務まるとは夢にも思わなかった。

「では、始めるか」

そういつて団長が剣を上段に構えたとき、キョウイチは愕然とした。まるで大山を前にしているようだった。自身の何倍、何十倍の大きさがあるではないか。ただでさえ見上げる形であった身長差は、絶望的な隔たりとなってキョウイチに襲いかかってきた。

剣を抜刀しながら身体を逸らす。考えている暇などなかった。彼は振り下ろされた剣を確認して、自身の直感が正しかったことを悟った。あと一秒でも初動が遅れていたならば、真っ二つにされていたことだろう。

まるで太刀筋が見えない。悔しさに齒噛みする。これは能力の欠損のせいか、はたまた団長の剣が速すぎるせいなのか。

距離を取って呼吸を落ち着かせることに集中する。このまま相手のペースに巻き込まれるのだけは避けたかった。慎重に、と思考しようとして、あの殺気が襲いかかってくる。

くそ、くそ、と混乱する狭間で毒づくしかない。まるで休む暇を与えない威嚇だった。波のように緩急を付けて放たれる殺気はキヨウイチの精神をも攻撃してくる。身体的にも精神的にも疲労は蓄積し、たった数分の立ち会いで体力は消耗されていた。どんなに体力自慢の人間でも、試合になればそのタフネスの全てを出し切るなどできやしない。

荒い息をひっきりなしに繰り返し、「能力さえ使えば」という女々しい現実逃避の雑念が紛れ込む。キヨウイチにだってそれが褒められたことではないと理解している。けれど能力とプライドとを一度に失った彼は、卑屈の悪魔に捕らわれかけていた。

腕が重い。足が重い。身体が重い。いまだに思考と身体の不調は修正できていないのだ。『気』を扱う能力者として最適化された彼の剣術体系は、一度ゼロから創り直さないとならなかった。

「どうした小僧ウ。まるで張り合いのない剣だ」

一気に距離を詰めた団長は、剣を鏢競り合いさせながらいう。やろうと思えば一気に押し切れるはずなのに、わざわざ挑発をかけてくるのはキヨウイチが遊ばれている証拠だった。

「おまえの剣には中身がない」

「くっ」

「信念がない。情熱もない。殺気もない。いったい何をもって剣を振るっているんだ、おまえは」

団長の言葉が心に突き刺さった。勝手なことをいうな、と反論しなくてもできない。少しでも気を逸らせば、袈裟斬りにされてお陀仏である。キヨウイチは恐怖と悔しさに犯されながらも腕の力だけは緩めなかった。

突然、トラックにでも追突されたような衝撃が走った。キヨウイチはすんでのところでバランスを取り戻して着地する。信じられないことに、彼の身体はゆうに2メートル近くも弾き飛ばされていた。

「なぜだ」

団長は殺気をまとったまま、顔をうつむかせていう。誰かを呪うかの如き声色だ。その得体の知れなさに怖気が走る。キヨウイチは呼吸が荒くなっているのを自覚していた。

「なぜ本気でこない？」

一直線に見据えられた彼は逃げ出したかった。おれはいつたい、何を相手にして戦っているのだ？

筋肉は縮こまり、動きを阻害する。呼吸をしづらくする。視界は狭まって相手の動きについていけなくなる。

「なぜ殺す気でこない！」

団長の怒声が響いた。スイはその大音量にびくついてしまい、いまにも泣き出しそうであった。しかも恋人が命のやり取りをしているとしか思えない舞台に立たされているのだ。

ミコトは慰めるように彼女を抱き寄せた。

「ミコトさん……」

大丈夫だよ、なんて無責任なことはいえなかった。あの男なら、模擬戦という前提に囚われず弟を殺す。そう確信していたからだ。ならば文字通り死ぬ気で剣を振るわねばならない。それだけが生き残る術だった。

フードのふたり組——ティアとヘレンも余裕をなくした表情で見守っている。彼女たちの弟に対する恩義は確かなようで、心底心配している様子が伝わってくる。

「なんで、こんな」

口元を両手で覆い、ティアは茫然と呟いた。まだ幼い貴族のご令嬢には刺激が強すぎる光景だった。大の大人でさえ怖気づく殺気である。彼女の年齢を考えれば、意識を保っていられるだけでも賞賛されるべきだろう。

ミコトは弟の、キョウイチの剣を信じていた。それでも、能力の喪失や団長相手だという不確定要素が存在する。決して死なない、という楽観視はどうしてもできなかった。

他の面々、ガーティをはじめとした城の兵たちは、思った以上に奮闘する青年に惜しみない賞賛を送っていた。殺気に満ちた空気にも慣れてきたのか、緩慢ながらも動きが見られるようになった。

他方、傭兵団員は予想通りという表情である。ガヴァンはむっつり、ポールは興味深そうに観戦している。唯一暇を持て余しているのが紅一点クリスティナで、何を見ているのかわからない目を向けていた。

そして、スイと同じくらい動揺しているのが、弟の幼なじみである。

「なんだよ。どうしたんだよ、キョウイチ。なんでやられっぱなしなんだよ。動きがのろいんだよ……！」

右手を神経質に揺らし、まるで落ち着きがない。テツは顔を歪めながら、罵声とも取れる言葉を漏らす。その目はあり得ない映像を見ているかのように瞳孔が開いている。

ミコトは声をかけられなかった。痛ましい弟分の姿を見ていることしかできない。これはテツ自身の問題であり、他人がどうこうできるものではないのだ。

だが、おぼろげながらも、テツの心境を慮ることはできる。彼にとって、キョウイチは常に先を行く目標だったのだ。幼なじみとして長い時間を過ごし、どれだけやってもキョウイチに及ばないこと

を悟る。それでも絶望しなかった。むしろ喜ばしいとさえ思った。目標とすべき人間はすぐ傍にいて、その近くで自身も切磋琢磨できるのだ。恵まれた環境である。それは遠見テツが、嫉妬という感情とは付き合いが浅い性格だったおかげもあっていえることだった。

キョウイチは強かった。テツにとって、彼はヒーローだったのだ。行くべき道を示してくれる友。常に前に行く強者。出会ってからいまままで、そしてこの世界に飛ばされてからも、認識が変わることはなかった。

「能力さえ」

血を吐くような苦渋の表情だった。テツは震える声で続ける。

「能力さえ、使えれば……！」

『氣』という能力の恩恵が失われた世界。最も影響を受けたのは他でもない能力者であったが、無能力であったテツにもその影響はあったのだ。

ミコトは当初、能力が失われたことによつて、テツが道場生の中の心的人物になると踏んでいた。それは彼が能力の喪失による影響を受けなかったこともあるし、いままで軽んじられていたのだから、みなが弱体化したいま、リーダーシップを取りたがるのではないかと想像していたのだ。

実際には全く逆で、テツの思考はかつてと寸分も変わらなかった。相変わらず競争心は枯れたままだ。キョウイチに従うことに微塵も不満を感じていない。

少なくとも変化があるのではと予想していたミコトにとって、それがいいことなのか悪いことなのか判断がつかなかった。

結局のところ、遠見テツは能力を持たない人間ではあったものの、ミコトたち能力者と同じ世界に生きる人間だったのである。だから能力の存在を前提として物事を考える。

これでテツが反能力主義者であったなら話は別だったかもしれない。テツにいわせれば「なぜ能力者を敵視するのか」という疑問があるわけで、それは自然発生的に備わった才能でしかない。文句をいうのは、「おれの足が遅いのは不公平だ」と不平を漏らすくらいに大人気ない話だと彼は考えるのだ。

そんな思考をする彼は、能力者を、キョウイチやスイ、ミコトを半ば神聖視して見ている節があつた。本人には全く自覚はない。彼らが住んでいた世界において、無能力者の者に多く見られる傾向だった。

同じ人間でありながら、自分よりも一段階上に行く人間。ある者は能力者を嫌悪し、排斥しようとする。またある者は能力者を崇敬し、崇め讃える。テツはその後者に近いながらも、現実的な視点を見失わない珍しいタイプであつた。

けれども、テツのキョウイチに対する思いだけは別だったのだ。

防戦一方のキョウイチはすでに敗れようとしている。その事実を信じられないとテツの目は物語っていた。

無情にも振るわれる剣。受け流すことができなかったキョウイチの刀は、根元からへし折れる。最後の悲鳴とばかりに鳴り響いた甲

高い破壊音は、やけに澄んだ音色をしていた。

嘘だ、と誰かがいった。それはキョウイチなのか、テツなのか、判断がつかない。あるいはふたりがいったのかもしれない。

愛刀を折られたことによってキョウイチは完全に戦意喪失した。幸いにも、その体たらくを一瞥した団長は、興味を失くしたように剣を引いた。

スイはすぐさま駆け出して恋人の元へと向かう。弟にはスイがいるから大丈夫だと安堵する。剣士であるミコトには、愛刀を折られ敗北するショックは嫌というほどに理解できた。だが、スイならばキョウイチをうまく慰めてくれるに違いなかった。

問題なのは、と放心するテツの手を握りしめる。されるがままで握り返される感触はない。大丈夫でないのは明らかだった。そしてどう言葉をかけるべきかミコトにはわからない。きっとテツ自身にさえ、自らの心境の整理がついていないはずなのだ。

遠見テツを長年縛ってきた鎖。彼をがんじがらめにしているそれは、ある意味で保護する役割も負っている。遠くに行ってしまうような彼をつなぎとめているのだ。

「次だ」

団長は仕切り直しをするために、静かな調子でいった。撒き散らされていた殺気は矛先を一旦収めたものの、相手が現れればすぐにでも牙をむくだろう。

ショックから立ち直っていないテツは、ミコトに支えられて一歩

を踏みしめる。まるで闘気を感じさせない。これでは勝負にならないのではないかと思った。

名残り惜しく離れていく右手。最後の人差し指の感触まで確かめたミコトは、いづべきかいわざるべきか迷っていた言葉を贈る。

「テツ。剣はおまえを裏切らないよ」

「……」

視線を寄越したテツは、すぐさまかぶりを振って団長の下へと向かった。複雑な胸中を示すかのように、歯を軋ませている。

剣は遠見テツを裏切らない。ならば、人間はどうなのだろう。キウイチは、スイは、そして自分は。ミコトは己が絶対に裏切らない忠義の人だとは到底思えなかった。人間はときに他人どころか自分さえも裏切る。それも自覚しないまま無意識に。そんな自分がテツを裏切らないなどと断言できるだろうか。

かつて、彼の想いを一度裏切った過去のあるミコトは、吐いた言葉の皮肉さに自嘲した。

剣は裏切らない。

——裏返せば、剣以外は、おおよそ彼を裏切るのだ。

第29話

途中、敗れたキョウイチとすれ違った。彼らは視線を交わさない。互いに思うところがあった。それは自分自身の問題でありながら、相手に対する問題でもある二面性を孕んでいた。

キョウイチの刀は折れた。けれど、キョウイチは生きている。それは喜ばしいことであるはずなのに、テツは素直に喜ぶことができない。

テツは愕然とした。心の奥底で、生き恥を晒したキョウイチを蔑む自分を認めたからだ。困惑する。勝敗なんかよりも、生きていることの方がよっぽど大切であるはずなのに。テツ自身でさえ、最優先するのが生き残ることであるのに。

キョウイチが敗北した事実が酷く腹立たしい。

テツは全ての元凶ともいえる男と向かい合った。この男から始まったのだ。仲間を殺された剣に魅せられ、殺人を強要され、テツの目標だった剣を叩き折った。この人間はテツにあらゆる影響を与える。良くも悪くも、ありとあらゆる影響を。

それが途方もなく気に食わない。そしてどうしようもなく恐ろしい。

目を合わせてしまった。それだけで心停止してしまいそうになる。ハツタリでも構わないから意気地のない姿は見せたくない。そんな微かな決意も、団長の圧倒的存在感の前には消し飛ばされてしまった。

初めて出会ったときのことを思い出す。テツは戦おうとは、一瞬でも考えなかった。剣を合わせたら負ける。そう直感したからこそ抵抗しなかったのだ。

だが今回は違う。抵抗しなかったら殺される。団長はわずかな慈悲も見せずに遠見テツを片々に分解せしめる。それこそ野鳥の首を落とすように気負いもなく。

ガチガチと歯がなった。眉は緊張でへの字に曲がり、腰は引けている。なんて無様だ、と自分でも思う。

周囲の観戦人は、いきなりの弱腰に白けた目を向けていた。けれどテツは少しも恥ずかしいとは思わなかった。あのキョウイチが負けたのだ。自分なんか敵うはずがないのだ。キョウイチが強い。遠見テツよりもずっと強い。

無言の圧力がかかり始める。早く開始しろ、と。

「無様だな」

団長は吐き捨てた。子犬のように怯えるテツを見据え、口元を歪める。

けれどその表情は、何かを期待していた。弱さを侮辱しながらも、そんなものには興味はないのだ。

彼は知っている。振り下ろされる剣の前には、勇気も友情も、愛も希望も意味をなさない。それと同様に、恐怖や憎悪といった負の感情も、剣が与える結末には何の影響も与えない。

「ヤツが負けたからといって何の意味がある。おまえはただアイツに逃避していただけではないのか？ 自分は強い人間ではない。善良な人間ではない。常に一步引いた立場をとって自分を守る。深く人と関わらないのは、自分が傷つきたくないからだ」

饒舌に団長は語った。ニヤニヤと楽しんでいる気概さえ見せている。いきなり始まった口撃に、周囲は困惑した様子だった。

その中で、ミコトは悔しげに、アリアは動揺もない静かな様子でテツを見守っている。ふたりはそれぞれに確信があった。その色は、一方は暗く、もう一方は明るい対極的なものだ。

「ぬるいなあ、テツウ……！ ぬるすぎる。冷めた調子ならば格好がつくのか？ 熱くなる輩を卑下できるのか？ 自分は違つと安心できるのか？ 他人よりも劣る自分を見ないで済むからか？ どうなんだ、テツ」

一方的な罵倒にも何ら反論できない。それは真実であつたからだ。テツが見ないように、考えないようにしている暗部というべきものを団長は穿ってくる。

ぼくには関係ない。そう気取らないと正気でいらなかった。いっしょに醜く変形し、虚像で固めた自分が実像と成り代わつた。そのことにすら気づかない。気づいてはいけないと誤魔化し続けていた。

キョウイチという目標は、いわばその隠れ蓑だった。自身よりも圧倒的強者がいるから、勝てなくても仕方がないと考えることができた。だが、そのキョウイチも敗れ去つた。

能力者などこの世界にはいない。

この世界にいるのは、遠見テツと同じ無能力者だけだ。

誤魔化しの効かない同じルールの上に立たされているのだ。

「あの小僧の剣には何もなかった。ならば、おまえの剣は？」

恐怖は沸点を超えて、嘔吐感さえ催させる。血の気が引いた身体は極寒の中にいるかのようだ。テツは無性に人恋しくなった。思い出されるのは、ミコトのあたたかな肌だ。あの夜、寄り添ったときに感じた、充実感だ。幸福感だ。

なのにいま立っている世界は、とても寒い。酷く。どうしようもない寒さだ。

孤独感。ひとりぼっち。恐ろしいまでの虚無感だ。

それは、遠見テツにとってありふれたものだった。

そうだ。そうなのだ。剣には心がこもるなんて嘘っぱちだ。剣は剣でしかない。剣が人を表すなんて嘘っぱちだ。剣は武器でしかない。剣は相棒だなんて嘘っぱちだ。そんなのは人間が勝手に妄想した幻想でしかない。

キョウイチの剣には何もなかった？ そんなの当たり前だろう。

「――ク」

団長がわらった。テツが口元を歪めた。

剣は何も語らない。なぜなら、剣は人間を斬り殺すために創り出されたのだから。

半身になり、身体力を抜く。テツは目を見開いて団長を見据えた。強大な存在感。圧倒的な力量。顎門を開いて喰い殺さんとする殺気。そのどれもが、意味をもたない。

なぜなら、それらは剣に一切の意味を与えないから。

触れる。それは冷え切ったテツの指先よりもさらに冷え切っていた。かたく、無骨で冷たい感触しか返さない。

それが剣だった。それが唯一の印だった。

——テツ。剣はおまえを裏切らないよ。

そう。何もなくても、剣は裏切らない。自分さえ裏切ったとしても、鈍色の鉄は裏切らない。この世で唯一確かな真実だった。

人間は信用ならない、なんてすれた台詞をいう資格は遠見テツは持ち得ない。なぜなら自分自身が人間という存在を信じていないからだ。信じようとしめない者が、なぜ他人から信じられようか。ただ子供のように求めるだけの人間に価値はない。

それでいい。それこそが自分に相応しい。人を傷つけるしか能のない剣に魅入られた人間の末路としては、これ以上に相応しい扱いが存在するだろうか。

遠見テツは、剣を抜き放つ。この瞬間、彼は生きることを忘れ去

った。

なんだ、と誰かが呟く。違和感は肥大化して誰もが感じ取れるほどになった。風向きが変わるように周囲の空気が変化する。団長に支配されていたはずの戦場に綻びがで始める。

それは違和感として感じられるものだった。その発生源、向き合ったふたりの男は、微動だにしていない。ただ睨み合っているだけにしか見えない。だが周囲の人間はわかっていて、すでに斬り合いは始まっているのだと。

すでに両者とも自身の間合いに入っている。ゆえに動くことができない。行動に移そうとする一瞬を相手は狙ってくるのだと知っているのだ。

「おいおい、なんだよアイツ」

一本取られたな、という表情でポールは肩をすくめた。テツが実力者であるのは承知していたが、団長と真剣にやり合えるほどとは思ってもみなかったのだ。下手すれば自分と同等かそれ以上。あの団長とともに斬り合える精神をもった人間は只者ではないのだから。

先に動いたのはテツだった。下半身のバネを使って後ろに退く。その際に剣は上段に構えられており、団長が追撃をかければ引き面を放つことができる。団長は警戒して誘いには乗らなかった。

虚を突かれたのはその直後の行動だった。テツは間合いを取るや否や、今度は一気に距離を詰めた。その奇襲攻撃にも団長は動じず冷静にさばく。横薙ぎの剣を弾き、長大な剣を切り上げた。

ひゅ、とテツの前髪が剣圧で舞った。薄皮一枚先を死の塊が通り過ぎていく。彼はそれを冷静に見送った。

テツの顔はすでに強ばっているから、これ以上恐怖の入り込む余地はない。恐れおののき、感情が麻痺している彼は、はたから見れば笑みを浮べているようにしか見えない。観戦している人間は、いままでの誰ともこの青年は違っているのだと思わずにはいられなかった。

息のつかない攻防が繰り広げられる。テツは団長の一撃を貰うことを何よりも避けていた。最低でも受け流せなければ、重量で負け、筋力で負けているテツの剣は砕け散って終わる。

そう、遠見テツが生きるも死ぬも、誰でもなく自分自身の力量にかかっている。それが楽しい。わくわくする。そしてふざけていると吐き捨てる。

体温は徐々に上昇し、熱は筋肉を解きほぐす。テツの動きはさらに俊敏さを増した。

「……テツさま、凄い」

呆けたように呟くアリアの言葉は、みなのに似通った感想だった。傭兵団員たちは、キョウイチもテツも、すぐに片が付くと踏んでいた。もしかしたらどちらかが死ぬかもしれないとまで思ってい

た。だが蓋を開けてみれば、遠見テツは団長を相手に善戦しているではないか。

上段からの斬り下ろしに対し、テツは右に避ける。そのまま息をつかずに再度ステップを踏む。団長の斬り下ろしからの振り払いは、虚空を斬り裂くに終わった。

その様子を見て、団員たちは共通の考えに至る。

「団長と戦い慣れてる……？」

ポールが独り言を口にする。確かに、パワータイプとの戦いに慣れているようだった。テツは経験からしか得られないスムーズな動きで剣をさばいている。付け刃では決して行えない所業だった。

テツの奮闘ぶりに、観戦していた人間が再び熱を帯び始める。口々にエールを飛ばしている。その内容はテツを応援するものだった。

誰の目から見ても、圧倒的有利なのは団長だった。それゆえに踏みとどまるテツを応援したくなるのだ。歪んだ笑みの形で固まった表情は不気味であった。けれども、その一挙手一投足に健気さを感じさせる。天才的な剣ではない、鍛錬に裏打ちされた剣だ。テツが引きつった顔で剣を振るうたび、彼がどれだけ時間をかけてそれを創り上げてきたのかを痛感させる。

「こんなに強かったんだね、テツは」

ミコトの脳裏には、黙々と剣を振り続ける幼き日のテツが蘇った。そしてスライド写真のように、背が伸びて、体つきが逞しくなっても、ただ寡黙に剣と向き合う姿が思い出される。

弟分の成長に驚かされ、それを嬉しく思う一方で苦々しく思う。団長が狙っていたのはまさにこのときだったのかもしれない。テツを追い込み、剣を振るわせる。うまく行かなければ殺してしまう勢いで実行された結果は、まさに団長の狙い通りとなったに違いなかった。

ミコトは複雑に、アリアは純粋な尊敬でテツの姿を追う。

傭兵団の面々はテツの認識を改めざるを得なかった。

そしてキョウイチは姉とよく似た心境に支配されており、言葉を失って驚愕するスイとは違った危機感に囚われていた。

状況はいよいよ佳境に突入した。団長の放った一線がテツの顔、右側面を襲った。顔を仰け反らせて避けたテツだったが避け切れず、少くない血飛沫が宙を舞う。それでも怯まない彼は流れでる血を尾に引きながら、一息に剣をなぎ払った。

腕を狙った剣戟だった。団長は既に剣を振り下ろしており、腕は伸びている状態である。一瞬の攻防であった。目で追っていた人間は、切り落とされる団長の腕を幻想した。

驚くべきことに、団長は回避動作を取らなかった。それどころか、相手に向かって突進していった。自身に向かってくる剣に飛び込むなんて、普通はできっこない。だがその結果は、テツの剣は振り切られず、相手の豪腕を浅く斬っただけに終わった。

そして、その結果は勝敗をも決定していた。テツの剣はこれ以上押せず、引くこともできない。ショートソードであっても対応でき

ないほどの密着状態である。一方、団長の右手は距離に潰されているものの、残った左手で剣を喉元に、テツの晒された喉元に突きつけていた。その刃の部分が剣の腹であったとしても、十分に喉を切り裂いて余りある。

辺りはしん、と静まり返った。その中心で、テツと団長は顔を突き合わせている。見上げる形となったテツの目は死んでいない。いつそぎらついていた。自分の喉が切り裂かれたとしても、相手を咬み殺す気概だった。

「わたしの勝ちだな」団長はテツにいい聞かせるために口に出したようだった。「それともこのまま首を飛ばして欲しいか？」それもいいと壮絶な笑みを浮かべている。この男はやるというたらやるのだ。あと少し時間を経ていたならば、予告通りの事態が発生していたはずだった。

硬直した筋肉をゆっくりと引き剥がす。テツは油断なく団長から離れた。その目には、自分が映っている。団長の顔ではない。あのと、剣を取ったときから、テツの世界は自分と自分でないものだけが存在する世界となっていた。とてもシンプルで、剣を振るうためだけに最適化された世界観だ。そこでは、自分とそうでないものとの区別しかない。意識をする個体が自分なのだとしたら、他の目に映るものは「自分でないもの」だ。そのものたちはテツと同じ顔をしていた。同じ顔をしているからこそ、自分でないと区別することができる。もしそれらが多種多様な顔をしていたならば、どうして自分でないと判断できようか。

流れ落ちる熱と共に、視界もぼやけてくる。ドッペルゲンガーだった相手が徐々に団長の顔に戻ってくる。それに伴って闘争本能も冷却され、脳内のドーパミンが抑制される。

ぼくは負けたのだ、と点滅する視界でテツは思った。それは剣術を志してから幾度となく繰り返されてきた感想だった。彼にとって馴染み深く、心地良いのが皮肉だった。

そうして、プツンと電源を切るようにテツの意識は途切れた。

第30話

遠見テツが目を覚ましたのは、模擬戦の次の日だった。一日はすでに終わりの準備を始めており、半開きにされた戸は西日に照らされている。空気に蓄えられていた熱が少しずつ失われていって、清々しいほどの麗清さを帯びてくる時間帯。

閉じられていた瞼が開かれるのをミコトは確認する。彼女の姿を認めたあと、辺りを探るように視線を走らせたテツは、「ここは？」と少ししゃがれた声でたずねた。本人は予想外の声を発したことに気づいて目をしばたかせている。

木製のテーブルに置かれていたグラスから水を注ぎ、ミコトはコップをテツに手渡した。水面に映る自分の顔をしばらくの間眺めていた彼は、最高の酒でも味わうかのように水を口に含んだ。

彼らがいるのは城の一角に設けられた部屋である。怪我人を一時的に収容する部屋だと告げると、テツは納得して頷いた。負傷した顔の右側面が手当てされているので、ここがどこか予想がついたのだろう。

「丸一日眠っていたのよ」

「どうりで寝起きが爽快なはずですよ」

テツは少しも晴ればれとしない表情で皮肉をいった。顔色はあまりよくない。身体の中の、何か大切なものを燃焼させていたような疲労感が現れている。それはきつと命のやり取りによって消耗されてしまったのだ。

ミコトは彼の負担にならないよう、気遣いながら状況を説明した。あのあと倒れたテツは手当てするために運び出され、傭兵団は城に世話になっている。最後の試合が効いたようで、尾ひれどころか背びれがついた噂は城内を、領内を闊歩しているらしい。その大部分に共通しているのが、「城の隊長が傭兵団長に敗れた」「それらに劣らない少年剣士がいる」ということだった。

「少年……」

「まあ、ここの人たちから見れば、あたしたちはみんな幼く見えるらしいし」

複雑な顔をするテツをフォローする。ミコトは弟分の微妙な思春期真っ盛りの心境を慮った。少年とも青年とも取れない半端な年代の男の子だ。実の弟も扱い慣れているとはいえないし、少々彼女の手には余る問題である。

「これ以上変な噂が広まらなきゃいいけど」

「娯楽が少ないせいか、噂話好きだもんね、この世界の人たちは」

傭兵団というごく狭いコミュニティの中でさえ、誰と誰が親密にしていたとか、陰悪になったという話が話題になる。田舎の井戸端会議をさらに強力にしたようなものかもしれない。なかった。

やれやれ、とかぶりを振ったテツは、再びベッドの抱擁を受け入れた。右腕で顔の半面を覆って沈黙する。

「どうしたの？」

ミコトは心配になってたずねた。

「いや、もう少し粘れたんじゃないかって」

「え？」

「少し調子に乗り過ぎたのかもしれませんが。フェイクを利用した攻撃は団長の十八番だったはずなんです。それに思い立ってながら、わざわざ罠にはまりにいくなんて。馬鹿な真似をしたもんです」

肉食獣のような眼光を目の当たりにしてミコトは言葉を失った。

目を覚ましたばかりだというのに、テツは昨日の試合を省みている。まるでそれしか興味のないように。

そしていまになって気づく。顔つきの険しさが抜けきっていないのだ。これまでならば、剣を手放せば戻っていた表情が、こびり付いて離れていない。本人はそんなことに一切関心を払わずに、ブツブツと反省点や改善点を述べている。

「て、テツ。目が覚めたばかりなんだから、少しは休むことに集中しないと駄目だよ」

「目に焼き付いているうちに剣を振りたいんですよ。あの感覚を覚えているうちにモノにしたい。姉さんだってわかるでしょう？ 貴重な経験っていうのは、再び味わえるものじゃないってこと」

「それは、そうだけど……」

ともすれば剣を振りにいく、とでもいい出しそうな雰囲気だった。もしそんな妄言をいうようならば、ベッドに張り付けてでも休ませるつもりだった。

ミコトの決意を読み取ったのか、それ以上話題を蒸し返すことはしなかった。それでも、テツの目付きは戻らないままだ。心なしか、瞳の色が淀んでいるように感じられた。

なんてことだ、とミコトは暗闇に突き落とされた錯覚に陥った。あの団長との死闘は遠見テツをさらに歪めさせてしまったのだ。剣の魔力に囚われてしまったのだ。危ういところで持ちこたえていたテツの立ち位置を一気に向こう側へ連れ去ってしまった。

おかしいと思っていたのだ。城の謁見にキョウイチとテツを連れ たって行ったときから。間違いなくこれは団長がはかったことだった。キョウイチも、ガーティも傭兵団のみなも利用されたのだ。

遠見テツを剣の道に引きずり込むという目的のために。この弟分の何をもって狙いを定めたのか、いまならばおぼろげにわかる。きっと団長は遠見テツに自らを見たのだ。性格や剣術ではない。

貪欲さだ。 剣に対する貪欲さだ。

団長とテツが剣を合わせているとき、まるで同じ気配が戦っているようだった。団長は悠々としていたが、テツの方は得体の知れぬ激情に駆られているようだった。それはきつと同族憎悪に似た感情だったのかもしれない。

こんなのは、いけない。

そう確信はできても、ミコトに彼をどうすることなんてできそうになかった。身体を差し出したとしても彼は拒む。きっと愛を告げたとしても。

ぐ、と歯を軋ませる。テツのことは誰よりも心配だった。そして好意を持っていた。けれどもそれは、状況を好転させる材料にはならないのだ。遠見テツは、「愛」では動かない。変わらない。変えられない。

ならば――残された方法は限られる。

「ともかくさ、早く体調を戻しなよ。お城のみながテツに会いたがつていたよ」

「げ」

「そんな嫌な顔をするんじゃないよ。ガーティ様も偉く感心していたわ。『あのような若者がいるとはな……！』とかいつててね」

「この通り、ぼくはメタメタに叩きのめされたんですよ？ 何で持ち上げられなきゃならないんですか」

理解できない、とテツは首を振った。

「そりゃあ、あの団長と五分、じゃないな。三分くらいの戦いをしたからよ。傭兵団員だって、まともにやり合えるのは副団長くらいらしいわよ。あのクリステイナまで見舞いに来るんだから、傭兵団員の株式会社テツの株はうなぎ登りなわけ」

「すぐに暴落しそうですけどね……」

みんなの前で裸踊りでもすれば暴落するかな、と真剣な表情で検討する彼を「お願いだから早まらないで」と落ち着かせる。どうしてもこの子は他人の賞賛を素直に受け取れないかな、と何度目になるかも知れない不満を思う。昔から褒められても嬉しそくにしない男の子だった。彼くらい年齢ならば、異性はもちろん、同性にだって褒められても調子に乗るはずなのに。

その彼が満面の笑みで嬉しそにしたことなんて、と。そう記憶の海を探つて気づく。何か大切な記憶だ。喉に小骨が刺さったような気分になった。彼女にとって、大切な記憶だったはずなのだ。

「どうかしましたか？」

「あー、うつん。なんでもない」

釈然としないまでも、思い出せない記憶にずっと思っているわけにはいかない。ミコトは気を取り直してテツの横たわるベッドに腰掛ける。ギシ、と彼らを支える木製の脚の音が聞こえた。

「壊れないですかね」

「そういうこといわないっ」

テツの腹にグーパンを叩き込む。彼は「ぐほ」とむせて、恨みがましい目をミコトに向けた。

「ぼくは怪我人ですよ？」

「わたしは女の子ですよ」

白けた顔になった男を目からビームを出して威嚇した。恐れをなしたその男は、慌てて首を壊れそうなくらい上下させた。

「どうしてそんなに歳を気にするんですか。ぼくと大して離れてないのに」

「テツはわかってない。わかってないのよつ。二十歳を超えてからの1年は2倍にも3倍にもなるんだからねっ」

「なんという格差社会……」

「高校生にとってひとつ上っただけで全然別世界の人間じゃないの。ましてや5歳年上なんて。あんたたち、わたしのこと年増だとかオバサンだとかいってるに違いはないわ。影で。きつと！」

「偉い被害妄想です」

バシバシとテツの太もを叩きながら22歳のお姉さんは慟哭している。彼女にとって、年齢の問題は消費税問題の次に重要かもしれないなかった。

一通り鬱憤を晴らすと、

「少し寄って」

「ちょ、狭いですって」

もそもそと這い上がってテツのベッドの半分を占領する。転げ落ちないよう気を付けながら振り返ると、困った顔の弟分がいた。こ

うして近距離から見ると、特徴のない顔だなあ、と苦笑せずにはいられない。変わってしまった雰囲気のせいで、少しワールドになったのは幸か不幸か。

「ベッドから落ちるな生き残りゲーム」

「やりませんっ」

「なんだよ、意気地のないなあ。チン。ついてるのか？」

「ええ。幸いなことに、先の戦いで斬り落とされることはありませんでしたよ」

呆れた表情でいって、それからテツは黙り込んだ。

真剣な眼差しにドギマギする。ミコトは内心を悟られないか心配でならなかった。動揺し過ぎて、さらにきわどいエッチトークを放とうという瞬間、彼は故郷の両親でも懐古しているかのように呟いた。

「なんか久しぶりに聞いた気がしますよ、姉さんの下ネタ」

「そのネタを懐かしまれても複雑なんだけど……」

ミコトは子供が生まれてから、その子の前で若き日の黒歴史を親に暴露された気分になった。

「いま思えば、こんな風に馬鹿なことをいつてられる時間がとても貴重なんだなって」

視線を真上にしたテツは、灰色の天井に何かを探していた。きつと壁を突き抜けて、成層圏の向こうまで行っても探しものは見つからないに違いない。すでに失われた風景を彼は探していた。

そんな彼の横顔を見つめ、「そうだね」と消え去りそうな小声で答える。ミコト自身、元いた世界でのものと、この世界でのものとは、冗談にしても使い方や状況は異なっていた。どこまでも落ちそうになる不安を振り払おうと、空元気のつもりで彼女は冗談を口にする。

「エッチトークは嫌い？」

「ミコト姉さんののは、どちらかといえばエロ親父的な臭いがするんですよね」

危うく「ガビン」と口に出しそうになった。それは古いぞ、と自重しなければ絶対に口走っていた。それほどシヨックだった。恐る恐るミコトはテツにたずねる。

「もしかして、そのせいでお姉ちゃんへの好感度ガタ落ち？」

「そんなことないですよ。むしろ安心するっていうか、ミコト姉さんの下ネタに突っ込まないと調子が出ないっていうか。とにかく、好感度には影響しないので安心してください」

「まことに？」

「なんで時代劇口調……。まことですよ。まこと」

それはよかった、と半分起き上がっていた身体の力を抜く。空気

で布のめくり上がる音がした。ミコトは穏やかな気分で薄暗くなってきた部屋の天井を見つめた。

どこからか鈴を鳴らしたような音が聞こえてくる。この世界にも鈴虫はいるのだろうか、と彼女は疑問に思った。

鑑みれば、不思議なことだらけだった。違う世界なのに通じる言語。単語。自分たちと明らかに容姿が違うのに追求してこない周囲の人間。様々な人種が入り交じった社会形態。

でもちっばけな自分には関係ないか、と思考を切り止める。自分の身の回りのことだけで精一杯なのだ。世界とか社会とか、そういったスケールの話は適役な人間に任せておけばいい。

思い切ってテツの手を握ってみた。拒否されないことを確認すると、より強く彼の手の感触を確かめる。ゴツゴツしているけど優しい。そしてあたたかい。それが失われようとしているなんて到底思えなかった。けれど彼の手は、自発的にミコトの手を握りしめてくれることは未来永劫ないのだ。

それが悲しくて、悔しい。どうしようもなく。

「静かだね」

「うん」

「眠くなってきた？」

少し遅れて「うん」と辛うじて返事される。まだ疲労が抜け切っていないテツには、この薄暗い空気が心地いいらしい。ゆっくりと睡

魔に身を委ねようとしていた。

近くから愛おしげに彼を一撫ですると、静かにミコトは立ち上がった。それから堪えきれない欲求が彼女を襲ってきた。その感情に抵抗するために二度三度と頭を振る。早く退散した方がいいと自覚した彼女は、最後にテツの寝姿を目に焼き付けて部屋を出た。

扉を閉めて目を横にやると、見慣れた人物と鉢合わせする。他でもない我が弟である。当然のように付属しているフードのふたりもいた。

キョウイチは姉の姿を認めると齒切れの悪い笑みを浮かべた。あの団長との模擬戦以来元気をなくしていたのだが、いまだに引きずっているようだ。スイと一緒に元気づけようと苦戦した結果は著しくない。

テツの眠っている部屋の前で何かを考え込んでいる。キョウイチは扉に手をかけようとはしなかった。

「テツは？」

「一度目を覚ましたけど、また眠っちゃったわ。疲れてるみたい」

キョウイチは、さもあらんという顔をした。彼自身、模擬戦の日はそれから起き上がれなかった。いままで経験した中で一番疲弊した模擬戦だといえる。なぜならそれは、模擬戦という名の死合だったからだ。

「他のみんなはどうしてるの？」

ミコトがテツの部屋を訪れる前、盛大に酒盛りしていたのを思い出す。ガーティのきもいりで行われているその酒宴は、贅沢の限りを尽くして行われた。シンシアをはじめとした傭兵団の女たちは喜色満面でご馳走に群がり、男たちは少し引き気味だった。

それも無理はなく、普通裏方の女たちが城に招かれるようなことはない。初めて体験する城での出来事は、夢の中みたいに思えることだろう。

「さすがに勢いを弱めたけど。まだ続いてるよ」

逃げ出すついでにテツを見舞いに来たんだけど、とキョウイチは言葉を濁した。

「眠ったなら仕方ないな。アイツは頑丈だから、ちょっとやさつとじゃ怪我の内にも入らないだろうし」

苦笑して彼がいうと、スイも同じような顔をして同意した。幼なじみは共通してテツの頑丈さに造詣が深いらしい。

ミコトもその点については賛同できる。身体のタフネスさでいえば、知っている人間ではトップクラスであるのだ、遠見テツという人間は。無能力というハンデを持ってして剣を振り続けられたのは、この長所によるところが大きい。

「それにしても」

腑に落ちないと暗喩の意味合いを込めてフードを仰ぎ見る。

「あんたたちまで見舞いに来るとは意外だったわ」

「それは誤解というものです。わたくしたちはお見舞いに来たのではなく、キョウイチ様に付いてきただけですので」

「なるほどね。そうですね。そうだと思いますよ」

恒例ともいえる仲の悪さを遺憾なく発揮するふたり。キョウイチは胃の痛そうな顔をしている。

ティアは扉の向こうにいる人物を推し量るような目を向けた。

「あの男……失礼ですが、ミコト様よりも腕が立つのでは？」

「——そう、かもね。もしかしたら、わたしたちの中で一番強いかもしれない。ううん、きっとそうよ」

キョウイチは目を伏せた。スイはどこか遠くでも見ているような目だった。三者三様に思いがあった。それは能力者ゆえの煩いともいえる。剣術を志してきた人間にとって、「強さ」というものは、非常にわかりやすいパラメーターなのだ。それが突然狂った影響は小さくない。

常に先頭を走ってきた弟には激痛だっただろうな、とミコトは思った。同じ草切姓としてわからないこともない。けれど元来、彼女は人との優劣にそれほど執着しない性格だった。競争心がないともいえる。剣士にとってそれは欠点であるらしく、彼女が草切の当主には相応しくないとされた要因でもある。

キョウイチもその傾向はあったものの、気づいた頃には負けず嫌いの少年に育っていた。昔はなんというか、もっと淡泊だった気が

するんだけど、とミコトは思い返す。

「ですがあの剣は邪道です」

「なんですって？」

「ミコト様もご覧になったでしょう。あの禍々しい形相を。そして恐ろしいまでの虚無感を。まるで自分の命など興味のないように剣を振っていたではありませんか。それを邪道といわずして何というのです」

反論したいことは山ほどあった。それでも、この少女に何をいったところで通じることはないのだろう。遠見テツを知らない人間の多くが彼女のような考えに至っても不思議ではない。特に、剣を握ったことのない人間は異口同音に辛辣な感想を述べるはずだ。

この城の浮かれた空気は特殊なものだった。それは相手が団長だったこともあり、事前にキョウイチが負けていたことがある。それによってテツはヒーローに祀り上げられているのだ。

ふと、この喧騒の影に団長の気配を感じた気がした。ミコトは目をつむって下手な憶測を追い出す。一度疑心暗鬼になると思考が固まっていけない。

「ティア。その話をしにきたわけじゃないだろ」

「う……その通りです。申し訳ありません」

キョウイチに窘められたティアはしょんぼりと肩を落とした。

「ゴホン。ミコト様にお話ししたかったのは他でもありません。例の件についてです」

辺りに人影のないことを確かめ、彼女は説明する。

「幸運なことに、いま城は浮き足立っていて警備にも穴ができています。これは絶好の機会といえます。さらにいえば、ダグラスから準備が整った旨の連絡がありました。我々が行動に移せば、すぐにでも対応してくれるそうです」

「なんとタイミングのいいことね」

聞く限りでは不安要素もなく僥倖と評価できる話だった。ティアのいう通り、行動に移すなら、このときをもって他にはありえない反対する要素が見つけれないミコトは、賛成しか口にできないと悟った。

「けれど大丈夫なの？ 確実に追っ手はかかるだろうし、手引きしてくれるのは、城から出ることと脱走先の確保だけでしょ？ ということはつまり」

「合流場所に辿り着くまでは、我々が自力でこなさなければならぬ、ということになりますね」

それがどうしたのか、といわんばかりの表情を見て、ミコトは逆に不安に駆られた。彼女が懸念しているのは脱走手段でも脱走先の事情でもなく、「団員に気づかれずに脱走できるか」だった。

見つければ戦闘になるわけだが、キョウイチ、スイと違ってお嬢様方は守ってやらねばならない。戦力は確実に削られ、そこそこ

か足手まといになる可能性が高い。守りながら戦うことの困難さを説いてやるつか、とミコトは歯噛みした。

「簡単な計画だとは思いません。我々にできることは少しでも自力でなさなければならぬのです。危険は承知の上だということをミコト様にもご理解して頂ければ」

「そうだね。無粋な横口だった。臨機応変に対応する他にないつてのに」

ミコトが詫びると、少女は「いいえ」と大げさに否定した。決してミコトの懸念が正しくないわけではなく、どちらかといえばどうしようもない問題なのだと述べる。ある意味で割りきって考えなくてはならない問題なのだ。

その口調は弁解するものでなかった。ミコトはそれに満足して少女の計画に乗っかる最後の決心をした。もう後戻りはできないぞ、と自らに確認を取る。身体の中の位置からも反対されないことを確かめて、彼女は顔を上げた。

「決行は？」

「明後日の晩です」

ティアは緊張した面持ちで宣言した。それを聞いて内心安堵する。よかった、わたしにはまだ時間が残されてるみたいだ、とミコトは胸をなで下ろした。

明日は長くて短い日になりそうだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7575w/>

異世界で能力者は踊れない

2011年10月14日21時11分発行